

私本太平記

あしかが帖

吉川英治

青空文庫

下げ
天地てんじ
藏ぞう

まだ除夜の鐘には、すこし間がある。

とまれ、ことしも大晦日おおつごもりまで無事に暮れた。だが、あしたからの来る年は。

洛中の耳も、大極殿だいごくでんのたたずまいも、やがての鐘を、偉大な予言者の声にでも触れる
ように、霜白々と、待ち冴えている。

洛内四十八カ所の籠屋かがりやの火も、つねより明々と辻を照らし、淡い夜靄よもやをこめた巽たつみの空
には、羅生門の甍いらかが、夢のように浮いて見えた。その楼上などには、いつも絶えない浮
浪者の群れが、あすの元日を待つでもなく、飢えおののいていたかもしだれないが、しかし、
とにかく泰平の恩澤おんたくともいえることには、そこらの籠番の小屋にも、町なかの灯にも、
総じて、酒の香がただよっていた。都の夜靄は酒の匂いがするといつてもいいほど、まず
は穏やかな年越しだつた。

「さ、戻りましよう。……若殿、又太郎さま。……はて、これは困った。いつのまにや
ら、邪氣も無う、ようお寝やすみだわ」

一色右馬介いつしきうまのすけは苦笑した。ゆり起しても、若い主人の寝顔は、居酒屋の床几しょうぎよに倚つたまま、後ろの荒壁を背に、ぶらぶら動くだけなのである。

「これはちと、参らせすぎたな。やはりお年はお年」

右馬介は侍者じしやとして、急に自分の酔よいをさました。ここは錦小路の、俗に“請酒屋”うけざかやともよぶ腰かけ店だ。こんな所へ、ご案内したと知れただけでも、あとで上杉殿からどんなお叱りをうけるかと。

かつて、自分は六波羅の大番役も勤め、都は何度も見ていたが、又太郎ぎみには、初めてのぞ見物だ。すべてが、もの珍しくてならないらしい。

ところで、こんどの上洛では、彼も驚目したことだが、なんと都には、酒屋が殖えたものだろう。——という感を、こここの亭主にただしてみたら、十年前には醸造元の“本酒屋”ふねりぬきざけも百軒とはなかつたものが、当今では洛中だけでも二百四、五十軒をこえ、その上、近江の百濟寺くんだらでらで造るのや、大和菩提寺の奈良酒だの、天野山金剛寺の名酒だの、遠くは、博多の練緯酒までが輸入されてくる有様なので、請売りの小酒屋も、かくは軒を競つておりますので、ということだった。

なるほど、これは自分たちの国元、関東などでは見られない。

だが、この凄まじい酒屋繁昌は、人心の何を語っているものか。ただ単に、これも泰平の余沢といえる現象なのか。

主従しての、そんな話から浮いて、つい、「何も土産ぞ。奈良酒とやら百濟酒とやら、ひとつ、飲みくらべてみようではないか」と、なつたものだ。

これは、又太郎から、言い出したこととしても、こんなにまで飲ませてしまつたのは、重々自分も悪かつた、と思うしかない。

「若殿、若殿。もはや相客とて、たれ一人おりませぬ。さ、立ちましよう。除夜の鐘もそろそろ鳴る頃……」

又太郎は、やつと眼をさました。^さ醒めた顔は、いとどあどけないほど若々しくて、たどまぶしげにニヤリと笑う。そして、直垂の袖ぐちで、顎のよだれを横にこすつた。

「ああ、よいこちだつた。右馬介、よほど長く眠つたのか、わしは」

又太郎は伸びをした。その手が、ついでに、曲がつていた烏帽子を直した。やつと現に返つた眼もある。

その眼もとには、人をひき込まずにいない何かがあつた。魔魅^{まみ}の眸にもみえるし、慈悲

心の深い人ならではの物にもみえる。どつちとも、ふと判別のつきかねる理由は、ほかの部分の、いかつい容貌かおだちのせいかもしない。

骨太なわりには、瘦肉そうにくの方である。頬のつよい線や、長すぎるほど長い眉毛だの、大きな鼻梁びりょうが、どこか暢びり間のびしているところなど、これは西の顔のんでもなし、京顔あぎとでもない。坂東者ばんとうものに多い特有な骨柄こつがらなのだ。それに、幼いときの疱瘡ほうそうのあとが、浅黒い地肌に妙な白ツボさを沈めており、これも女子には好かれそうもない損の一つになつている。

けれど今、従者の一色右馬介にゆり起されて、無言でニッと見せた羞恥はにかみ笑いや、大どかな風貌の魅力さといつたらない。きつとこの郎党は、この若いおあるじのために、どんな献身も誓つているのではないかと思われる。

とにかく、醜男ぶおとこの方ではあるが由緒ある家の子息よしではあろう。佩いている太刀なども、こんな小酒屋の客には見ぬ見事な物と、亭主もさつきから、眼をみはつていた様子だつた。「されば、お眠りはつかのまでしたが、昼、六波羅を出たばかり。さだめし、上杉殿のお内でも、この深夜まで、どこを何して歩いてぞと、お案じのこと相違ございませぬで」

右馬介の分別顔を、一方は屈託もなく笑い消した。

「ばかな、そんな心配をだれがするものかよ。こたびの上京こそは、せつかく、よい見学として、諸所、くまなく見て帰れとは、国元の父上のみならず、六波羅の伯父上も、くどいほど申されたことだ。まして、右馬介も付いておることと」

「その儀は、とく心得ておりますが、程なく元旦にもなりますことゆえ」

「そうだ、除夜だなあ。ことしの除夜の鐘を、都で聞こうとは思わなんだぞ。明くれば、又太郎も十八歳。右馬介、おまえとは幾つちがいだつけな」

「ちょうど、十歳上に相成ります」

「十の違いか。わしがその年になるまでには、きっともう一度、都へ^{のぼ}上る日があろうぞ。鎌倉のありかたと言い、目に見た都のさまと言ひ、これがこのままの世でいるわけはない。おやじ、もう一壺、酒を持つてまいれ」

「や。そのように、お過ごしなされでは」

「なぜか今夜は、^{はらわた}腸がわしへ歌うのだ。飲むべき夜なれど、腸が申す。まあ、そういうなよ右馬介」

分別は、こちら以上にあるお人である。きかないご気性である点も、日頃の練武修学、すべてにおいてなのだから、かくなつてはお守役の右馬介も、黙つて控えてしまうしかな

い。

と、そのとき、まるで木枯しでも吹きこんで来たように、この小酒屋の軒ばかり、「オオ。ここはまだ開いていたぞ。酒だ、酒だ。おやじ、それに何ぞ温い物でもないか」と、凄まじい人々の吐く白い息が、どやどやと、土間いつぱいに込み入つて來た。たちどころに、土間は小酒屋らしい混雜こくそくと雜言ぞうごんで、埋まつた。

十数名の武者は、みな小具足の旅姿だった。といつてもあらましは、足軽程度のにんてい人態にすぎない。争いあつて、一碗ずつの酒を持ち、干魚か何かを取つてはムシャムシャ食う。そしてやや腹の虫がおさまり出すと、こんどは野卑な戯れ口ざくわくちで果てしもない。

彼らには、片隅の先客など、眼の外だつた。又太郎の方でも、思わぬ光景さかなを看として、声も低めに、ひそと、ただ杯を守つていた。

「右馬介。……どうやら鎌倉者らしいな」

「さようで。話ぶりでは、鎌倉から紀州熊野へ、何かの御用で行つた帰路の者かと察しられますが」

「む。うなづかれることがある。先ごろ、熊野新宮へ御寄進の大釜おおがま一口に、大檀那鎌倉ノ執権北条高時しつけんと、御銘ぎよめいを鑄いらせたものを運ばせたとか伺つていた。それの帰りの

「と組だらう、この輩やからも」

「さてこそです。どうも最前から、犬を連れているのは妙だなと、見ておりましたが」「なに犬を。どこに」

——犬の一語が、ふと彼らの耳を刺したとみえる。大勢の眼が初めて、ぎょろと、二人を見た。

だが、又太郎の視線とは、ぶつかり合うよしもない。

なるほど、立派な犬が人々の蔭にいたのだ。紀州犬としても優れた名犬にちがいなかろう。琥珀色こはくいろにかがやく眼、黒く濡れ光つている鼻頭びとうのほか、全身の毛は雪を思わせる。そして大きなこと、白熊のようなどといつてもよい。

「ははあ、御献上物だな、この犬殿けんだいも」

酒板に頬杖ほおづえついて眺めつつ、彼の醉眼にはその犬が、だんだん、北条高時その人みたいに見えてきた。

高時が、鎌倉御所のうちで、そうであるように、この犬も、武者足軽の群臣をしたがえ、旅路にも持ち歩かせているらしい高麗縁こうらいべりの半畠はんだたみを土間に敷かせ、その上へ、ゆつたりと、尻をすえているのである。

首輪は太縫の紅白の絹づな、銀のかざり鎖。わきには、布直垂の犬飼が二人、主に仕える」とく付添つていた。そしてここへ着くやいな、犬殿への供御の物を、まず第一にと、ささげていた。

「…………」

滑稽である。じつにおかしい。おそらく又太郎には、犬好きな執権の有名なる犬痴性が、この奇妙な実在によつて、よけいおかしく思い出されていたものだろう。

現執権高時の田樂（土俗的な歌舞）ずきも、狂に近いが、闘犬好みは、もつと度をこしたものである。鎌倉府内では、月十二回の上覧闘犬があり、武家やしきでさえ闘犬を養つて、それを美食で肥えさすのに、憂身をやつさぬ者は少ないとか。だから名犬といえば、銭百貫から数百貫の高値をよび、わけて高時自身の愛犬が、あまたの家来に護られて道を行けば、往来人は笠をぬいで、路傍にひざまずくといった風な奇觀も珍しくはないという。

「……ふ、ふふふふ

つい、又太郎は、独り笑いを杯に咽ばせてしまつた。と共に、酒に酔つた犬飼の手綱を抜け、いつのまにか側へ来て、自分の足もとを嗅いでいた紀州犬の鼻ヅラを見たので、いきなり足をあげて蹴飛ばした。——それは、まったく彼の意識なき衝動か、酒興の発

作ではあつたらしいが。

人間どもに仕えられて、近ごろ驕おごつていた犬である。

けんつ——

と、するどく悲鳴して、四肢を退くと、怒りを眸に示して、ひくく唸うなつた。

犬以上にも驚いたのは、飲みはしやいでいた人間どもの方である。場所はせまい小酒屋の土間。「——すわ」といつても、小早い身うごきは出来ツこない。どつと、壁を背にした空間を前に作つて、きて、あらためて一せいに相手の在る所を睨めすえた。

「やいっ。——蹴つたな、蹴りおつたな。神宮の禰宜ねぎどのから、鎌倉殿へ御覽に入れようがため、おれどもが預かつて、道中これまで護つて來た大切な、おん犬をば」

さいりよう宰さい領りようは、足軽頭とうか。

太刀のつかを叩いて、犬の代りに、吠えている。

「は、は、は、は。……おん犬とは」

またしても、又太郎が嘲笑するので、右馬介は気が気でなく、酒板の下で、その袖を、引つ張つた。そして、自分が詫わびようとでも思つてか、床几の腰を浮かしかけると、

「右馬介、おまえは黙つておれ。わしのしたことだ、わしが物申す」

すると、返辞は、足軽頭が奪い取つて。

「なに、物申すだと。御献上のおん犬に、土足をくれて、なんの言い条がある」
「ある」

又太郎は、残りの一杯を、ゆっくり飲みほした。

「犬に訊け。蹴つたのではない。足で頭をなでてやつたまでのことだ」

「ば、ばかな言い抜けを。蹴られもせぬおん犬が、なんであんな声を立てるものか」
「いや、けもの獸けんだんじょがしんによるこぶと、ああいう声を出すものだ」

「こいつめが、人を小馬鹿にするもほどがある。酔うての上の悪戯わるごかと思えば、さては故意にやつたな。けんだんじょ検断所へつき出してやる。さあ立て。者ども、そいつらを引っぱり出せ」

「まあ、待て、わしの言が、うそかほんとか、見た上にしても遅くあるまい。これこれ、そこな犬殿の家来。もいちどわしの前へそれを曳いて來い」

「どうする」

言つたのは、大勢の端で、犬を抑えていた布直垂ぬのひたたれのおさ犬使いらしの男だつた。

「——おれが抑えていればこそだが、押ツ放したら、汝われのどこへ噛ぶりつくかも知れぬぞよ」

「おおよいとも。もいちど足であやしてやる。放せ」

放されたが、犬は一気にバツとは来ない。要心ぶかく、のそのそと近づいた。そして、底知れぬ獰猛さを雪白の毛並みにうねらせた。だのに又太郎は、われから革足袋の片方を上げて、彼の鼻ヅラへ見せている。

犬は疑つた。ちよつと、姿勢を低くした。が、それは支度か、いきなり桃色の口をかつと裂き、相手の足首へ咬かぶりついた。咄嗟に、又太郎はその足を引くことなく、逆に、足のツマ先へ槍のごとき迅さを加え、犬の喉ふかくまで突ツこんだ。それは、あるまじき光景だつた。異様な絶叫が人の耳を打ち、白い尾も胴体も意氣地なくころがッた。

いや、それも見ず、又太郎は小洒屋を飛び出していた。幾人かを刎ね飛ばした覚えはある。だが、振向いて後ろへ呼ぶには、数百歩の宙を要した。

「右馬介、右馬介つ。早く來い。逃げるが一手だぞ」

わざと五条橋を避け、主従とも、七条河原へまぎれたのは、相手の追尾よりも、帰る先と、身分を知られることの方が、より恐かつたからにちがいない。

「いやどうも、若殿のお悪戯には、驚きまいた。物にもよりけり、相手にもよるものわざやはり酒のなせる業だつたな」

「そんなお悪いご酒癖しゅくべきとは、ついぞ今日まで、右馬介も存じませんでしたが」

「はははは。犬も悪かつた。あの傲慢ごうまんな生き物が、わしには、まざと、鎌倉の執権殿そつくりに見えてきたのだ。そこが酒だな。もう余りは過ごすまい」

「ここは闇の河原、ご放言も、まず大事ございませぬが、そんなお胸の底のものは、他所では、ゆめ、おつしみなされませ。先刻の小酒屋でのお振舞なども、金輪際こんりんざい、ご口外は」

「右馬介は、いつまでわしを子供と思うてぞ。知っている。心得ておるよ。……ところで、

除夜の鐘はまだか」

「はて。除夜はどうに過ぎております。やがて東山の空も白みましようぞ」

「では、はや元日か。さても、おもしろい年を越えたな。今年は初春はるの夢占ゆめうらもよからん氣がするぞ。なあ右馬介、もう寝るまもあるまい。宿所へ戻つて、若水わかみずでも汲むとしようよ」

やがて二人の姿が帰つて行つた先は、北ノ六波羅の一郭かくだつた。

むかしは平家一門の車駕しゃがが軒なみの甍いらかに映えた繁昌のあとである。平家亡んで、源ノ頼朝、実朝さねともの幕府下にあつたのもわずか二、三十年。——以後、北条氏がとつて代つてか

らは、中興のひと北条泰時^{やすとき}の善政、最明寺時頼^{さいみょうじときより}の堅持、また、元寇^{げんこう}の国難にあつた相模太郎時宗などの名^{めいしゆ}主も出て、とまれ、北条家七代の現執權高時の今にいたるまで、南北の六波羅探題以下、評定衆^{ひょうじょうしゆう}、引付衆^{ひきつけしゆう}、問注所^{もんちゅうじょ}執事、侍どころ所司^{しよし}、檢断所、越訴奉行などのおびただしい鎌倉使臣が居留しているその政治的聚落^{じゅらく}も、いつか百年余の月日をここにけみしていた。

夜はしらむ。

年輪をかさねた六波羅松の松の奏^{かな}でに。

近くの八坂ノ神^{やさか}の庭燎^{にわび}、祇園^{ぎおん}の神鈴など、やはり元朝は何やら森^{しん}嚴^{げん}に明ける。

明けて、ことしは元亨^{げんこう}二年だつた。

ただしく過去をかぞえれば、武家幕府の創始者、頼朝の没後から百二十二年目にあたる初春^{はる}である。

又太郎は一室で、清楚な狩衣^{かりぎぬ}に着かえ、烏帽子も新しくして、若水を汲むべく、庭の井筒^{いづつ}へ降り立つていた。

彼の伯父なる人とは、六波羅評定衆の一員、上杉兵庫頭^{ひょうごのかみ}憲房^{のりふさ}である。ここはその邸内だつたのはいうまでもない。

「アア都は早いな」

井筒のつるべへ手をかけながら、又太郎はゆうべの酔の気もない面おもてを、梅の梢こずえに仰向むけむけた。

「——國元のわが家の梅は、まだ雪深い中だろうに。……右馬介、ここのはもうチラホラ咲さきいているの」

「お国元のご両親にも、今朝は旅のお子のために、朝日へ向つて、ご祈念でございましようす」

又太郎に、返辞はなかつた。彼も若水の第一をささげて、まず東方の人はいに、拝はいをしていた。

彼にとれば、ここは旅先の仮の宿所だ。ひまで、のんきで、身からだをもつてあますほどである。が、伯父の上杉憲房には寸暇も見えない。元日の朝、大書院から武者むしゃゆか床とそを通した広間で、家臣の総礼をうけたさい、共に屠蘇とそを祝つたりはしたが、あとは顔を合せる折すらなかつた。

次々の賀客を迎むかえ、客がとぎれると、彼自身、駒こま飾かざりした騎上こまかざの人となつて出て行くし、夜は夜で、探題からの迎えがくる。

「いや、六波羅勤めも忙しいものだな。伯父上が口ぐせに、帰国の日を待つお気持ちもわかる」

二日の昼。

彼は一ト綴とじの和歌の草稿をふところに、冷泉れいぜい為定ためさだの四条の住居を訪ねていた。為定は後に“新千載和歌集”を撰した当代著名な歌人である。東国育ちの武家の子又太郎にしては、そんな文雅な人を訪うのはためらわれたが、これは母との約束だった。

元来、母系は勸修寺家の公卿出くわげであつたから、彼の母もわが子をただあじけないばんどう坂東ばんとう骨ほね一邊の粗野な武人には仕立てたくはなかつたのだろう。兵家必修の日課のほか、つねづね彼へ和歌の学びをもすすめていた。そしてこんどの上京には、ぜひ冷泉どのの門をたたいて、末長く詠草を見ていただくようにお願いせよと、手紙まで持たせられて来たのであつた。

折よく、在宅していた為定は、

「おう、めずらしいお文」

と、手にした仮名文かなぶみをなつかしみ、さてまた、これがその人の子息かと、ひと間のうちに、しげしげと見て。

「ほ。其許そこもとがこのお便りにある足利あしかが清女せいじょどのの御嫡男ごちやくなんかの」
 「いえ……」と又太郎は、うすらあばたの頬を、どぎまぎ紅くして、さらに居すまいを改めた。

「早逝そうせいでしたが、兄義高があり、私は次男にござりまする」

「が、まあ、兄君がおわさねば、其許がお世継じやろうが。して御官位は」

「申しおくれました。——下野国足利ノ庄の住、貞氏じゅうさだうじの次男、足利又太郎高氏たかうじとい

ます。十五で元服の折、治部大輔、従五位下をいただきましたが、何もわからぬ田舎者で

「御卑下ごひげにはおよばぬ」

為定は、うちけして。

「下野足利ノ庄といえば、天皇領の御住人」

「はい。足利ノ庄の内には、世々、八条院の御旧領があり、それが今上きんじょうの御料に移さ

れておりますゆえ、畏れあれど、申さばわが家は、朝廷の一被官ひかんでもござりまする」

「それ御覽じ。お血筋ごれいといえば北条殿には劣らぬ正しい源家の流れ。家職といえれば現帝の御被官。なぜ、遠いお旅をば、供人も召されずに」

「とかく、故なき上洛は、鎌倉の幕府の忌むところでござりまする。が、父貞氏の健やかなうち、少しなと世上の見聞けんもんを広うしておきたいものと、たつて父母にねだつて出て参つたのです。忍びやかでこそ、六波羅の身寄りの家にも置かれますので」

「なるほど、朝家ちょうかの御被官であるだけでなく、幕府の御家人でもおわせられたの。こりや、むずかしかろ」

やはり世事にはうとそうな老歌人の言である。為定は抜け歯の多い口をあいて笑つた。

老歌人の為定から「……お供も召されずお一人でか」と、いぶかられたのもむりはない。いつもの右馬介さえ今日は連れていなかつたのだ。都は知らず東国では源氏の名流、武門の雄と見なされている足利氏の曹司ぞうしである。ゆらい遠国者えんこくしゃの上洛ほど派手をかざつて来るものといわれているのに、飄ひようとして、一人で門を叩くなどはおかしい。先で偽者と過られなかつたのも、思うに、彼にはこんな場合もあろうかと、とくに心をつかつてくれたらしい母の添文そえぶみのお蔭だつた。

彼にもそれが分つていよう。やがて為定の門を辞して、あてどなく町を行くうち、ふと、石の地蔵尊を路傍に見かけると、何やら袂の物を供物にささげてそれへ額ぬかづいていた。それは為定の家で茶菓子に出た粉熟ふしつくであつたが、甘葛あまくずと餅で作つた美しい五色の菓子は、

彼がまだ手を合せて いるうちから、そこらにいた貧しげな童たちが、互いに翡翠みたいに鋭い眼でねらつて いた。もちろん又太郎は、自分が十歩とも去らないうちに、供物が消えてしまうであろうことも知つていた。

——が、又太郎には快かつた。いつからか、母は地蔵尊を信仰して いて。「そなたを生んだ難産の折もお救いであつたし、そなたの疱瘡の軽うすんだのもお蔭であつたぞや。どうぞ、そなたも生涯の守護仏として給べ」と、何度も聞かされて いたことかしれない。

でも、これまでには、そんな心にもなれなかつたものが、ふと旅の路傍で、こだわりもなく、今のような姿を神妙に彼が見せたのは、これも母と離れて、かえつて、子の中に、母がほんとに分つていたからであろう。——で、彼は途々、母がよく夜語りにした地蔵尊の仏説などを、独り想いつづけながら歩いた。

羅刹地獄の六道の娑婆苦しゃばくも能く救うというお地蔵さまも、まことは、一仏二体がその本相であり、半面は慈悲をあらわして いるが、もう半面の裏のおすがたは、忿怒勇猛な閻魔王おうおうであつて、もともと一個のうちに、大魔王と大慈悲との、二つの性を象つて いるものですよ、と母はよく言つた。——幼い耳に沁みたそのふしげをやら怪しさが、彼にはいまだにこびりついている。

「……そうか。地蔵の両面とは、つまりは、そのままこの又太郎高氏のことだつた。わが子の両面をよう知つてゐる母上が、それで、たびたびこのわしに」

「彼はその日、心にきめた。母のことばに従つて、地蔵菩薩を以て終身の守護にしようと思つたのである。」

六波羅はもう夕^{ゆうべ}の灯だつた。彼の姿を見ると、右馬介はすぐ侍部屋から走り出て迎えたが、なにか冴えない容子ですぐ告げた。

「若殿。ついにここのご宿所を喰^かぎつけてまいりましたぞ」

「喰^かぎつけて。……誰がだ」

「大晦日^{おおつごもり}の小酒屋での」

「あ。あの犬家来どもか。それが」

「探題殿へ訴え出たため、検断所から何やら御当家へきついお沙汰のようです」

「足利又太郎と知つたのか」

「そこのほどは分りませぬが、上杉殿には、甥^{おい}どのが立帰つたら、すぐにも旅支度して、東^{あずま}へ帰れとの仰せなので」

「伯父上は、奥か。——いや旅支度など急がずともよい。ちょうどおいでなれば、ほかに

お願ひもある。さは案じるな、右馬介」言ひすてて、彼はすぐ奥へ入つた。

「和殿の六波羅泊りも、はや二十日余りだの。洛中洛外の見物も、まずは、あらましというところか」

「はい。ここをわが家のように、わがままばかりして」

「なんの、他人行儀」

上杉憲房は以前からこの甥が好きらしい。短所もよく知つてゐるのである。又太郎の方でもあまたな一族中でもほかならぬ人と、甘えた^{たの}恃みを抱いていた。それはこの人が、母の兄であるという親近感だけのものではなかつた。

「——その上にもです。右馬介から聞けば、私のつまらぬ^{わるさ}悪戯から、御当家へまで、何か、探題殿よりむずかしい御尋問の沙汰がありましたとか」

「御献上の犬へ、和殿が足を食らわせたとかいうあの事よな。よいではないか。わしはおもしろいと思うておる。ただし鎌倉の執権殿と、そなたの母^{ははじや}者には、べつな意味で、いづれへも聞かせられんがの。はははは」

まるで、おだてるような語調だが、すぐ声を落して。

「ま、先刻。右馬介へも申しておいたが、とにかく、こたびの和殿の旅は公ではない。去年の暮、足利の御厨から伊勢の神宮へ、例年の貢ぎあるを幸いに、その上納物の列に和殿を加えて、帰路をそつと、この都へ、立ち廻らせたものじやつた。……いちどは都も見せておきたい、という親心と、和殿のたつてな宿願でな」

「はい」

「で。犬の沙汰などは些事さじとするも、万が一、さる密か事が公となつてはまずい。あとの処理はこの憲房にまかせられ、早うここを立つのが上策ではあるまいかの。かたがた、都の内にも、もう見る所もあるまいし」

「されば、もとより仰せには従いますが、ただもう一事、心残しがざいますので」

「まだ、なんぞ？」

「うけたまわれば明三日、帝みかどには朝覲ちょうくんの行幸みゆき（天皇が父皇の御所へ拝賀にゆくこと）あらせられる由。今日、冷泉どのをお訪ねした折、伺いましたが」

「そりや、相違ないが。して」

「いづれは御警固として、六波羅衆も、お立ち迎えいたすことございましょうず。又太郎とて治部大輔じぶのたゆう、無位の布衣ほいでもございませぬ。立武者のうちに加えて、よそながらでも、

御盛儀を挙げるわけにはゆきますまい。せつかく、都へ来あわせていた身の冥加に」憲房は黙つてしまつた。甥の熱意に、聞き惚れていたわけではない。当惑顔というものだつた。また、若さというものは、分別者には出ない奇想を抱くものだと半ばあきれ顔にも見える。

しかし憲房にも、その願望をかなえてやりたい気は多分にあつた。こんどの旅にしても、単なる都見物が当人の目的でもなし、また肉親のすすめでもない。いまの当主貞氏に繼いで、いつかは当然、又太郎高氏が、足利一族の棟梁とうりょうに立つ日がくる。——で、この惣領そうりようの教養には、欠くところないつもりだが、ただ、なにぶん東国の一平野に育つたままではと、それのみは彼の母すら不満としていたからだつた。

どう説いたか、または憲房が、すすんで一策を案じたのか。ついに彼の望みはきかれ、よそながらでも、明日の行幸を挙してからの帰国と話はきまつた。くれぐれ、その直後にはすばやく離京するようにと、憲房は念を押した。伯父甥、それらの相談で夜をおそくした。又太郎はすぐには枕になすめなかつた。

大きな御手

あいにく、正月三日の空は、薄曇りだつた。そして折々は映す日光が、北山の遠い雪を、ふと瞼にまばゆがらせた。

——天皇の鸞輿は、もう今しがた、二条の里内裏さとだいりをお立ち出でと、沿道ではつたえていた。行幸ぎょうこうや御幸ごこうを仰ぐのはめずらしくない都の男女だつたが、朝覲ちょうくんの行幸みゆきと知つて「……今日ばかりは」の、ひしめきらしい。

まことに、今上きんじょう（後醍醐天皇）としても、公な父皇への御訪問は、即位後、初めての御儀だつた。今後とて公な御対面としては、御一代あるかないかもしれないものである。子が父を訪い母と会うにすら、こんな儀式が必要事とされるのも、天皇なればこそ、おわづらいよと、たくさんな庶民の中には、その不自然な御環境に「——なんたる、御不自由さか」と、お気のどくを感じた者もいたかもしれない。が、おそらくは万人が万人、それとは逆に、

「おなじ人間と生れながら」

と、金鳳きんぽうの御輿みこしにある人と、板ぶき小屋に生れついた凡下ぼんげとをひきくらべて、つい羨うらやましくも見たであろう。

といつても、人皇じんのう九十六代の現世まで、天皇と民とは、生れ出ぬ以前から、こうあるものと、すでに約束づけられていた國土である。それ以上には、何を思いもせず悩みもせぬ群集ではあつた。なおさらのこと、天皇御自身にも九五きゆうごの尊そんを、自由のない不幸な地位などとは、ゆめ御思惟ごしいするはずもあるまい。

いや、みかどとしては、むしろ今日の朝覲の御儀も「時を得たしるしそ」として、満足以上なおここち栄えのうちに、未来のおん夢も、さまざまだつたのではあるまいか。

今上の後醍醐は、じつに前例のないほどおそい御即位だつた。皇太子たるまま十年も臣下の吉田大納言定房さだふきの邸に養われ、つい四年前、おん年三十一で、万乗の君となられたばかりである。——時をえて、という御感慨は、今日ばかりのお胸ではない。

やがて。

先駆が通つて、しばらくすると、彼方からおん輿の屋根にきらめく金色の鳳とりがゆらゆら見えて來た。みゆき先は、つい京極の大炊御門おおいみかどなので、関白、諸大臣、公卿殿上人ら、すべて供奉ごぶは徒步かちであつた。

それにせよ、列の流れははなはどおせい。

せまい四ツ辻などにさしかかると、まるで林みたいに立てた両側の民家の門松の枝が、

おん輿の御帳みちようにつかえて、内なる龍顔をふとあらわにしたりした。

道に白砂をしき、軒に門松を立て渡す風は、その頃には、正月だけの景色でなく、大幸やら祭渡御まつりとぎよには、令が出て、時を問わぬ慣ならいであった。が、時により土地とこによつて、竹、さかき、椎、しきみ、椿なども立てたりはする。

いすれはこれも、唐風俗の移入からであろうが、要は、民家の貧しさをおおうためにあつたのだから、帝室では、由来、門松は立てなかつた。

ほどなく、おん輿は、京極おもての院の棟門むなもんにつく。

夙つゆに、お待ちうけらしいたたずまいである。院司いんじの上奏あつて、すぐ乱声らんじょう（雅樂部の合奏）のうちに、鸞輿こうだは、さらに中門へ進められた。

みかどの父ぎみ、後宇多法皇は、まだ五十五、六でおわせられた。が、御愛人の遊義門院の死に会うて、御法体ごほつかいとなられてからは、俄に、老けまさつてお見えであつた。

が、ひとつには。

二ノ御子尊治みこたかはる

（後醍醐の御名）の即位をやつと見給うたこと。また、院政という歴代にわたる厄介な二政府式へいさいの弊も廃して、天皇一令のむかしに復元されたので、「……まず、これで」という御安息やら、閑居のおん空しさなども、手伝うてのことと、侍側や蔭の女

房たちは憂いもなくお見上げしている。

どれも当つていなくはない。

けれど、父皇の老いの影や、過去半生の真の御苦労さなどをよく知る者は、やはり御子みこの後醍醐に如く君はなかつた。

明け暮れ、北条氏という姑に、いじめ抜かれたためよ。

——もし世に、幕府というものがなかりせば。

今も今とて、父子対面の賀の御座^{ぎよざ}に向い合われると、御子のみかどには、父皇のおやつれが、すべて対幕府の御心労にあつた果てと仰げて、いきどおろしく、うら哀しく、じんとお胸にせまるのだった。

いきさつは、かんたんでなく、また朝幕の間にわだかまる禍根も古い。

「…………」

つねには、なかなかお会いの折とてないので、後宇多法皇にも、とつ、おことばも、すぐにはなかつた。

香染^{こうぞめ}の^ぞおん衣^け、おなじ色のみ袈裟^{けさ}、まき絵の袈裟^{けさ}笛^{ばこ}をそばにおかれ、寝殿中央に御座^{ひさし}^{おまし}あつて、まんまえの廊の玉座^{ぎよはい}に束帶低う^{”御拝ノ礼”}をとられた天皇のおすがたを、た

だじつと見まもつていらつしやる。

親ごころ、推はす量かるに。

——さすが違うものかな。吉田定房の家にあつた皇太子の頃とはずんと違つて、ああ、ゆゆしい大君たいくんぶりになられしよ。

と、頼もしげに、御覽ごろうぜられて いるかに思われた。

こう御対顔の間は、奏樂も止み、関白ノ内経、諸大臣らは、床ゆかのすえにひれ伏し、西と東の中門廊にも、多勢の上達部かんだいちべ（上級の公卿）が、御簾揚みすげわたした辺りの一点を、肅と、見やり奉つていた。

すると、その中にいた吉田ノ大納言定房が、とつぜん直衣の袖ぐちを眉にあてて泣きすすりをもらした。みかどがまだ尊治たかはる親王しんのうとよばる御身分にすぎなかつた幼少から、わが家にてお養そだて申しあげて來たいわゆる乳父めのとの彼であつた。「……さてこそ、無理からぬ。そのかみの古いきごとなど、さまざま思い出しての、うれし泣きであろうに」と人々は、今日の事に会つた定房の感慨のほども察していた。

ここで“御拜ごはいノ礼”がすむ。

みかどは、一たん階はしノ間から公卿の座へ戻られ、法皇もまた内へ入らせ給うて、あらた

めてのお席となる。

そして再び、樂部の伶人の奏楽につれ、次の御宴では、法皇もお茵ばかりのおくつろぎだつた。——また、内裏から御供してきた女房たちも、一の車、二の車、三の車と、それぞれの簾から匂いこぼれて、末の廂の間に妍けんを競うた。

おくつろぎの宴となつてからは、みかども法皇も、時をおわすれ顔で、まことに御父子のおん仲でこそと見えた。

「主上きみには、ご受じゅぜん禪（み位をうける）」の後は、政務のひまにも、講書の勉つとめ、詩文の会など、ひたぶる御勉強のみと伺うが、余りな御精励もおかしだが案ぜらる。まれには、ちと、おすごしもよから」

法皇は、後醍醐の御酒量のほども知つておられる。み手ずから酌してあげぬばかりなおすすめの仕方であつた。

酒間には、法皇のお覚えよき寿王とかいう冠者の『落蹲らくそんノ舞』などあつて、女房たちの座も初春はるらしい灯に笑いざめいた。

——頃を見て。

「あまりお醉も深からぬうちに」

と、頭ノ藏人冬方とうくらんどふゆかたが、みかどの前に、お笛管お笛管を供える。

これは朝覲の式の古例とか。後醍醐は、父皇のための御笛を、み手に取つて吹いた。

そとの濃い闇には、雪が音もなく降り出していた。聞きいる人たちの幻想には、白々と戯れる雪の斑ふが、みかどの豊かなおん横顔や笛の手に重なつて見えるように思われた。

お年ばえといい、おからだの逞しさたくまといい、まさに壯者だうしゃのお盛りであつた。どちらかといえ巴、御性情も面ばせも、後宇多には似給わず、亡き母ぎみの談天門院だつてんもんいんの美貌をうけていらつしやる。似絵師にせえのことばでよく、『藤原顔』というあの瓜実顔うりざねがおではあるが、鳳眼ほうがんするどく、濃いおん眉、意志のつよげなお唇もと、また、ひげ痕も青々と、皇系にはまれな男性的な御風貌であつた。

わけて、常人つねびとの印象となるであろう点は、笛の孔に無心な指の律動を箇おさのように弾ませていらつしやるそのお手のなんとも大きなことだつた。貴人にして力士のようなお手である。把握欲と闘志の象徴とでもいえるものか。みなならぬ天賦の御氣質のほどがそれは窺われる。

で、思い合わされるのは。

いまは九重の上、お噂とて、なかなか洩れ難いが、かつて吉田定房の邸におられた皇太

子時代には、そうした豪氣による放埒の御片鱗が、しばしば世上に聞えぬでもなかつた。

たとえば、その当時。

ある年の秋の一夜だつたが、西園寺の前ノ太政大臣実兼さいおんじのさきのだいとうだいじんじつくみの末の姫が、とつぜん北山の邸から姿を消した事件など、ひとつの騒ぎであつた。

姫はまだ十七、深窓の愛しみにくるまれていたが、佳麗な容姿はかくれもなく、つねづね若公卿ばらの野心のまとであつた。

それだけに、西園寺家では「——いかなる悪党の仕わざか。もしや野伏のぶせりから人買いいの手にでも渡されてか?」などと、全家の憂いをあげて、八方せんぎの手をつくしたところが、なんと、姫を盗んだ下手人は、皇太子尊治の君とやがて知れた。

おひとりでは出来ない芸で、これには日頃の御学友なども加担して、いたにちがいない。が、さすが乳父吉田定房の家には連れず、よそに隠しおかれて、こよなき恋の巣と、潜んでおいでだつたものである。相手が相手、西園寺家の方でも、やがて、鳴りをひそめてしまつたのはいうまでもない。

皇太子の姫盜みに会われた西園寺家の末むすめは、禧子よしこというお名であつた。

しばらくは、皇太子との浮名沙汰など姦しく、他所に隠されておいでだつたが、やがて

年経て、はからずも尊治が万乘の君となられたので、禧子にも女御入内によごじゅだいの宣旨がくだり、またほどなく立後の儀も挙げられて、いまはただしく今上後醍醐の皇后みきさきと仰がれる御方とはなつている。

「なにが御運かしれぬものよ」

と、ひとは羨み、皇后の父実兼なども、

「——この齢になつて」

と一家の榮えをほくほく顔とも聞えたが、しかし、皇后には、いくほどもなくお淋しげな影が深まつていた。

皇后の侍きに、阿野中将あのなかむすめの女めので廉子やすことよばるる女性があつた。廉子の美貌はいつか天皇のお眼にとまつて、すぐ御息所みやそんどころの一と方となつた。花の命は短くて——とはまま後宮の女性の卿かこちごとであつたが、廉子との御情交だけは異いなものがあつた。彼女の誇りも君寵も、眼にあまるものがある。

もつとも歴世、後宮の嬪ひんには、大みきさきに次いで、女御によご、更衣こういなど、寵妃の数にかぎりはない制度だつたので、ひとり後醍醐のみを怨じ奉る筋あいもない。

それと、三十一という遅い御即位だつたせいもあるう。

当時の人の筆に成る『増鏡』にも、他の一女性について。

——この大納言（藤原為世）の女、為子の君とて、坊（東宮）のおん時、かぎりなく思されたりし御腹に、一ノ御子（尊良）女三ノ御子（瓊子）、法親王（尊澄）など、あまたものし給ふと、見える。

すでに女性の御経験もこれほどでおわしたのである。思うに、天皇御自身は、後宮制度という百花の園においてのみ、その人間性を恣にできる天然の童のようなものだつた。きれいと思えばむしり取り、飽いたとすれば抛ち、なお、好きで好きでならないものは、これを落花ひんぶんの棒になるまで離さない、いとも無著無造作な、お愛し方なのではなかろうか。

——近頃ですら、こんな話が洩れている。

やはり天皇の御寝（ぎよし）に侍るひとりに、大納言ノ典侍（すけ）という麗人がある。いつしか、東宮仕えの堀川ノ具（ともちか）親と忍び逢うて、宮中から馳け落ちした。後醍醐は、めざましいお怒り方で、嵯峨かどこかに隠れていたのを捕えさせた。

そしてさて、この憎い女をと、かの源氏物語にある臘月夜（おぼろづきよ）の内侍（ないし）と関係した光源氏の

ようには、御处分の事かと思つてゐると、そのまままた後宮において、なんらのお変りも見えず、

「……朕ちんも皇太子のころにはしたこと」と、近習に御一笑を見せられただけだつたという。

みかどの笛に、京極殿の灯は更ふけていた。

みかどは、古例の曲を吹き終つて、

「ふつつかなお聞え上げを」

と、御父の法皇に一礼して御座へ返つた。

ほつと夢幻から醒めたような息の白さが灯を霞める。女房たちの座からは、ふと、みかどの方へ笑みを流した花の顔が多い。今を時めく寵妃わらひとたれ知らぬはない阿野廉子やすこなどの艶姿あすがたであつた。

女房の座には、その廉子のほか、さきの妃為子きよしきの妹小大納言こだいなげんの君、帥そちノ典侍、少将すけノ内侍、尾張おわりノ内侍。——端には、夏引なつびき、今まいり、青柳などとよぶ雑仕ぞうしまでが、こぼるる花かごのようないたのである。

御笛の間、笛の歌口におん眼をふさいで吹きすましていたみかどを仰ぎ見ながら、胸そ

れぞれな彼女たちが、どんな恋情や喘なさを、そのおん横顔へ寄せ合っていたかは、われに返つた後の彼女らの吐息にもよくわかる。

さて、ここでまた御酒一興。

次いで、くだけた“お遊び”が始まる。つまり公卿たちの催馬樂（さいばら）（歌謡）や管絃だつた。
中宮ノ大夫実衡の琵琶、大宮ノ大納言の笙、光忠宰相のひちりき、中将公泰の和琴、
また笛は右大将兼季、拍子は左大臣実泰。

——かくて、つきぬ御遊の後、お帰りとなつたのは、夜もほの明けていた頃だつた。
還御は雪の中。

やがて、夜どおし陣ノ内（警固区域）に立武者していた滝口や六波羅の人数がくずれ去つて散るころは、陽もギラギラと淡雪の道は泥に解けだしていた。

「いかがでした、若殿」

「昨夜か」

「されば、お望みのことば

「む。院の舎人に物をくれて頼うだら、中門の遣り水の裾の木立に忍ばせてくれた程に」
「では、上（天皇）のお姿を、まざと御覧ぜられましたな」

「いや、雪さえ降るに、御簾の内ぎょれんのうち、明らかくはなかつたが、笛の座につかれたみ姿の線、おのずからな御威容、さすがはと拝せられ、世上、しきりに新帝の英邁えいまいを沙汰するのも、道理よと、うなづかれた」

「それは、よいお国みやげ。さようにお望みもかのうた上は」

「才。伯父上との約束。いちど六波羅のやしきに戻つて、支度をあらため、すぐにも都を立ち去ろうよ」

夜来の警固武者のなかに立ち交じつていた足利又太郎と右馬介の主従であつた。

暇乞いは、先の夜にすんでいる。それに伯父の憲房も、探題の正月行事でいなかつた。ふたりは一睡の後、湯漬など食べ、旅支度にかかつっていた。

すると、侍部屋の廊のかべを、サラ、サラ、と撫でつつ人の近づいてくる気配がした。そこの遣戸やり戸をスウと開けて、

「おじ様、お名残り惜しゅうござります。もう御帰國なされますか」

と、それへ坐り込んだ小法師がある。

まだ十一、二歳でしかあるまいに、いたましいことに、盲めいであった。

この盲少年は、母方の人の子なので、又太郎とは従弟にあたる者だが、父は地方の乱で

早くに戦場で最期をとげ、子はこんな不具だつたので、いかなる宿業ぞと、母なるひとも、足利ノ庄の一尼寺に入つてしまつた。と、いう身の上なので、憲房が都へ伴い、さる公卿の許へ、琵琶の習得に通わせていたのである。

「……才、覚一か。もそつと、こちらへお入り。して、なんぞ国の母者へ、ことづてでもして欲しいのか」

又太郎は六波羅に滯留中、この覚一から、友達のように、また、兄のようにも慕われていた。

覚一は、あまえ顔に、

「はい」

と、相手の声をたよりに膝をすすぐる。

ちよこねんと置いた姿の坐り癖も、小首をかしげる盲^{めくらぐせ}癖^せも、小法師だけに可憐^{いじら}しか

つた。

「ほんに又太郎さまは、よく私の胸をおわかり下さいます。仰せのとおり、旅のお邪魔ではございましようが、國^{くに}もと許^{もと}の母へ、これを届けていただきたいと存じまして」

「手紙か」

「手紙やら何やらでございまして、中には都で求めた香苞こうづとだの琵琶の切れ糸なども入つておりまする」

「琵琶の切れ糸」

「ええ。母がそれを見れば、覚一が、琵琶の師についてこんなにも勉強しているかということが、まざとお分り下さるにちがいございません」

「おう、いとやすいこと。からなはず母者へ渡してあげる」

覚一の手から一封の物をあずかって、

「ほかには」

と又太郎は、この小さい不愍ふびんな従弟を、宥いたわりようもなくその肩へ手をのせた。

「ありません……」と、覚一は首を振り、「こまゞこまみま文ふみのうちにしたためましたから」と、言い澄ました。

そしてまた、自分のことばを追つかけるように。

「でも、又太郎さま。あなたのお眼で見た私の姿をそのまま、どうぞ母へおつたえ下さいまし。覚一は、このように伴せでおりますことも」

「伴せとな」

「はい」

「不倖せとは思わぬのか」

「思いもいたしません。こここの上杉殿では、御一家みなで可愛がつて下さいますし、琵琶の道に入つては、都で二^{ふたつ}となきお師にお教えいただいております。道についた以上、覚一はきっと名人になつてみせます。成らいではおきません。そんな望みに、日々、胸ふくらませておりますゆえ」

しげしげと見れば、針のような筋しかない無明^{むみょう}の眼にも、内には燃える希望を持つて、この小法師は、しんから身を楽しいものとしているらしい。

又太郎は、彼の肩においていた手で、そこを一つ叩いて、

「よし、きっと上手になれよ」

「なります」

「足利ノ庄へ帰つたら、鑁阿寺^{ばんなんじ}の女尊堂におられる尼の母者へ、そのとおりにつたえて上げる。……が、ひとの母にはそう出来ながら、自分の母にはなぜ何も与えられぬわしであらうな」

「そんなことはございません。揃うておいでなのが無上のお倖せです。どうかあなたも、

足利家の御息子としてお立派なお方になつてください。私も負けずに励みますから」「つらいぞや、お汝おのにそう誓ちかうわれては。なあ、右馬介」

「まことに、盲めいの一念とでは」

「右馬介さまも、はやお支度ごしとずみでござりますか。もう一夜でもあることなら、いま私の習うて いる平家の曲の屋島でも、ぜひ聞いていただきますものを」

「いや、そうしてはおられぬ。いざ若殿」

右馬介は先に立つて、又太郎をうながした。

二人は、六波羅並木、車大路の辻まで来て、ふと立ちどまつた。

「あれを見い、右馬介」

「おあとに、何か」

「いや、覚一の姿が、まだわしたちを見送つておる」

「はて。見えもせぬ眼で」

「そうでない。見える眼も同じだ。わしたちを振向かせて いるではないか」

——この日、都を離れた主従は、当然、数日後には、東海道なり東山道の人となつて いるべきはずなのに、やがて正月十日の頃、二人の姿は、方角もまるで逆な難波なにわノ津（大阪）

の端はざれに見出された。

渡辺党の發祥地はつしょうち、渡辺橋のほとりから、昼うららな下を、長柄ながらの浜の船着きの方へ行く二人づれがそれで。

「若殿、どうしても、思い止まりはできませぬか」「まだいうのか」

「でも、今日の便船にお乗りになつてしもうては」

「そのため幾日も船宿で日を暮して來たのに、この期ごとなつて」

「——が、難波の諸所も、はからず見ましたこと。このたびは、ぜひこの辺でお引つ返し願います。お国元のお案じも、ただ事ではござりますまい。右馬介も腹切らねばなりませぬ」

「切れよ、腹の一つや二つ」

「二つとは持ち合せもございませぬで」

「はははは。冗談はやめよう」

「おやめ下さい、無謀なご遍歴も」

「無謀にみゆるか。又太郎にはしかとした算用もあつての旅路を。元々、足利ノ庄を立ち

出たときから、こたびこそは、いツその旅、都だけかは、四国中国までもと、期していたのだ」

「では、初めからご両親やら上杉殿をも、お騙^{あざむ}きのお腹だつたので」

「仕方がない。出立前から長途の遍歴などと願つても、おゆるしのあるはずもなければ」
 ここ数日、主従喧嘩づらの論もしたが、又太郎高氏の初志は、変ろうともしなかつた。
 機会はふたたびないと彼はいうのである。東国と西国との距離は、当時、若人の心にす
 ら、一期^ごを思わせる遠きだつたことにはまちがいない。そうした心情は察しられるし、も
 しまだ、高氏が足利家当主の跡目をつげばなおさらである。右馬介とて無理解ではありえ
 ない。

だが、伊勢路から都を限つてと、日数まであらかじめ、主家の両親とは約してあるこ
 と。そして「そもそも、ついて行くからには」と命じられて來たものだ。これ以上、若殿の
 気隨氣ままに唯々として引かれたのでは、何の守^{もりやく}役^かたる効いがあろう。右馬介は一命を
 かけても引き止めたい。

「や。あの船着小屋の人立ちは」

不承不承な彼にひきかえ、一方は急に大股となつた。見ていると、又太郎はもう人中に

紛れ込んで、何やら雑人たちの高ばなしに耳をすましている様子。それをこなたの右馬介は、磯石に腰かけこんで、なおさいこの思案に沈んでいた。するとまた、駆け戻つて来た又太郎が、こう叫んだ。

「やよ、右馬介。帰ろう。帰ろうつ。どうやら北の国で戦乱が起つたらしいぞ。遍歴などはしておられぬ。すぐ東国下野へ馳せ戻ろうわい」

右馬介は耳を疑つた。

何か、ありえぬ空音のように聞えたのである。

「えつ、北方の戦乱ですツて。戦乱が起つたと取沙汰しているのでございますか」

武家の扶持を食う身が、戦乱の一語ぐらいで、寝耳に水の驚きをうけたのは、いささか不覚と省みたりしたことも、よけい彼を戸惑わせたものかもしれない。

もとの船宿の方へ、引っ返してゆく又太郎を追つて、もいちど、念を押してみた。

「北方の乱とは、もしや九州沿海のお聞き違いではございませぬか。北にはあらで、南なら、うなづけますが」

「なんで」

「元寇の国難も、はや四十年の昔とすぎておりますが、蒙古再来の脅えはいまだに失せ

ておりません。そのため九州探題の下には、博多警固番をおかれ、常時、沿海の防禦になえておりまする。が、しばしば異な船影を認めるたび、すわ、元兵の襲来ぞなどと、九州鎌倉の往還を、あわてた早馬がムダ駆けする例も、ままござりますのでな」

「それとの、誤聞だらうと申すのか」

「おそらくは」

「ばかな」

「ちがいましようか」

「ちがう。大違ひだわ」

又太郎は、一步も待つなく――

「ともあれ、異変の兆しは、蝦夷えぞの空だ。仔細は船宿で話してくれる。はやく参れ」

時乱に敏感なのは、いつのときでも、官辺よりは民衆だつた。彼らのつたえる風聞には、公な文書もんじよだの早馬だのという手間暇なしに、おそろしい直感力と風速を持つてゐる。

つい今。――又太郎が小耳にはさんだのも、それなのだ。

奥州北津軽から、四国へ帰るという一僧侶が、長柄の船待ちで、しゃべっていたものである。

津軽の豪族、安藤季長、安藤五郎、ほかすべての一族同士が、各々、伝来受領の領域を争いあい、ついに陸奥一帯に布陣し出したということだつた。

いや、一僧の言だけでなく、べつな旅商人らしい男も、

「なんのなんの。もう諸所では合戦の最中だ。槍、刀、馬の鞍など、白河ノ関からこつちでさえ、去年の三倍にも値が刎ね上りがッていてる」と、ひとり力んだ証言をしていた。

「ほう。……では、蝦夷の空は戦かいな」

群集、多くの顔は、うららかに聞いていた。

もう源平争覇の社会を眼に見た人間は地上にいない。蒙古襲来の国難なども、老人の炉辺話でしかなかつたのである。四十年の無事泰平は、誰からも、全く過去の悪夢を忘れさせていた。

やがて主従は、ゆうべの船宿の一室にいた。又太郎は風聞の仔細を語った上で。

「……が嘯^{のう}、右馬介。足利の地にとつては、こりや対岸の火災とは見ておれまいぞ。乱が大きくなれば、必定^{ひつじょう}、鎌倉幕府からわが家へも、出兵の令が降るであろうし、なおまた……」

ここまで言いかけると、彼はその地蔵あばたの頬を、笑み割れそうにほころばせた。

「知らぬか。——『一雲を見て凶天を知る』という言葉もあるのを」

とき わかたか
時の 若鷹

難波の旅寝をその夜かぎりとして、次の日の主従^{ふたり}はもう京へのぼる淀川舟の上だつた。

「いい川だなあ、淀川は」

舟べりに肱をもたせて、又太郎はうつつなげな詠嘆を独り洩らしていた。

「——わしの性分か。わしは大河のこの悠久な趣^{おもむき}が妙に好ましい。川へ泛かぶと、心もいつか暢々^{のびのび}してくる」

「まことに」

右馬介は、すぐ相槌を打つた。

「私としても、今日はヤレヤレという心地です。天の助けか、一路^ご帰国と、俄に、^ご翻意くださいましたので」

「はははは。右馬介のやれやれと、わしの暢々とを一つにされては迷惑だぞ。相似^テ相似

似ズ”と申すものだ」

「はて、昨夜もめずらしい一語を伺いましたな。 “雲ヲ見テ凶天ヲ知ル”とか」「ウム」

「いま仰つしやつた語も、何かの詩句にでもございますので」

「宋の人、文天祥の詩とやら聞いた。ちよつと、おもしろい詩ではある」「どうせ、すぐ忘れましようが、舟の徒然にひとつお聞かせを」「こういうのだ」

又太郎は低い声で詩を誦^誦した。

忙^{ぼうり}裏^み、山^み我^ヲ看^みル

閑中^み我^ヲ看^みル

相似^{あいにゆ}テ、不相似^{すべ}

忙ハ總^{すべ}テ、閑ニ不^{およばず}及^べ

「ははあ。……なるほど」

「わかる」

「わかりませんな」

「では、山を見るがいい」

「されば、左には摂津の六甲、龍王岳。右には、生駒、金剛山のはるかまでが霞の中に
「右馬介は、今、山を見ている」

「確かに」

「だが、あたふたと、忙裏に暮れている日には、山と人間の位置は逆になる
「すると、どうなります」

「山が人間を眺めていよう」

「つまり、閑しづかであれば、人が山を見。忙しければ、人は山に見られているということなの

で」

「ま、そうだな。すべての忙は、閑には敵わぬとでもいっておこうか」

「さてさて。若殿にはご幼少から、よく足利学校の書庫ふみぐらで、沢山な書をざらんなので」

「いや、この一詩は、先年、那須の雲巖寺うんがんじよりお帰りのせつ立寄られた疎石禪師そせきぜんじから示されたものよ。……ああ、あの御僧も、その後、どこを雲水しておらるるやら」

ふと、眸ひとみをあげたときだ。期せずして、乗合い客の一人物の眼と、彼の眼とが、なんとなく、ゆき会つた。

舟は、老幼男女、いっぱい客を盛つてゐる。尼、傀儡師、旅商人、工匠、山伏など一雜多だつた。——その中で、何かに腰かけ、独り静かに、読書していた狩猟装束の若公卿がある。

後ろには、拳に鷹をすえた小冠者も控えていた。

「…………」

じつと、こちらを射たのも一瞬、公卿の眼はすぐ書物の上に他念もない。紙面の宋版の木活字が時にひらひら風にうごくのを、又太郎はなお凝視していた。

——山、我看るか。我、山を見るか。

公卿の注視も、じつは又太郎の方にあるのかも分らない。

午をまたいで、舟は江口、鳥飼などの岸へ寄るたびに、なお、乗客を加えていた。

降りる者も見えたのに、後客のうちには、やつと身を立ち支えている者もある。

終日の舟行なので、退屈もむりはないが、舟の中ほどで、博奕が始まつていたか

らである。たしか花街の神崎あたりで、どやどや割りこんで来た今時風な若雑人の一と組なのだ。初めのほどは、酒を酌みつつ、わざとらしい猥談を放つて、女客が顔赤らめるのを興がつていた程度だつたが、やがてのこと博奕道具を取出すと、ことば巧みに、

そこらの乗客を鴨に引きこんで、銭の音やら雑言のやりとりに、眼いろを変えだしたものだつた。

その手練やら軽妙な 謔^{かいぎやく}などに、つくづく感じ入つたように、又太郎は。

「右馬介、思い出すなあ。あの連中を見ておると」

「何をですか」

「それ。いつぞや七条河原の田楽舞の掛け小屋へ入つた折、人気者の花夜叉とかいう田楽役者が唄つた唄の一と節を……」

「ははあ、花夜叉のあれですか」

右馬介も思ひうかべた。その節までも覚えている。眼に、若^{わかぞう}雜^{ぞう}たちの傍若無人ぶりを眺め、胸では、それをつぶやいてみた。

わが子は二十に成りぬらん
はたち

博奕してこそ歩くなれ
あり

国々の博徒^{ばくどう}に。

さすが子なれば

憎からじ

見捨て給ふな

王子ノ住吉、西ノ宮

「……ても、埒のない輩らちやからでござりますな。わが子はどこにと、空飛ぶ鳥を見ても案じてい
る親どもありましょに」

すると。——よくよくそれまでは、憶こらえていたものの発憤だつたとみえる。とつぜん、
どこかで、

「止めろッ、若雜わざども」

と、舟脚もぎくとするような声で呶鳴のなつた人がある。

「なにつ」

無頼な眼つきが一せいに後ろを向いた。

ちよつとの間、その一喝は、どの顔が発したものかわからなかつた。しかし、さつきから漢書に親しんでいた野駆け姿の若公卿が、ふと、書物から顔を離して、うしろの小冠者へ物をいう風なので、さてはと、舟中の視線はそこへそそがれた。

「これツ、菊王、他人のすなる博奕あそびごとなどへ、なぜ要らざることを申すか。ばかな奴よ。
黙つていませい」

きっと、眉にも怒りをみせて叱りつけると、その人はまた、宋版の漢書へ眼を落して、何もなかつたような姿である。

頭巾ずきんの上に、笠かさをもかぶつてゐるので、よくは分らないが三十にはとどくまい。端正な姿に細太刀もよく似合つて、こんな淀川舟の中では、鷄群けいぐん中ちゆうの一鶴いつかくといえる気品もあらそえない。

「はいっ」

菊王なる侍童には、怖らく不満なのだろう。大きく口を結び、面つらふくらませたまま控えてしまつた。だが、無頼の徒と睨ねめあつてゐる彼の眼光といい、彼の拳にある一羽の鷹の戦闘的な羽づくろいといい、これは虚勢を張つてみせた若雑わざどもの胆を冷やすには、まず充分なものだつた。

無頬だけに眼先もはやい。

なんとなく、相手に氣押されたのも事実だが、とたんに沸いた乗客のざわめき声は、すべて自分らに不利だと見ると、

「……こいつはいけねえ」

たちまちの豹ひょう変へんも恥じなかつた。

俄に、銭や、博奕道具なども、どこかへやつて、
 「オイ、オイ。そこの小母さんたちよ。こつちへ来て坐んな。やい、その年よりの荷物を、
 誰か取つてやらねえか」

などと、人並な人情味をみせ、すぐ車座を詰めあつた。

こう機嫌を直すと、彼らは衆の中では最も衆を明るくする特性を持つていた。——一時はどうなることかと恐れ、また彼らの体臭に近づきかねていた男女も、見る見るうちに、彼らのとぼけや冗談に巻きこまれて、舟は和氣藹々^{あいあいさえず}な嘲りを乗せて、大河の午後をなお溯つている。

「なアみんな、俺たちも悪かつたが、日がな一日、舟の中じや、何ぼ何でも飽々^{あきあき}するじやねえか。——たとえばよ、俺たち貧乏人の小伴ときたら、何を望もうとしても、生れ落ちた筵からは、身うごきも出来ねえ今世の中と同じようなもんだろうぜ、この舟は」
 すっかり乗客と仲よくなつたつもりの彼らは、あたりの人にまでやたらに酒をすすめた
 りなどしながら、ここは大河の中とばかり、言いたい三昧^{ざんまい}の舌を振るい出した。
 「ええおい。世間の奴らは、よく俺たちを鼻つまみにしやがるが、いつたい、俺たちを人^ひ
 とでなし
 非人^{ひじん}みたいにいう奴らの方は、どうなんだと訊きてえんだ」

そこから始まつて。

「上役人は、賄賂の取り放題だし、坊主は強訴と我欲のほかはねえ金欄の化け物だ。地頭は年貢いじめにもすぐ太刀の反りを見せ、妾廻いと田楽踊りをいいことにしていやアがる。去年の元亨元年の夏は、近年の大飢饉ともいわれたのに、いつたい公卿の行き仆れや武家の餓死が一人でもあつたかい。……ええおい、そこで乳呑みを抱いている女衆よ。おめえの乳房なども、いくら絞つたって、赤子の口には一と零も垂れはしめえが」

口吻の裏には、いくぶん、さつきの相手だつた公卿主従への面当もあるような調子だつた。

さすが、これは耳障りであつたらしい。鷹野姿の公卿は、せつかくの読書を止め、それをふところに仕舞うと、自分の方から無頼の仲間へ呼びかけた。

「これこれ、そこな若雑ども、おもしろいことを申したな」

「へえ、面白いとお聞きてございましたか」

「むむ。いつたい誰が、そちの申したように、賄賂を貪りおるだろうか」

「へへへへ。誰がつて、数えきれたもんじゃございません。小物大物、まああなたさまがたの方が、よくご存じでございましょう」

「さよう。では、わしの方から話してつかわそうか」

「ぜひ、ひとつ」

「よろしい。舟にも書物にも、わしも折ふし飽いたところだ。談義してつかわす程に、その酒を一碗、これへ持つてまいれ」

「えつ、仲間どものこの酒を、召上がつて下さると仰つしやいますか？……」

公卿もさまざま。さても風変りな公卿を見るものかな。

——こなたの足利又太郎は、舟べりに凭せていた身を起して、思わずその者の鮮烈な存在へ、好奇な眼を凝らしてしまつた。

「……うまい」

と、一碗の酒を、見事、息をつかずに飲みほした当の若公卿は、氣を呑まれていて無賴の若雑たちへ向つて、さらに、

「もう一献酌いで欲しいぞ。なみなみと酌いでおくりやれ」

と、ほほ笑んでいう。

それをも、ぐつと干すと、さすが頭巾笠のうちの眼もともほんのり桜色に染まつた。さて、約束の談義とは、それからの気概りんりんたるものだつた。

「——いま汝らの怨じた上の者とは、みな武家であろうがの。よいか、守護、地頭、その余の役人、武家ならざるはない今の天下ぞ。——その上にもいて、賄賂取りの大曲者はそもそも誰と思うか。聞けよ皆の者」

彼の演舌は、若雑輩のみが目標ではなきそなうな眸だつた。
 「それなん鎌倉の執権高時の内管領、長崎円喜の子、左衛門尉さえもんのじょう高資たかすけと申す者よ。うそではない証拠も見しよう。きのう今日、蝦夷の津軽から兵乱の飛報が都に入つておる。——因もとを洗えば、それも長崎高資の賄賂から起つておる」

又太郎は、きき耳すました。

はからずも、彼が長柄ながらの埠頭ふとうで知つた風説と、それは符節ふせつが合つてゐる。
 ——北方禍乱の原因を、なお、若公卿はこう説明する。

津軽の安藤季長や同苗五郎まんどうらが、一族同士の合戦におよぶまでには、しばしば相互から、鎌倉政所まんどころへ直々の訴えに出ていたのだが、内管領の高資は多年にわたつて、両者のどつち側からも、わいろを取つていたのである。

その果てが、もつれに一そう、もつれを深め、相互、「かくては埠らちもあかじ」とばかり、ついに陸奥みちのくの火の手になつたものだという。

又太郎は、うなずいた。

「さてこそ、いよいよ北方の乱は確実」

彼の帰心は矢のごときものがある。

だが、溯り舟は、いとど遅い。また、若公卿の弁舌も酒気に研がれて、止まる^{とど}ことを知らなかつた。

「——かつはまた執権北条の底ぬけな驕奢^{きょうしゃ}、賭け犬ごのみ、田楽狂い、日夜の遊興沙汰など、何一つ、民の困苦をかえりみはせぬ武家の幕府よ。……が、それにひきかえ、この都では、御即位あつて以来の、みかどの御善政ぶりを、汝らは皆、眼にも見てきたことであろうが」

新帝後醍醐の徳を、彼は、頌^{うた}い上げるよう、ここで称える。

前年の飢饉には、供御^{くご}の物も減ぜられ、吏を督して、米価や酒の値上りを正し、施粥小屋数十カ所を辻々に設けて、飢民^{きみん}を救わせ給うたとも説く。

また、天皇親政このかた、おちこちの新^{しん}関^{せき}は撤廃し、記録所を興して、寺社の訴訟も親しく聽かれ、御余暇といえ、学殖のお養い、禪の研鑽^{けんさん}など、聖天子たるの御勉強には、大御心のたゆむお暇も仰げぬという。

——すると、大事なところで。

「お客人、山崎でお降りのお客人。船が着く、立たつしやらぬか」
船頭の声に、又太郎は、われに返った。惜しくはあつたが、かねてから主従は、ここで
降りる予定であつた。

ここは淀川の北岸、山崎ノ郷。古くは、河陽^{かや}の離宮やら江口神崎におとらぬ灯やら、関
所もあつた跡だという。

しかし、いまは遊歴でもあるまい又太郎主従に、何の目的があつて、こんな古駅の人となつたのか。しかもあの、鷹野姿の若公卿には、多分な好奇心も残しながら、なぜ、せつかくな舟を途中で降りてしまつたものか。

「いつか暮れたな、春の日も」

「オ。……晩鐘が鳴つておりまする」

「光明寺か、海印寺の鐘か」

「どこぞ里の旅籠^{はたご}で一夜をお待ちなされますかな、それとも」

「いや歩こうよ。まだ腰糧^{こしがて}（弁当）もあるし、疲れたら山寺の庫裡^{くり}でも叩こう。が、右

馬介は氣うといか」

「いや、終日ひねもすの舟で、たくさん居眠つておきましたから、私もいつこう大事ございませぬ」

西国街道を横ぎつて、夕けむりの暗い軒端の並ぶ石ころ坂を登りぬけると、辻には“是より北、大枝越え丹波路”の道標みちしるべが見え、振返れば、さつき別れてきた大淀の流れも、にぶい銀の延べ板みたいに暮れ残つてゐる。

「さても、あのあと、どうなつたかな？」

「最前の舟の出来事で」

「さればよ。あの若公卿の演舌など、もすこし聞いていたかつた。惜しいことを」

「まことに、異態な長袖でございましたな。公卿と申せば、ただなよかに、世事も知らぬ氣にとりすましてゐる貴人かとのみ、心得ておりまするに」

「ああいう公卿も居る時世かと、わしもまた初めて知つた。ひそかに、観やつたところ、鷹野の狩装かりよそおいはしていたが、獲物は持たぬ。そのうえ、手に披いていた漢書の題簽だいせんには“資治通鑑”としてあつた」

「その資治通鑑とか申しますのは」

「近年、堂上を風靡ふうひしていると聞く異国の新しい学説の書だ。いわゆる宋学と申すもの。

程朱の新説とか、温公の通鑑などを読まぬものは、頭のふるい古公卿じやといわるる
そうな。……これは時勢の流行の一つと、六波羅の伯父上からも伺うたのだが「
ははあ、では舟で見かけたあの仁などが、つまり当世の、新公卿とでも申すものでござ
いましょうか」

「いや、そんな術学だけなら、なにも眼を瞠りはしない。わしが奇異を感じたのは、べ
つな点だ。あの乗合客の中で、独り他念なく読書三昧の態だつたが、その閑な姿には、ど
ことなく、武人の骨ぐみが出来てゐる。すこしも体に隙がない。——およそ公卿が日頃に
武技の鍛錬もしているという世はいつたい何を語るものか。そぞろわしは怖ろしくなつ
た。武門の子のわしが、こんなことでいいのかしらと思われての」

道は登るばかりであつた。丹波境の重畠たる山が、巨大な夜の胸を押しつけていた。
「……ただ、かえすがえす惜しかつたのは、堂上ではいかなる人か、または今、官職なき
町公卿か、その名も訊かれぬことだつた。が、いつかはまた」

急に、ぶつんと黙つたのは、そのとき、山蔭の出会いがしらに、数名の人影と松明の光
が、彼の瞼を射たためであつた。

土地の武士か。若党三人を前後に連れ、ひとりは胴巻姿で、馬上だつた。

なにか高声で通りかけたが、ふと道をよけて佇んでいた又太郎主従の影を不用意に知る
と、ぎくとしたような駒驚きを脚もとにひびかせた。

「……旅人か？」

と馬上で言つたようである。

不慮な山中の遭難者はめずらしくない。武士でさえも小勢だと、しばしば裸にされたり、
みなごろしに遭つたりする。こんな物騒さは又太郎も、道中耳に飽いたほどだが、洛中で
すら群盜の出没は、都名物の一つと聞かされたには、唖然とした記憶がある。

「……旅人でおざる。お通りください」

右馬介が、親切に言つた。道は谷添いなので、馬を交わすのがせいぜいなのだ。

しかし、馬上の顔も若党たちも、じつとこっちを確かめている風で、たやすくは前をよ
ぎりもしない。さいぎしん 猶疑心は時代の通有性だつた。又太郎の方でも特にいやな奴やつぱら 輩だとは
考えもしない。

「やつ、もしや？」

とつぜん、馬上の者が、土にぽんと音をさせて降り立つたので、それには主従も、何事
かと、怪訝いぶかりを持たないわけにゆかなかつた。

「おう、間違いはない」と、武士は又太郎の前へひざまずいた。そしてもいちど、松明の下から、しげしげと仰ぎ見て——

「おそれながらあなた様は、下野^{しもつけ}国足利ノ庄の若殿、又太郎高氏様と見奉りますが」

「なに。わしを又太郎高氏と知つてか」

「知らいでどう仕りましよう。多年、足利表のお廄^{うまや}にも召使われておりましたれば」

「では、篠村に来ておるわが家の郎党よな」

「はつ。御一族の松永殿に従つて、足利ノ庄よりこの丹波篠村の御領所へ移つてまいつた一名にござりまする。……がしかし、若殿には、いかなるわけで、かかる遠くまで」

「さてはそうか。じつはその篠村の領所を訪ねんと、これまで参つた途中よ。篠村まで、あと道のりはどれほどか」

「なんの御案内仕りまする。汚い鞍^{むきくら}ではございますが、どうぞ、それがしの駒の背へ」

「が、そちは」

「京へ罷る途中でございましたが、それどころかは。これより篠村へ引っ返します。いざ疾^{まか}う御馬上に」

武士はみずから馬の口輪を取り、連れの若党を叱咤して、元の道へ走らせた。彼らの在

所篠村の領家（領主の代務所）へ先触れさせたものだろう。

丹波篠村ほか数カ村は、下野国しもつけとは遠く離れているが、足利家代々相続の飛び領の地だつた。同様な小領土は、他地方にもあり、ここだけではないのである。

で、こうした離れ領土には、本国から一族の確かな者をやつて、そこに土着させておく。年貢取立ての代務やら主家との連絡など、つまり国司の目代と似たようなものだつた。

「おう、お見えらしい」

領家の門前には、先づれをうけた代官の松永経家、書記の引田妙源などが、驚き顔を並べて出迎えていた。

——頃はもう夜半をすぎた時刻だつた。

「経家、昨夜は夜半よわに驚かしてすまなんだな」

むさぼり眠つて、さて醒めて、湯浴み食事などもすました翌る日。

一室には、又太郎のための上座が設えられていた。代官の松永経家は下座に平伏して。「どう仕りまして。御本国におわせば、かけ替えもない大事なお体。その君が、どうしてと、一時は胆を冷やしましたが、やがて御仔細を伺つて」

「はははは、胸をなでたか。……ところで経家、さつそくだが、脚のよい駒二頭に鞍をおかせ、旅糧たびがてなども、着けさせておいてくれい」

「はや、今日にも」

「馬を借ろうがため立寄つたまで。蝦夷の乱とも聞いたので帰国をいそぐ」

「お引止めはいたしますまい。北方の変はおろか、当地にて観ておりましても、世上、ただならぬものを、特に近年は覚えます」

「そちもな……、そう観みるか」

「あらたに即位あらせられしお若きみかどの、比類のない御英邁ごえいまいさを同うにつけ。また、天皇親政と謳ううて、時弊の刷新に、意氣をあげている一部の公卿がたをながめましても」「才。思いあたるわ」と、又太郎はここで、淀川舟で乗り合わせたた異色な若公卿の言動をつぶさに告げて——「そも、ああいう公卿振りが、今様な近時の禁中なのであろうか。またその人は、いかなる身分のものやらと、いまだに謎としておるが」

と、聞くうちに、首かしげている経家にただしてみた。

「……さ。いま伺えば、その若公卿が召連れていた侍童の名は、菊王とか」

「たしか菊王と呼んだと思う」

「ならばそれも、天皇に近う仕えまつる近習の御一名、前の大内記、^{さき}_{ひのくろうどしもとあそん}日野藏人俊基朝臣に相違^{ござ}りますまい」

「どうしてわかる」

「菊王は、後宇多の院の侍者、寿王冠者の弟とやら。——そして、とくより日野殿の内に小舎人^{こどねり}として飼われおる者は、かねがね聞き及ぶところにござりまする」

「そうか。そう分つて、何やら胸のつかえが下がつた氣がする。みかど後醍醐のおそばには、なおまだ、ああした公卿振りの朝臣^{あそん}があまたおるのか」

「は。世上、つたえるだけでも、藏人殿のほか、日野参議^{すけとも}資朝^{すけとも}、四条隆資^{たかすけ}、花山院師賢^{ろかた}、烏丸成輔^{からすまなりすけ}など、いづれも氣鋭な朝臣がたが、これも豪氣なるお若き天子に、つねづね^{かしづ}侍き申しあげ、また政務をみそなわす記録所には、吉田定房^{までのこうじのぶふさ}、万里小路宣房^{まほうちのぶふさ}、北畠親房の三卿を登用召され、世間ではそれを“三房ノ智”と申したりしておりますそ

な

「もつぱら宋学の新説を学びとり、儒仏の究理なども旺^{さかん}と聞くが

「されば、天皇おみずからも」

「では、異国の学を鑑^{かがみ}として、時弊を打ち破り、ひいては執権北条の幕府をもくつがえし

て、政治まつりごとを遠きいにしえに回さんとの思し召かえもあるか」

「あ。めツたなお口走りは」

たれか坪の渡りをこなたへ来るらしい跔音あしおとだった。が、顔を出したのは、引田妙源と
いう法師武者。気づかいは要いらぬこれも足利党腹心の一人であつた。

妙源は手造りの草餅を盆にのせて、うやうやしく又太郎の前にすすめた。

「何かお慰みにと、初春の蓬はるくわなど探させました。甘味は干柿の粉を搔き溜めたもの。あます
あます葛ら」とはまた風味もかくべつ違いますので」

この引田妙源は、以前、又太郎高氏の父、貞氏の祐筆を勤めていたこともあり、ここで
もその文書上の才能は代官経家に次ぐ地位の者だった。

「お、山里にも、もう蓬よもぎが萌え出たか」

又太郎がその一つ二つを喰べるのを、妙源はうれし気に見て。

「そうしておいで遊ばすと、御幼時のお姿も偲ばれてまいります。鑬阿寺ばんなんじの御参詣には、

よう私もお供いたし、春なれば、寺ではよく蓬の餅を若殿へ差上げましたもので」

「そうそう、祖先の忌日きにちごとには、かならずあの菩提寺の庭を見た。——足利家代々の苔
さびたおくつきに額ひずいた後で」

「特に、若殿御元服の日、その報告を御先祖にささげられた後で、重臣どもの意見の相違から、ついに『置文』^{おきぶみ}の披見なく、御帰館となつたことは、なお御記憶でござりますようが」

「はて、置文とは」

「足利家七代の君、若殿には御祖父にあたる家時公の御遺書のことですぞ」

肺腑を突くとは、こんな言を擬して、一瞬^{とき}、はつと息を呑ませる鋭さをいうのだろう。

又太郎は、いや、かたわらの経家さえも、肅^とと、顔いろを研いで、固くなつた。

——およそ足利家の者にとつては、先々代の主君家時の話というのは禁句だつた。なぜならば、絶対に公表できない原因で、しかもまだ三十代に、あえなく自殺した君だからである。

ところが。——その家時の血書の『置文』（遺書）というものが、菩提寺鑿阿寺のふかくに、家時の靈牌とひとつに封ぜられているということを、重なる家臣は知つていて。

——で、又太郎高氏が元服報告の日にも。「——もはや御元服なされた上は、お見せすべきだ」という臣と。「——いやまだ時節でない。もつと若殿が御成人の後ならでは」という臣と、両者二説にわかれため、その折にも、それはついに開かれずにしまつたほど、

足利家にとつては、なにしても重大な意味をもつ秘封でもあるらしかつた。

「……そうだ、わしとしたことが、うかと、あの日のことは忘れておつた」

つぶやいて、面をふかく沈めていた又太郎は、やがてのこと、その顔と共に、全身も上げて突つ立つた。

「出立するぞ。経家、駒の支度をいそがせろ」

「はつ」

「不覚よ、今まで見ずに過ぎていたのは。……帰国の上は、すぐにも、鎧阿寺の置文をこの眼で拝見せねばならぬ」

経家も立ちかけたが、妙源と顔見あわせると、共に姿を揃えて、又太郎の足もとに、もいちど平伏して言つた。

「自然、御披見の日が来たものと存ぜられます。怖らくはこれも、御先代の靈のあるところ、今日となつたことも、決して遅くはござりますまい」

ばさら大名

騎旅きりよは、はかどつた。

丹波たんばを去つたのは、先おととい。ゆうべは近江おうみ愛知川えいちがわノ宿しゆくだつた。そして今日も、春の日長にかけて行けば、美濃との境、磨針峠すりばりとうげの上ぐらいまでは、脚をのばせぬこともないと、馬上、うすず春はるきかける陽に思う。

「おううい、おおいっ」

呼ぶ者があつた。たれなのか、まだ遠い声である。

又太郎と右馬介とは、

「はて？」

手綱を休めて、きき耳ききみみします。

たしかに、二度めの声も、

「高氏たかしどの。高氏たかしどの」

そう呼んだように思われる。

ところが、近づいたのを見れば、まつたく見も知らぬ人間だつた。

緋縵ひぶさかざりの黒鹿毛くろしかけに乗り、薙刀なぎなたを搔かい持つてゐる。もちろん腹卷はらまきいでたち。つまり

旅行者当然な半武装はんそつぞうをした四十がらみの武者ぶしゃなのだが。

——それはそれとして、相見るやいな、この男、

「わああああ。こりや卒爾そつじを申した。ごめん、ごめん。……お呼びとめしたのは御辺じや
おざらぬ。高氏たかうじちがいじや、高氏たかうじちがいじや」

と、独りでおかしがツて いる顔を斜めに振向けながら、駒もゆるめず、連呼して、駈け
抜けてしまった。

むツとしたに違いない。右馬介が色をなして。「——うぬ、待てつ」とでも叫びそうに、
あぶみ立ちして、先を睨んだので、又太郎はあわてて制した。

「やれ待て。おかしいぞ、いまの武者は」

「言語道断。いずれ近くの受領か郷武者ではござりましようが、礼をしらぬにも程がある」
「だが、高氏たかうじちがいと申したのは解せぬ。わしを又太郎高氏とは、どうして知るか」

「いかさま、それは

「買かもしけぬぞ。俗に申すかまをかけてみる手はよくある。めったに、われから逸つて
手に乗るな」

道々には、ひとつ懸念がなくもなかつた。
例の献上犬の事件である。

あの後始末は、伯父憲房がのみこんでくれてはいたが、六波羅から鎌倉通牒となり、その結果、さらに又太郎の無断上洛までが発覚となれば、幕府は怒つているにちがいない。わるくすれば、又太郎の帰国を海道の途上で拉らつし、鎌倉表へ届けよ、などの令が、すでに出ていないとは限るまい。

が、今日の旅路を鬱々うつうつと、そんな先案じにとらわれている彼でもなかつた。春風に飄なぶらせていゆく面構えのどこかには「……ままよ」といつたふうな地蔵あばたの太々しさが、いつも多少の笑みを伴つてゐる。そしてもつと大きな視野へその眉は向つていた。この横着さは、彼がまだ元服前から、なんのかんのと、折々に禅でいためつけられて來た那須の雲巖寺の客僧、疎石禪師の鉗けん鎗いのおかげといえぬこともない。

「や。……さつきの武者が」

「なに。あの群れの中に」

「見えまする。しかも、何やら佇たたずみ合つて」

犬上郡の野路をすぎ、不知哉川（昔はいさら川）を行くてに見出したときである。華やかな旅装の一と群れが河原に立ちよどんで、頻りとこつちを振向いていた。

どうします？

二の足をふむ右馬介のたじろぎも、又太郎には眼の隅のものでもなかつた。駒脚はまつすぐにそのまま不知哉川の河原へ近づいている。

先はこつちを待つていたに違ひない。さいぜんの黒鹿毛に乗つた侍は、そこの群れを一人離れて、すぐこなたへ寄つて來た。

が、前とは異なつて、ていねいに。

「あいや高氏どの。つい今ほどの失礼は、平におゆるしあれよ。連れの御方に追いつかんと、上わの空なるぶざまでおざつた。ははははは、それにさぞ、御不審でもおわせしならん」

歯ぐきを見せて意味もなくよく笑う男である。装いなど、ひとかどの者とも見えるに、又太郎にはその人柄に何かいやしさを覚えずにいられない。

「なんの、いらぬ御会釈。それよりはまず伺いたい。わしを高氏とは、よう分りよの」

「いや、それしきなことぐらいいは。ハハハハ」と、またぞろ咲笑して、

「一年暮くれの頃より疾く承知いたしておる。野州足利ノ庄のおん曹司じもくが、忍び上洛しておらるるとは、世間は知らいでも、それがしの耳目となつておる放免ほうめん（目明し）どもはみな賢い奴、すぐ嗅かぎ知つて來たことでおざる」

さてはいけない。運の尽きよ、ただではすむまい。

又太郎の後ろにあって、右馬介は、キシキシと体が軋み鳴るような緊迫した顔を硬め、手を太刀へ忍ばせていた。

けれど、安手によく笑う侍は、なお、下種な歪み笑いを面に消さずに。

「オオそれよ。また数日前には、そこな郎従とおふたりで、淀川舟を山崎辺で降りられたことがおありである。これは放免の報らせでのうて、さる貴人の座にてお話に出たことだが」

「……いかにも。そして」

「その御方の言では、六波羅の内にも、かつて見たことのない薄あばたの一曹司と、終日、ひとつ舟に乗り合せたが、そもそも、いざこの曹司ならんか。……どこやら大容量な風、そして異相、まことに凡ならぬ者と、頻りにお気にかけておられしゆえ、それがしが推量にて、それこそ、忍び上洛中の足利貞氏の嫡子又太郎高氏にて候わん、と申せしところ、小膝を叩かれて、あな惜し、さる良き機縁をば逸せしかど、いたく残念がツておられ申した」

意外な彼のことばに。

「では、そのお人は、前ノ大内記日野俊基朝臣でおわそ่งが」

「や、御存知か」

「わしも、あとにて知つた」

「いよいよ、御縁がある」

「ところで御辺は何者」

「申しおくれた」

彼は、急にあわてて。

「——禁裡大番(きんりおおばん)の武者、美濃国(みのくに)の住人土岐左近頼兼(ときさこんよりかね)と申すもの。この正月にて解番(げばん)とな

りしゆえ、国元(くに

へまかり帰る途中でおざる

「では、わしも告げよう。察しのとおり、自分は足利又太郎高氏にちがいないが、先刻、
高氏ちがいと申されたのは、いかなるわけか」

「さ、それが奇遇。お年頃もお名も、まったく同じ高氏殿が、もひとりあれにおらるるの
じや。ハハハハ、世間はせまい。高氏殿と高氏殿とが、かかる道にて行き会うとは」

この世間に、自分と同じ高氏という“名のり”を持つ人間が、もひとりいたとは初耳だ
つた。さして、ふしぎとはなしえないまでも、土岐左近の言のことく、人生途上、まこと
行路の一奇遇にはちがいない。

が、その同名の高氏とは、いつたい、何処のいかなる素姓の人物なのか。

——左近が語るところを次に陳べてみるならば。

この近江路の要衝を占める愛知、犬上、坂田の諸郡にまたがる豪族といえば、古くから近江源氏と世に呼ばれる佐々木定綱、高綱らの末裔の門たるは、改めていうまでもない。

だが、鎌倉初期において、佐々木系は二つに分れ、一は江南の六角家、一は江北の京極家となつてゐる。

ところで“名のり”を高氏と称する当の人物というのは、その江北京極家の当主であつた。つまりこの地方の守護大名、佐々木佐渡ノ判官高氏殿こそがその人なので……と、土岐左近は、一応の紹介の辞でもすましたような、したり顔で

「足利家も源氏の御嫡流、佐々木殿も頼朝公以来の名族。申さばおなじ流れのお裔、ここでお会いなされる御縁が、自然待つていたものとぞんずる」

舌にまかせてここまで述べた。しかし自分の小細工を疑われてもと、考えたらしく。

「じつは最前、あなた様を佐々木殿と見違えたのは、供の列を先にやつて、野路の茶店で憩うておるうち、ふと、当の殿を見失うたので、慌てて後より追つかけたための粗忽で

ざつた。くれぐれ、無礼はおゆるしを」

そんなことはどうでもいいように、又太郎は彼方の群れをチラと見やつて。

「会う会わぬは、わしの所存でない。佐々木殿の望みか、それとも御辺の一存か」

「いやいや、云々の仔細でと、お噂を申したところ、すりや、ぜひお目にかかりたい。
なおまた今宵は、柏原のかしわばらのわが屋形に御一泊たまわらば、殊のほかな幸いだがと、あれ、
あのように、供人らも控えさせて、不知哉川もお渡りなく、お待ち申しておられますわけ
で」

又太郎は、後ろへ言つた。

「右馬介。どう答えよう」

「……せつかくなれば」

「そうだなあ、こちらは飄然ひようぜんたる旅人にすぎぬが」

「まず、大事ございますまい」

右馬介もやや警戒心をほぐした容子だ。眼に言外のものをいわせて領き返す。
はやくも土岐左近は、佐々木高氏のそばへ駒を廻して行つた。そして何か咽いていたが、
すぐ取つて返すなり、又太郎主従へ向つてこう告げた。

「佐々木殿には、なにぶん、ここは路傍のこと。」
 「あいさつもなりかねれば、自身はお客様まろうど人の先導として、一と足さきに屋形へ駆けん。……陽もまだ高し、後よりゆるゆる御案内して参れよとの仰せでおざつた。いざ、お供いたしましようず」

——なるほど、見てあれば、河原立ちしていた供人の同勢は、弓、長柄ながえなどを燐々さんさんとゆるぎ出して、もうそこの舟橋を彼方へ渡りかけている。

なぜか案内の土岐左近はやたらにしつしつと駒を追う。——ために磨針峰の上、番場の茶屋についたのも思いのほか早く、琵琶湖の夕照がまだ後ろにはよく見えた。

「どうぞ、お息休めに」

茶屋の床几には先発した佐々木家の臣十名ほどが待ちうけていた。青磁の馬上杯に銚子を添え持ち「……お水がわりに」と、鞍わきから馬上へすすめる。

「お。これは甘露」

八献、十献、又太郎はたてつづけに飲む。

同様に右馬介もすすめられたが、彼は飲まない。むしろ又太郎の余りに人を疑わぬ態度も心もとなく、密かな警戒心を内に。

「土岐どの。当のお屋形はあと何里ほど」

「柏原はすぐでござるが、なお伊吹へかけて少々登るので」
 「では、伊吹山の中腹か」

「されば、ちと急がぬことには」

さてこそ、こここの“待ち家来”は松明持ちのためかとわかつた。

柏原から北へ、やがてまた、伊吹の裾をやや登つてゆく。もちろん宵はとつくに過ぎて
 いた。やがて縞目しまめをなす杉林のおくに、高樓の灯やら庭上の篝火かがりやら、そこの一郭だけが
 蛍かごのよう明るく見えた。

先に帰館した高氏の命か、総門内では、衆臣が立ち迎える。ただちに、又太郎主従は客
 殿へ、また湯殿へ、そして、膳部まで出でしまつた。夜はすでに晩かつたし、疲れもある。
 で、対面は翌日にと、いう配慮らしい。

「さすが花奢かしゃだな、右馬介」

「おなじ守護大名ながら、下野国の御家風と、こここの佐々木屋形では」
 「まさに、月とすっぽん」

——翌朝、起き出でみると、総曲輪そうくるわは砦づくりらしいが、内の殿楼、庭園の数寄など、
 夜前の瞠目どうもく以上だつた。遠くの高欄こうらんをちらと行く侍女やら上臈じょうろうの美しさも、都振

りそツくりを、この伊吹の山城へ移し植えたとしか思えない。

それにつけ、又太郎は、

「当主高氏とは、そもそも、どんな？」

と、今日の会見が変に待たれた。

やがて。夜前に約した時刻になると、土岐左近が迎えにみえ、ふたりを誘つてべつな広間へみちびいた。

上座の茵は、上下なしの意味か、親しみの心か、二つならべて敷いてある。

右馬介は、もちろん末座。

そして又太郎だけが、ずっと進んで、その一つに着こうとしたとき、廊の杉戸口からつかつかと入つて来た佐々木高氏が、もひとつの中を前に、

「やあ」

とだけいつて、ひと呼吸ほどな間を措き、

「御着座を」

すすめながら、自身も共にどつかと坐つた。当時の作法、いうまでもなくあぐらである。

「（）迷惑とは存じたが、下野と近江とでは、またのお会いもいつの日かと、土岐が申すま

まお引留め申した。お見知りおきください。身どもが佐々木佐渡ノ判官高氏でおざる」

「御同様に。……足利又太郎高氏におざりまする」

「はははは。高氏と高氏、これがまことの名のり合いよの」

せつなの印象では、この初対面も、又太郎には何か心にそぐわない“他人”を感じただけだった。

足利高氏と佐々木高氏。

——名のりは同じであつても、どこひとつ、自分とは似ても似つかない。

「これはあかの他人だ」と、すぐ夜来の期待も他愛なく潰えていた。

が今、佐々木高氏が胸をそらして笑つた朗らかな顔と、その異形なる身粧みなりには、俄に眼を拭ぬぐわされたことでもある。——予想とは全然外れていたにしても、天下、かずある守護大名中には、こんな異例な大名もあるかと、あらためて目前の一人物に白紙となつて細やかな眼をこらさずにいられなかつた。

きのう、途々での土岐左近の話だと「——お年もあなたと同じくらい」と聞かされたが、いま会つてみれば、ちと違う。二ツ三ツは上はずであろう。いや風采といい大人びた態度など十も年上に覚えられる。が、やはりほんとのところは二十を少し出たぐらいか。

そんな若さなのに、である。

見れば佐々木は、みごとに頭を青々と剃りまろめた“入道高氏”なのだつた。
といつてべつに、法体ほつたいではない。

身なりはむしろ女装にも勝るけんらんさで、白地紺しろじぬめに葦手模様あしでを小紫濃こむらごのなかに散らした小袖、それへ袖のない“陣座羽織り”というものを着て、袴も唐織りらしい綺羅、前差しの小刀も美作な黄金づくりである。これ以上流行の粋も尽しようがないほどだ。

かつまた、隠し化粧もしているのであるまいか。頬うるわしく唇紅く、小鼻のわきの黒ほくろ子に好色的ないやらしさが氣づかれるほかは、いかにも近江七郡の守護大名らしい怡幅かっぷくの重きと、どこやらに狡さきずをかくした微笑までそなえている。

——ははあ。かかる態の人物の生き方やら嗜好をさしていうものか。

又太郎はふと思いついた。

ちかごろ“婆娑羅”ばさらという流行語をしきりに聞く。

おそらくは、田楽役者の軽口などから流行り出したものであろうが、「ばさらな装い」とか。「ばさらなる致しかた」とか。または「——ばさらに遊ぼう」「ばさらに舞え」

「世の中ばさらに送らいでは」などと、その語意、その場合も、さまざまにつかいわけら

れている。

むかし山門の法師間には “六方者”^{ろっぽうもの} という語があつたが、婆娑羅の意味は、それに近くてもつと広い。——花奢^{かしゃ}、狼藉^{ろうぜき}、風流、放縱、大言、大酒、すべての伊達^{だて}をさしてもいうし、軌道を外れた行為や、とりすました者への反逆や、そうした世のしきたりに斟酌^{やくしんしょく}しない露悪的な振舞いをも、ひツくるめて、

——婆娑羅に生きる人。

といつたりする。

だから今の世には、鎌倉のばさら執権の下に、ばさら御家人、ばさら市人^{いちびと}、ばさら大

尽、ばさら尼、さては、ばさら商売の田樂役者までが無数にいるのはふしげでなかつた。

「……読めたわ。こここの佐々木も、つまりはその、ばさら大名という者であつたるか」

又太郎の心のうちにも、やつと談笑に溶けうる支度^とができつつあつた。

すぐ酒盤^{しゅばん}が出る。右馬介や土岐左近へも、陪膳^{ばいぜん}が供された。

「坂東人はみな酒がおつよいとうけたまわるが」

と、佐々木高氏。

「なかなか。まだ自分^ごときは曹司（部屋住み）の身で^ござれば」

と足利高氏。

「ゞ遊歴とは、よい御身分。お羨ましい」

「いや、それもわびしい微行しじびの旅にすぎぬこと」

「鎌倉政所をお憚りよの。とかく、おきてしばか 捻縛おきてしばりはうるさいでのう。……しかしお気づかい召されな。万一あるとも、執権どのへは、この高氏がいかようにもおとりなし申そうほどに」

そこでふと、

「はははは。おん許も高氏、それがしも高氏。気をつけぬと、こりや、ややこしい」と、打笑しゃくわうつた。

春しゅん 昼ちゆう、酒はよくまわる。又太郎もつよいたちだが、佐々木にも大酒の風がある。

城内の大庭には、紅梅白梅が妍をきそい、ここには杯交はいこうのうちに氣をうかがい合う両高氏の笑いがつきない。はからずも、これこそ『婆娑羅』さかな酒もり景色か。

「ときには……」と、又太郎からたずねた。「ぶしつけなれど、御出家にしては余りに早すぎるお頭つむり、いかなる発心ほっしんがあつて?」

「ヤ、これですか」

佐々木は、酒照りも加えて、一そう青々とかがやいでいる頭へちょっと手をやつて。
「もとより出家ではござらん。いうならば、おつきあいの剃髪ていはつとでも申すべきか」

「はて、異なおつきあいを」

「戯言ぎれごととおききあるな。じつを申そう。仕儀はかよくなわけでおざつた」

——少年時、彼は、執権高時のそばで小姓役をつとめ、元服祝いなども、鎌倉御所でなされたほどに寵をうけた。

ところが高時にはまま『おん物狂い』と人もいう得たいのしれぬ奇病がある。

そのため先年、病後の床あげを機に、薙髪しおはつして入道となつた。同日、佐々木高氏も「いささか君に殉じ奉る心で……」と、惜しげもなく髪をおろした。高時は「佐々木のような者こそ御家人の鑑かげぞ」と、大いに愛でて、『道誓どうよ』という法名までつけてくれた。——それからの彼への眷顧けんごはまた格別だった。やがて佐々木が近江七郡守護の職を嗣ぐ身となつても、その御信頼は変つていないと、彼自身いうのであった。

「それは、御奇特千万」

聞き人は笑うのはよろしからずと考えて笑わなかつた。からからと笑つたのは佐々木である。

「執権どのは、常日頃、そうした事のみが、およろこびのお方なのだ。なべて眼に見えぬことは、効いもない。せつかく道誉という法名をいただいたことだし、いつそ頭もこの方がすずやかと、以来、當時の態ていとはいたしておるが」

きらと、その眸を又太郎高氏の額に射澄まし、ことばをかえていい出した。

「そうだ、天下の守護大名中に、高氏が二人おるものもまぎらわしい。以後、それがしは道誉を名のろう。高氏という名のりは、足利どの御一人にて持ち給え」

なんによれ、興を主として興に生きるのが、ばさら者の、ばさら精神というものか。

彼も少々酔い気味だが、

「今後はおん身一人で、『高氏』を名のり給え。自分の名は、『道誉』でとおす」

などの言辞は、まったく即興的である。

いやその佐々木が、執権高時の剃髪に殉じて、共に頭をまろめたなども、半ば即興の機智かもしけない。

これでは、高時に仕えた小姓の頃、無二の者と愛されたのも道理である。犬好き、遊宴好き、田楽狂の執権が、彼を愛した所以は、おそらく彼の田楽役者的な頓才や諂へつらいではなかつたか。——と又太郎高氏は、さげすみつつも、またつい、佐々木道誉の話し上手につ

りこまれては、

「……が、しかし一種の人物」

と自然に同調もされてしまう。

こうした小半日のすえ。

「いささか酔うた」

道譽は顔を撫で、

「高氏どの、ちと醒ましに庭へ出ようか。——夜は夜を新たにして、また趣向をかえた杯」としようほどに

と、みずから先に席を離れた。

高氏も大庭へ降りて立つ。

右馬介、土岐左近、家臣小姓たちも、ふたりの逍遙につづいて行つた。山城の曲輪は、四山の嵐氣を断つてゐるが、伊吹の中腹である、何といつても風は冷たい。

「おつかれかな、高氏どの」

「いや、ひどく快いのです。こころよそれに奇木大石、泉や流れのおもしろさ。庭造りの結構にも、醉眼が醒まされる」

「ほ。御賞美にあずかつたか。自慢に似たれど、これも自分の造庭でおざる。……おうこ
こらで、茶など一碗献じようか。茶亭のしたくはよからうな。土岐どのは、先へ行け」
左近の姿が、木立の中の小道に消えると、道誉は右馬介と家臣らを見て、
「何せい、茶堂は手ぜま。そちたちは、戻つて休息せい」
と、しりぞけた。

この時代にはまだ後世のいわゆる茶道などは生れてない。けれど喫茶の風は、ぼつぼつ、
拡まりかけていたのである。禪僧の手で漢土から渡来した始めのころは、禪堂や貴人のあ
いだに、養生薬のように、そつと愛飲されていたにすぎなかつたが、近ごろでは、『茶寄
合』などという言葉さえ聞くほどだつた。花競べ、歌競べ、虫競べなどの遊戯にならつ
て、十種二十種の国々の銘茶をそろえ、香氣や色味をのみくらべるのを、『闘茶』といい、
その闘茶にはまた、莫大な賭け物をかけたりする婆娑羅な人々もあるとは——高氏も、聞
きおよんでいたことだつた。

けれどいま、道誉が彼をみちびいた離れば、田舎びた無仏の一堂で、一幅の壁画と、棚
には錫の茶壺ちゃこ、天目形てんもくなりの碗などがみえ、庭園の休み所らしい趣はあるが、闘茶の茶寄合
の俗風はどこにもない。

「……」なれば人けもなし、なんでも話せる。さ、高氏どの、くつろごうよ」

道誉は、釜のかけてある一炉ろを前にあぐらをくみ、土岐左近はと見れば、茶堂の縁や窓に立つて、潜む者はないかと、外をたしかめているふうだつた。

「じつは」

錫の茶壺から、碗のうちへ、茶の葉をサラサラとこぼし入れて、釜の湯を湯柄杓ゆびしゃくで汲みながら、道誉はいった。

「……胸をひらいて、いちど、山ほどなお話がしてみたかつた。与えられたこのよい機会に」

高氏はすぐさとつた。ここへ自分を誘つたには何かべつな底意があつてにちがいないと。
——が、さりげなく、天目台の碗を、掌てにとつて。

「おお爽やかな。このようなよい茶は足利では知らぬ。舶載の物もあるか」

あらぬ問いには、道誉の方でも、それを高氏の独り言にさせて、答えもしない。黙々と、次の茶を、土岐左近に与え、自分の掌てにも一碗を乗せた。

「鎌倉はよくご存知でしような」

いとぐち
緒をさがすような口ぶりで、しばらく間まを措き、

「たしか、足利殿の鎌倉の別邸は、大蔵おおくらヶ谷がやであつたと思うが」

「いや、その鎌倉の家には、幼少數年はいたが、以後、多くは足利の地でした」

「では、府内のさま、執権どのの左右、また御所内のことなどは」

「くわしく存じもよらぬ。いずれいつかは幕命を拝して、鎌倉勤めの日もあるでおざろうが」

「その日には、おそらく、おん許のような純なお人は、あきれ返るに違いない。これが天下の首府かと、鎌倉の腐くずえたる醜みにくさに、今から、驚かれぬご要心でもしておかれぬとな」世の危うさが人の口端くちばにのぼりだすと、たれもがみな、同じようなことをいうものではある。——高氏は薄ら笑つた。そして敢てにも、自身きを聞きき人ひとにおいていた。

「この道誉とて、鎌倉の恩寵をうけた一人、なにも世せいへん変へんを好むものではないが、かなしいかな、天運循環の時いたるか、北条殿の世もはや末かと見すかさる。高時公御一代と申しあげたいが、ここ数年も、こころもとない」

道誉の眸は、高氏の眸をとらえて、離さない。

横にはまた、息をつめて、彼の顔いろを見すましている土岐左近の毛あながら立ちのぼる殺氣があつた。

あわてまい、身じろぎも危険である。と考えてか、高氏は乾きを覚えた唇もしめさずに凝つ^じといた。

すると、道誉の頬の黒子^{ほくろ}がニヤと笑つたと思うと、高氏の眸から、眸を外した。

「はははは、ご迷惑かな。かかる心をゆるしたおはなしは」

「いや、ご斟酌^{しんしゃく}なく」

「かもうまいか」

「おたがい地方の守護たる身。など無関心には」

「さもこそ。お互^{たが}いは若い」

手繰り込むような語氣と、その体がもつてているといえる妙な吸引力とが、高氏には、ぬらと、自分の生胆^{いきぎも}_{さわ}に触つた気がした。

「……いちいち挙げては、きりもないが」

道誉は、さらに、鎌倉の秕政^{ひせい}や腐敗ぶりをかぞえたてた。武家幕府の基幹である武家すらも、心ある者は、みな離れてゆくと説いた。——特に高時の行状にいたつては、多年自分が近侍して眼にも見ていた実例をあげて、その暗愚さを、まるで一狗^くにも劣るようにつた。

いまさらなんの。驚くほどなこともない。

北条幕府の腐すえや秕政ひせいは、世の周知である。——と、するかの如く、高氏の眉がびくともしないのを見ると、

「土岐どの、こころで御辺の胸も」と道誉は、言を横へ譲ツた。

待つていた唇である。土岐左近頬兼は、あたりを見まわした。眼も充血している。「事、洩れては一大事。かつはおそれ多い。高氏どの、誓ツて御他言なきよう」のどの辺を出きれぬ小声や、そのわななきぎまを見ると、高氏はかえつて、冷静になつた。

「御念までもない。しかし御不安なれば、聞かずとも」

「いや、申さいでは天意にそむく。足利殿も天皇領の御住人。……そこはかとなく、待てる時節が来ているとは思しめさぬか」

「どういう時節が」

「これはまた、あっぱれな、おとぼけ顔ではある」

打ツちやられたように、左近はツギ穂を失つて、どぎまぎしたが、その反動をこめて、

また。

「由来、名門足利家の御血統が、北条氏より高く、へたをすれば、北条家の門地を超ゆるものあるを恐れて、わざとお家を不遇な地方におき、それが代々御家運の衰微すいびとなつて、今日にいたつたことは、おん曹司として、よもご存知なきはずはおざるまい」

「ぞんじておる」

「ならば」

「でも、どうにもならぬ」

「ははあ？」

左近は、意氣こみを引いて、急に考えをかえたらしい。

「ムム、さすが御警戒とみゆるわ。では、こここの御滞在中を幸いに、直々のさる朝臣と、

とつくり御密談していただけますまいか。拙者がなにを申そうよりは」

「長なが逗留とうりゆう」の心はなけれど。……その朝臣とは

「すぐる日の淀川舟にて、すでに姿だけは、お見知り合いの」

「日野藏人ひのくらどのか」

「その俊基朝臣でおざるが」

「会うてなんの密談を」

「さ、それも拙者の言と軽んぜられ、二の足も三の足もお踏みでは何もならぬ。が、もうここまでお打明けしたこと。……じつは」

猪首いくびをかがめて、上わ眼うめで、高氏を睨むように見た。

左手が、小刀のある脇腹にかくされたのは、脅おどしとしても、物騒な姿勢である。高氏は見まいとした。こういう時は地蔵菩薩を念じていよ、とよくいつた母の囁きがどこかで聞えた。

「——げに、おそれ多いが、すでに、やざとなき辺りより、内々の綸旨りんじも賜わつておる儀なので」

彼の小声はつづいている。

その密語のうちには、日野藏人のほか——花山院師賢もうかた、烏丸成輔なりすけ、四条隆資たかすけ、日野資すけとも朝らの名が洩らされ、討幕の綸旨をおびたそれぞれは、折あるごとに、山伏や雑人に姿をやつし、諸国の武門を密々説きまわつてゐる今——とも確言した。

「ここで足利家の総領の君を仰ぐとは、まことに天の配剤。ぜひ一つお会い下さるまいか、その蔵人どのと」

彼の熱っぽい語気が、と切れたときである。

遠くだつたが、とつぜん、田楽樂器の合奏が、いつか黃昏たそがれた山城のしじまをゆるく破つていた。

藤夜叉

——夜は夜よるを新たにして。

と昼間、道誉が言つた。

いかにもばさらないい方で彼らしい言と思われたが、約束のごとくその晩、城内の的場から武者廂までを容れた俄舞台と桟敷で、新座の花夜叉一座の、田楽見物が行われた。

もちろん、高氏を主賓に。

そしてその晩は、家中一同にも陪観をゆるされ、人影は桟敷の外まであふれたが、とりわけ、道誉のそばには、盛装した一と群れの女房たちが華やいで芝居しばいががり籌に照り映えていた。

また、高氏の後ろにも、数名の女性かしづが侍いている。

が、それは、道誉の侍女たちか、遊女の種類なのか、高氏には判じもつかない。

彼女らはこもごもに、主賓の彼へ杯をすすめたり、台盤のさかな箸をおき直したり、またその嬌笑を、時々の笑いどよめきの波と、ひとつにしていた。

だが、高氏だけは、そんなせつなも、笑い遅れて、うつろな迷^はぐれ笑いを、あとから、頬へかすめていた。じつはまだ肉体的にも、この饗應を自分中心に受けて、辺りの歓と溶け合えないでいるらしい。

むりもなかつた。

——先刻、黄^{たそが}昏^れすぎて、奥庭のあの茶堂から、やつと出て来たときには、まさに、虎口をの^はがれたという氣がしたほどだつた。——喫茶にことよせて、道誉と左近から、秘中の秘事を、うちあけられた末、

「応^{いな}か否^か」

「いざ、御真意をもらし給え」

と、その二人に、にじり寄られた時の恐^{こわ}さ。そして、一瞬のためらいもゆるされない中におかれ^はた自分の総毛立^つた体を高氏は生涯忘ることはできまい。

だが、彼の生れつきな妙につかみどころのない風貌は、そんな二人の眼光を無反応なも

のにして、自己を茫漠としておくには、甚だ都合のいいものだった。

「……さ、なにぶんにも、自分はまだ曹司（部屋住み）の身」というを口実に。

「父貞氏と意見が割れては、家中もまとまらず、わるくすれば鎌倉へ洩れるおそ恨れもある。それを思えば、日野殿（藏人）との御密談も足利の地においてうけたまわりたい。他日もしお微行しおひぎょうの御東下あらば、父をも加え、いかようにも計らわん」

ふしげにも、すらすらと口に出たのである。言い抜けらしい苦渋くじゆうは見えぬせいか、道誉も左近も「……では」と、得心の色をなごませて、やつとその場は事なきをえたものだつた。

「もし、足利さまのことの小殿」

みなが笑うときでも彼の顔だけが笑つていない。

——その主賓に気づいたのか、後ろの女性のひとりが銚子に白い手を持ち添えて高氏のわきへすりよつていた。

「小殿のおん眉には、まだ御酒も足らぬそうな。それとも、藤夜叉ふじやしゃにお見惚れでみとざいますか」

「藤夜叉」

「あれ、お目はどこに。ホホホホ、いま舞台で舞つている艶な田樂女のことですのに」
城仕えの者なら、馴々しく自分を“小殿”というような呼び方はしまい。さてはこの女
たちは湖畔の遊女だろうか。高氏はすこし気がらくになつた。

女は、高氏の曲もない飲みぶりに、その杯を愛惜^{いとし}んで、

「小殿、おながれを」

と媚びて、ねだつた。

そして、彼の浮かない横顔と舞台の方とを見つつ。

「小殿も田樂はお好きなのでございましょう」

「む。きらいでもない」

「さして、お好きでも？」

「ま、半々か」

「ホホホホ。お気むずかしそうな。今宵は、そんな御不興顔はせぬものでござりますよ」

「なぜ」

「わたくしたちの召されたのも、花夜叉のお城興行も、みな、小殿への御馳走とか」

「そうだつたな。もすこし、笑うてでもいなければ悪かつたか」

「おとりもちの至らぬせいと、後でわたくしたちが、お叱りをうけまする」

「それでは不憮。ふびんおまえたちは土地とくろの遊女であろうがの。わしも笑いたいのだ。笑わせて

くれい」

「お門違い。それは舞台の方へおねだりなされませ」

高氏はあやされている子供に似ていた。

が、まもなく、彼もすべてをわすれ顔に、心から今夜の田楽饗応に溶け入った風である。頬には少し酔いものぼつてくる。

右馬介は棧敷に見えない。家中一同の中なのだろう。折々、高氏の姿へ、くばられて来る注視は、やや離れた座席にある佐々木道誉と土岐左近の眼であった。

演技の番数ばんかずは、佳境らしい。

いまも、喝采の波につれ、どつと笑いのしぶきが立つ。

弓の的場を変えた俄舞台は、よしず廻いに、よしず廻。背景うしろにおいて屏風と両わきの袖幕たれまくとが、装置といえればいえもある。

夜空には、たくさん星。

またここにも、無数の吊り灯^{あかり}やら芝居籌^{すみ}が、ソヨ風のたび油煙^{すみ}を吹いたり火をハゼたりした。そのため、舞台はのべつ明暗のまたたきをしていたが、しかし、田楽役者の玉虫色に光る衣裳も、田楽女の白粉顔も、かえつて夢幻を鮮らかにし、われひと共にひとしい時代の抱く哀歎と、それが求める救いの滑稽^{あざ}とを、一種の妖氣のよう^{かも}醸^{かも}していた。

——東より

きのふ來たれば

女も持たず

この着たる紺の狩襷^{かりあわ}と

娘、換へ給ベ

——樂器には絃樂器^{ささら}はなく、簫^{くれづみ}、腰鼓^{くねづみ}、フリ鼓^{どびようし}、銅鉄子^{どびようし}といつたような類。^{だい}演^{だい}し物^{もの}によつては笛もつかう。

おどけを主とした舞踊である。

遠いむかし。

地方の民が、大蔵省へ馬で貢税^{みつぎ}を運び入れながら唄つた国々の歌が催馬樂となつたといわれるが、田樂ももとは農土行事の田植え囃子^{ばやし}だつた。それがやがて、都人士^{とじんし}の宴席に興

じられ、ついには近ごろの如く、本座、新座などの職業役者をも生むような流行にまでなつて来たものだとか。

「……東より……昨日來たれば……妻も持たず」
あづま

興にそそられた高氏が、ふと、膝がしらを鼓として、指と小声で、踊りの曲を真似てる
と、となりの遊女も、その流し眼に媚びを凝らして、おなじ節で。
「……着たる紺の……狩襖は要らじ……聟いわとせむ、聟むとせむ」
かりあを

「ほほほほ。小殿も決しておきらいではございませんのね」

「酒か」

「いいえ、田楽」

「酔うにつれて、いつか舞台も面白う見えてきた。先頃、七条河原の掛小屋で見たのも、
この花夜叉の新座であつたが、何で人々が、さまで持もて囁はやすのかと、ふしげであつたが」
「いずれは、小殿のお国でも、鎌倉にも負けぬほどな田楽流行ばやりを見ることかもしけませ
ぬ」

「いや、いかに好んでも、執権どののようにはなりたくないものだ。あのような田楽魔でんがくま
には」

はつと、自分の醉に驚いて。

「なにをいつたかな、わしは、今」

「ホホホホ。べつに御仔細は」

「オ、それよ。いま舞台から消えた役者が花夜叉か」

「いえ、さぎやしゃ鷺夜叉でございました」

「新座はみな『夜叉名』を名のるのが風とみゆる」

「ええ。さいぜん小殿が呼吸いきもなされずお眼をこらしていた愛らしい田楽女も」

「あれは、藤夜叉とか」

「藤夜叉だけは、すぐお覚えなされましたのう」

「可憐だつた。振り鼓を両の手にして舞つた姿の」

「まだ十六とか聞きますが」

「よう知つておる」

「京、大和に次いでは、近江田楽。……ですから、こここの御領下には、田楽衆が一と村な
しております。親の花夜叉も、むすめの藤夜叉も、近江の衆でございますし」
「そなたもか。そなたの遊女名は」

「鳩にわといいます」

「鳩ノ君か」

口にした杯を、彼は彼女の唇へ持つてゆきかけた。が、あなたの道誉と左近の眼が、チラとこつちを見た気がしたので、あわててそれは思いとまつた。

舞台ではそのとき、老練な田楽法師が現れて、宇治拾遺から取つた“ふぐり神樂”を演じて、満場の男女を笑殺していた。

それは堀河院のみ世の事。御神楽の夜の酒もりに、職事の公卿行綱が、袴を高くたくしあげ、細ズネを現して、庭燎にわびをグルグル廻りながら、足拍子に合せて。「……よりよりに夜のふけて。さりさりに寒きに。ふりちゅうふぐり睾丸ふるごを、ありちゅう、あぶらむ」と、三たび舞い歌つて大喝采をほくしたというあの故ふるご事を、田楽化したものだつた。

——やがて。もう終りに近いか、次は藤夜叉の一人舞で、唄は繰返しこう聞えた。
さかづきと

鶉の食ふ魚と

くろかみは

法のりなきものぞ

いざ二人ねん

「…………」

高氏の眸の中で、強烈な一輪の花が、渦となり虹となつて燃えた。そしてすぐその花へ、他の田楽役者が大勢踊りからんで――“このごろ都に流行るもの”という輪踊りになつていたが、なお彼の網膜には、藤夜叉の舞しか残つていなかつた。

「……小殿。お迎えが」

鳩に袖をひかれて、はつと気づいた。見ると、土岐左近が後ろで立座をうながしていたし、彼方では、道誉が自分を待つている風だつた。

たぶんもう夜なか過ぎか。

田楽狂言も終つて、あれからべつの墨絵の広間で宴となり、やがて役者たちをも座に加えてばさらな残夜ざんやを飲み更かしたのも、ずいぶん長かつた覚えがある。

「……むりもない」

と高氏は自分へつぶやく。

その足もとは、まんさんとして、彼の意のままには運ばれて行かない。ただ誰かに体を

ささえられていることだけはわかっていた。

宴でも、始めの間は。

……これは気をつけよう。佐々木道誉や左近らが、わしの性根を見てやろうと、寄つてたかって杯を強いるものに相違ない。すでに宵からの酒。さりとて、ここでぶざまな酔い崩れなど見せては後日^{ごじつ}の笑われぐさ。

と、杯も戒め、座容も保つていたものだつた。

が、そのうちに、花夜叉、鷺夜叉、桐夜叉などの田楽輩が「……『あいさつ』に」と罷り出て、道誉のごきげんも斜めならずと見えた頃からが、いけなかつた。いや酒景のみだれや、彼らの道化軽口などは、なにも高氏の心理にかかりはない。彼の密かな毅然^{きぜん}がついに維持しきれなかつたのは『『あいさつ』の仲間に藤夜叉も交じつて來ていたからだつた。

「ア。……小殿、お氣をつけて」

どこまでつづく奥曲輪か、長い長い深夜の廊を、蹠蹠^{そそう}と曲がりくねつて來たところで、彼は何かへどすんと肩でもぶつけたような気がした。

「ま。おあぶない」

彼をささえている影は、共に、よろとして、もてあますような抱えざまも懸命に。

「そちらではございませぬ。……御寝所へ。……小殿、御寝所の内へ」
 そこのほのかな明りと、ふたつの枕に焚きこめてある伽羅きやらの香が、ふと高氏を心づかせ
 た。

「そちは誰だ」

「オオ、恐いお顔」

「たれだつ」

「ま、おはかまでも解いて、衾ふすまへおまろびなされませいな」

「なに」

かすみの中のような眸を、じつと凝らして、その白い顔へ。

「なアンだ……にお鳩か」

「わたくしではいけません?」

「遊女の鳩か」

「よくおわかりのくせに」

「あっちへ行け」

「そんな……、つれない」

「何がつれない」

「小殿はさびしかろ。ようござい抱してあげよと、粹^{すい}な道誉^さまのお耳打ちでもございまする。それなのに、宵の^なお馴^なずみもどこへやら、そのような、よそよそしい」

「もういい。さがれ」

「さがりませぬ」

「うるさいやつ」

酔いの力は加減できない。つき飛ばされたのは鳩だけでなかつた。大きな駄々つ子に似た彼の身なりも仰向けにぶつ仆れた。

「憎い小殿」

鳩はすぐ身をくねらせた。そして、男の胸へ体を投げた。こんな仕儀は遊女の名折れと、腕にヨリをかける気でもあろうか。

「ええ、憎い。いツそもそも可愛いいほど」

と、その黒髪は、下の顔を、藻のようにおおい隠したまま、離さじと一そう身を^{から}擗めてくる。

こんなことは遊女の鳩にはたくさん覚えがある。初めのうちの男の峻拒^{しゆんきょ}などは上

べだけのものでしかない、ときめこんでいる大胆さなのである。誇らしげに胸の下に圧している高氏の面をながめる様といい、四肢でするその行為といい、美獣が餌を弄るときの姿態とおなじだつた。いたずらツボい気長さで我慢づよくて、下から一つや二つ頬を打たれたぐらいでは怒りもしなければ休めもない。

「……ベツ」

執拗なその紅唇を交わすたび、下の高氏はくるしげに唾を鳴らした。力の争いでも鳩にかなわない気がどこかでしている。が、ほんとは鳩の力を刎ね返せないわけもなく、大酔のせいでもなかつた。じぶんの初心な血に燃えついてしまつた性の火との闘いを、自分の中でしていたにすぎない。

「は、離せ」

「……いや、いや」

窒息を迫つてやまぬような黒髪の粘さであつた。……高氏は負けかかる。

高氏もこれまでに女性の体を知らないのではなかつた。多分に未開な下野国地方では、上下共に楽しみといえば自然飲み食いか男女の関係にかぎられている。筑波の歌垣に似た上代の遺風が今なお祭りの晩には行われるほどだつた。早熟の風も、ひとり高氏だけに

あつたのではない。

けれど高氏の身分ではそういう面にはしごく不便であった。だから彼の早熟な性の穂に奇縁の蝶々がとまつたのもわずか二度ほどな前例しかない。

いぢどは歌垣のやみまつりを見物にゆき、どこのたれとも得しれぬ年上の山家妻に引かれて宮の木暗がりで契ツたことと。また、も一つの体験は、御厨ノ牧へ遠乗りに行つた麦秋の真昼であつた。馬屋の干しワラの中で、つい牧長まきおさの小むすめと陽炎かげろうみたいに戯たわむれ睦むつんだことがある。——そして、前の件は知れずじまいに終つてゐるが、後者はその後小むすめが親にでも洩らしたか、やがて高氏の母清子の知るところとなつていた。

父貞氏もだが、母は父以上に潔癖なひとである。家臣をして牧長の父娘にどういう処置をとらせたものか、高氏も知らないうちに、いつか、父娘は牧に見えなくなつてしまつた。——なまじ彼にこういう前歴もあるため、今は、鳩のせいばかりでないもがきを一そうにしたのであつた。しかしその鳩の唇寄せにも、なお歯がみで耐えていられたのは、これほどな酔いも、まだ、佐々木道誉の笑い黒子ほくろを忘れるまでには至つていなかつたせいである。——道誉に耳打ちされている夜伽の女と思えば、心がゆるされないばかりか、小うるさくて、ついには、こんなときのためではない鍛錬の足わざを以て、鳩のからだを鞠のご

とく部屋のすみへ投げつけてしまったのであつた。そしてさツと廊の外へのがれ出ると、後ろで鳩が、ひツ——と声の尾を曳いて、

「こ、小殿つ。おひどいつ」

と怨^{えん}じるのが聞えた。が彼はそのまま廊の闇をどすどす歩いて、燃えやまぬその五体を、大庭の夜気に立つて冷やした。

城の大庭は夜がすみだつた。すぐ真上の伊吹山すら影もない。
どこかには月がある。

——追われてでもいるように高氏は龐^{おぼろ}のなかを歩き出した。まだその足もとは、もつれ氣味だつた。元服後一年余にして酒をゆるされてからこつち、こんなにも酔いをおぼえたのは初めてだと考える。それしか思惟^{しい}らしい思惟はなにも泛かんで来ない。

ふと、つまずいた木の根か切株を知ると、彼はそれ幸いのように腰かけて、ふウつと腹いっぱいの酒氣を天へ吐いた。すると、吸う息には馥郁^{ふくいく}たる匂いがあつた。

暁、道誉とともに逍遙した梅林が思い出された。彼は顔をうごかした。その顔の上に花があつた。近くにも遠くの枝にも——紅梅は黒く、白梅は青く、夜がすみに^{にじ}んでいた。
「……？」

彼のひとみは、そればかりでないものを見た。

ここには、彼以前に、もひとり人影がたたずんでいた。いや、その者も木の根か何かにこしかけていたのらしいが、すぐその辺まで来た高氏の影がふいに崩れるような恰好でうずくまつてしまつたのを見ると、それに驚いてか、つと起つて、こつちを振向いていたものだつた。

いちどは小鳥の起つような姿態しなをしめし、すぐ逃げ去ろうとしたかのようであつた。——が、思い直したふうで、ふた足三足、近づいて來た。そして恐こわごわ々身をすこしかがめて訊ねた。

「もし。……どうかなすつたのでござりますか。どこぞおかげんでもお悪いのですか」
「…………」

高氏には、じぶんの眸がまだ信じきれない。彼に見えていたのは羅浮仙らふせん（梅の精）のような佳麗なひとだつた。「……さるべきおひとが、こんな深夜もすぎた頃、ひとりでたたずんでいるわけはない」。彼は答えとする必要以上に、つよく頭を振つて言つた。

「べつに、どことも」

それから、また……

「病氣などではない」

つぶやいて、指でこめかみの辺りを抑えた。顔が青いナ、とひとりで思う。すると彼女は、もうひとつ近づいて来て。

「どなたかと思うたら、あなた様は、こよいの御主賓の……」

そう訊かれたときは、すでに高氏の醉眼にも正しい対象がつかまれていた。というよりも宵から彼の心にあつた映像が突然として眼の前でものをいつて驚きに振り醒まされたといった方がいいかもしね。

「あつ。……藤夜叉か」

「え。藤夜叉でござります」

「あれから……そなたはわしの後にでもついて來たのか」

「いいえ」

「では待つたのか。ここで」

「なんの、そのようなお約そくはしてもおりませぬ。小殿こそ、どうなされたのでござります？」

「……わしか」

漠と眼をふさいだ。

たつたいま遁のがれて來た鳩の白い腕や執拗な唇が、皮膚にも厭わしく考え出される。高氏はいましげに眼をみひらいた。そしてあの腕や唇が、もしこの藤夜叉のものであつたら……と、その眸は思わず彼女をむさぼり眺めた。

小むすめの本能は敏感である。あいての眼の裏に潜むものをすぐ読んでギクとふるえに襲われたらしい。踵かかとは意識のない後ずさりを見せ、なにかを守るような姿勢で両の手を交あ叉に、じぶんの胸を抱きすくめた。

「藤夜叉」

高氏は跳びついた。

酒がなせる業とはいえるが、彼女の方にも、高氏の何かに惹かれているたゆたいがあつたのは是非もない。逃げもせずただ交かわそうとのみして恥すくめた肩を、高氏の酔いの手がもうワシづかみにつかまえていた。

「恐いのか、この身が」

「い、いいえ」

「なぜ逃げる」

「逃げはいたしませぬ」

「でも、おののいている」

「……あなた様だつて、まつ青なお顔をしていらっしゃいます。まるで仮面のような酒のせいだ。いや酒だけでもない」高氏はじぶんを呪うような語氣で――「こよいに限つて、こんな深酔いしたのも、藤夜叉、そなたが、いけないからだ」

「あら、なぜでござりますか」

「いえない」

胸を空けて、待つとない悶えをしめすと、とつさに、どういう小むすめの気安さが、その彼に見えすいたのか、藤夜叉の方から寄りすがつて、ひたと甘えた。

「仰ツしやつてくださいませ。どうして、わたしが。……イヤ、イヤ。仰つしやつて下さらなければ」

「わからぬか」

「きっと、道誉さまの御酒宴で、わたしまでが、余りにお杯をすすめたからと」

「ちがう」

つよく顔を振つて。

「そなたは、もしや……」

黒髪ぐるみ彼女の顔を両腕の中に容れてじつとまた見た。もう藤夜叉もじぶんを見入る異様な眉間の陽炎にもなんの恐怖も抱いてはいない。——そして、舞台ではいとど可憐に思われた小柄な姿も、その黒髪のいただきは、ちょうど高氏の唇をかくすほどな背丈はあつた。

しかも素顔は、なおどこか大人びてもいた。腮や頬はくりつとしていて、全体には形だが、ただ美貌だけの人形美でもない。野葡萄のような眸は、これを男に濡れさせてみたくなるばかりな蠱惑をひそめ、なにかに渴いているらしい唇がその口紅を黒ずませて烈しい動悸に耐えている。

「……そなた、下野国の御厨にいたことはないか」

「いいえ」

「御厨ノ牧にいたことも」

「ありません」

「では、生国は」

「越前とだけ聞かされておりますが」

「越前」

と、息をひいて。

「じゃあ違つていたか。余りにも、そなたが牧長の娘とよう似ていたゆえに。……いや、それが悪いつ。藤夜叉、それも、おまえのせいだ」

いきなり彼は藤夜叉を仆して下におし伏せた。悲鳴にちかい驚きと本能的な手むかいが高氏をなお火にさせたことは争えない。しかし彼女の爪が、彼の頬を血に染ませたとは見えなかつた。ただ朧な中の本能の狂いを、一瞬、梅が散り騒いだだけであつた。

虚脱したものみたいである。

——たとえば、下も見ずに絶壁をよじ上つて、いただきの岩角にとりすがると同時に、満身の精気も一瞬にどこかへすうと脱け去つてしまつたような。

いや、それも当らない。高氏のいまは、われから火山の火口にとび入つてのた打ち廻る氣力もない地底の亡者の影に似ていた。もちろん酔いもどこかへ費消され尽している。そして理性の帰つた心の谷に、罪の意識めいた悔いだけが、硫黄の煙るみたいにもうもうと煤ツ^{いぶ}てくる。

しまつた、と思わずに入れなかつた。

ここは領下の牧とは違う。あいても、領主の子息とただ畏怖している牧長の小娘でもない。

さらには、場所が場所だ。

もし知れたら。

あの皮肉な佐々木道誉が、どんな嘲笑ちようしょうをふくむだろうか。ひとにも茶話にするにちがいない。足利又太郎高氏ともある者がよ……と、彼の頬の黒子のいやしさまで、気にかかる。

のみならず、かかる私行の些事さじといえ、彼に尻ツ尾をつかまれば、未来へかけて、禍はばかいとならぬかぎりもない。それに忍び上洛の帰路という身でもあつた。その憚りも超えている。

「……なんたる、おれか。なんたる過失を」

彼は頭をかかえたまま、いつまでも、梅の根がたに、うずくまつっていた。かつての日、疎石禅師の喝棒かつぼうに打ちひしがれた時のように。

地にはもう一人、藤夜叉の姿が、まだ自分が見つかぬような身なりで俯つ伏していた。

といつても、男によつて体に与えられた“うつつの喪失”は逆に彼女を一瞬のまにべつな女として生れかわらせていたともいえよう。その——苦痛を交じえて甘い欣しい歓喜の火ばなは、なお生理の余波を微かに体じゅうへのこしていた。だが徐々に、官能の弁が閉じられて、つねのわが身に返るかと意識された途中で、彼女は卒然と、すすり泣きをゆり起した。それはたとえようもない寂寥を二人のあいだへ呼ぶように、シユク、シユク……と途絶えのない嗚咽だつた。

責められているかの如く、

——なにを泣く。

高氏は刺々とげとげと心でののしる。

あツちへ行け。

消えてなくなれ。

しかし、それはじぶんの慚愧ざんきへ向つて言つたことばでもある。彼の過失が、そのまま藤夜叉にも同等な過失だつたと言ひきれるほど、むごい彼でもなかつたし、口を藉かるべき酒氣もいまは失せていた。殊には、遊女でもない小むすめ。ただ寒々と、誰へでもない腹がたつばかりだつた。

「藤夜叉」

『くら
くふえかねて、

「もうよせ、泣くのは」

そばへ寄つて、かかえ起した。どこもかも触れるところが濡れている重きだつた。
「わしがわるかつた。……たのむ、このことはたれにもいうなよ」

「……し、しりません」

「告げる気か」

「い、いいえ」

「では早く寝屋へ戻れ。人が来るといけない」

「いやです」

藤夜叉は盲目的に彼の袖と襟とを、双手でつかんだ。指には女の爪があつた。

当惑と、満足と、ふたつの相違した感情の絡まりが、高氏のなかでまた心の位置を迷わせた。

「なぜ嫌^{いや}というのか。こうしていれば、すぐ夜が明けよう。仲間たちのおる寝屋へ戻らぬわけにもゆくまいが」

「でも……」と、藤夜叉はその眸に、小むすめの必死を燃やした。

「——こそこそ、こうしてお話をできます。お別れしたらさいざ、またいつお目にかかるやう知れません。まして、いやしい田楽女の身分では」

「いや、そなたさえ人に洩らさねば」

「仰せなら、ゆめ、洩らしはしませんけれど、そしたら？」

「いつかは会おう。かなづいつかは、そちたちの仲間ぐるみ、足利の屋形へ招いてやる」「え。ほんとでござりますか。それを愉しみに、はかな夢と思わず、待つていてもよろしゅうござりますか」

「おう待つがいい」

高氏は本氣でいった。

やがては自身も一個の領主、それくらいなことはと、当然口へ出たのであろう。という常識もだが、彼自体その“いつの日か”を望んだことの方がもつと大きく心を占めていた。すでにこのまま離したくもない気持ちがどこかで切々としていたのだ。

「さいぜん生国は越前とか申したが」

「それも、敦賀ノ津とやら聞いているばかりなのです」

「では花夜叉は、親ではないのか」

「育ての親でございます。じぶんの僻みひがでは、人買の手などに売られて、いまの親御に育てられて来たのでしょうか。もの心ついたときは、もう田楽衆のなかで芸を仕込まれておりました」

「とはまた、不運なやつ」

宵の舞台姿を連想して、彼はひとしお不憮ふびんをおぼえた。奴隸どれいの売り買いは古くからいくども禁止されては来たが、人買は社会にたくさん生きている。足利の領下でも、わけて飢饉ききんどうし年などには、痩せ馬なみに市で売られる子が野菜籠の中や陽溜りひだまの辻に、群れとなつて曝されるのはめずらしいことではなかつた。

「小殿。……もし小殿。急にわたしは心配になつてきました」

「なにが」

「いま申したような身の上とお知りになつて、藤夜叉がお厭いやになつて来たのではございませんか」

「なんの、あわれとこそ思え……」言いかけて、ふと。「おつ、たれか來た」と、突つ立つた。

藤夜叉も共に。——だが、なお取りすがつて。

「小殿、何がなお形見の物でも給わりませ。いつの日かの、よすがに」

「これを持て」

もう高氏は慌てていた。

彼女の手へ渡したのは、旅に立つ日、母から賜わつた地蔵菩薩の守り袋だつた。藤夜叉はそれを持つと、梅をくぐつて、梅ばやしの向うへ走つた。白いものが、そのあとを片々として舞い、どこかで夜の鶯が物驚きをして啼いた。

高氏は、ゆうべの寝所をさがし当てて深々と眠つた。かつてない幸福そうな寝顔にみえる。その気配を窺つて、隣室の右馬介も、やがて安心したらしい鼾となつた。

旅の風はまたふたたび、馬上の高氏の鬚面ひんづらをソヨソヨ後ろへ流れてゆく。

その朝、彼は伊吹を立つていた。

別れぎわには、佐々木道誉以下、土岐左近らも、とにかく表面ねんごろに別辞をつくした。わけて、道誉は、

「きっと、御再会の日をお待ちする。その日はさらに、吉よい日の下で」

ふくみのある言い方と、他日の誓いを、くりかえした。

高氏の胸には「……また、いつかは」と呼ぶその声が、こだまのように後ろ髪を曳いていた。

——が、それは道誉みやびのでなく、心から心へ聞える藤夜叉の声だつた。

その藤夜叉は、今朝は見えない。——どこかで今朝はその眸を、人しぬず、めじか牝鹿の眼のよう泣き濡らしてもいることか。

が、口にも出せず、ただ胸のうちだつた。

そして不破ノ関をこえ、関ヶ原もすぎると、去る者うどしどか、おのづから、高氏の眉も、日頃の彼に返つていた。

「なんと右馬介、とこうして、国へ帰ると、はや二月だな」

「はい。春の遅い足利ノ庄も、みな梢につぼみを持つて、若殿のご帰國を、お待ちしておりましようず」

「だが、伊吹の泊りは、ちと道草をくい過ぎたような」

「いや、わざか二た夜、さしたる遅れでもござりますまい」

「それがなぜか、長い惰眠だみんにでも溺れていた気がする。まるで長夜ちようやの夢から醒めたような今日の空ではあるよ。もう、あのような大酒は以後きっと慎もう」

「これで二度めのお誓いでござりますな。どうか三度めのないようにな」

「帰国の後は、ゆめ、人には申すなよ」

「申しますまい」

「何事もぞ」

「はつ、何事も」

返辞は素直だが、右馬介は、にやりと笑つてみせる。

……さては、こやつ。

と、高氏も苦笑を催す。

昨夜の田楽見物からあとの仔細を、この男、うすうす承知なのではないか。と思えば、すこし後ろめたかった。けれど、藤夜叉との秘か事も、余人ならぬ右馬介一人の胸にたたまれているぶんにはと、そこは腹心の郎党のよさ、ひそかに多寡はくくられる。

ところで。

と高氏はまた、馬上の春風に想い耽ける。——こんどの長い遍歴でいつたい自分はなにを得たろうか、と。

——あなたは井の中の蛙かわづです。

「これは常々、母からいわれつけていたことだつた。その母はまた門出の日こうもいつた。よく世間を見ていらつしやい。あなたは八幡殿からの正しいお齋^{すえ}。けれどまた、野州足利ノ庄で生れたままの田舎冠者^{いなかかじや}、少しほは他人の情や憂き目にもお会いになつてみなければ……と。

そして、手ずから縫つた守り袋の地蔵菩薩を餞別^{はなむけ}にくれたのだつた。が、その守り袋は、つい、藤夜叉へ与えてしまつた。

「……はて、母にはすまぬことを」

彼はふと、悔いに噛まれた。

与えるにせよ、物にもよる。なんで藤夜叉へ、あれを与えてしまつたろうか。——母は、女に与えよとて、地蔵菩薩の守り袋を、旅の子の門出にくれたわけではなかつた。母にすまないことをしたと思う。が高氏は、氣どがめを、しいて心のすみへ押しやつた。そして自分勝手な考え方をいつかしていた。母の願いは、わが子が多少とも世間を知つて帰ることにあつたのだから、その点では決して母を裏切つてはいないので、と。

「母の仰せどおり、わしは観て來た。……井の中の蛙が世間の端をのぞいたほどな旅かも知れぬが」

彼は自負する。

この旅が無為でなく、大いに学び得た旅だつたとは、信じているのだ。
が、さて。

時勢のうごきとか、世相の表裏とかいった対象になると、彼の思考にはちと大きすぎた。
茫漠、つかみどころのない氣もする。

淀川舟で見かけた一朝臣の姿も、伊吹のばさら大名の言なども、顧みれば、なにか偶然
めいた感である。それが一世の指向とは俄にも信じ難い。

さればとて、現朝廷が、これまでのごとき無気力な朝廷でないことだけは、確かだつた。
——またいま、堂上に流行の学風や新思想が、その目標とするところは、幕府なき天皇一
元の復古にあるのだという機微な唄さざやも、

「……さもあらんか」

と、うなずかれる。

だが、都のちまたは、酒屋繁昌やら田楽流行である。この正月風景にしろ、そんな兆きや
しは、上下どこにも見られはしない。すでに一部の若公卿は、密勅を帶びて、諸州を潜行し
ているほどにまで、事はすすんでいると、道警や左近らは説いたが、はたして、それもど

こまでが真か。——もし事実なら、その彼らがあんな婆娑羅な奢りにぬくもつてのこと自体すでにおかしい。いかに北条幕府のみだれが末期症状であろうとも、あれで、『世直し』を行ろうなどは片腹いたい。

「さても、分らぬことだらけぞ」

一日ごとに、駒は、東国へ近づいていたが、都の空へ遠ざかるほど、彼が学びえた見聞の判断にも、視野をかえた懷疑の雲が生じていた。

旅も早や、すでに三河路みかわじ。

右馬介が駒をとめて。

「若殿、吉良へお立寄りなされますか」

「いや寄るまい。他日他日」

そこもよそに、通りすぎる。

三河幡豆郡はずべん地方には、足利一族の吉良、西条、一色、今川、東条などの諸党がいた。——が、海道もここまで来れば、富士、箱根はもう眼のさき。はや帰心ひたぶるな高氏だつた。

かくて、二月の初め。

足利ノ庄の曹司又太郎高氏は、およそ九十日ぶりで、忍び遍歴の旅を了え、わが領國の土をふんだ。

そして、父母のいる屋形の地、一族郎党のむらがり住む足利の町へ、もう一步で入ろうとする渡良瀬川わたらせがわを眼の前にしたときである。思いがけないものに彼は待たれた。——そこに屯していた一群の騎馬は、たちまち高氏主従をとりかこんで、下馬を命じ、彼に向つて、執權高時の名による問罪ノ状を読みきかせた。

あばれ川

領下とりこの者は、そこを敬称して、

「あしかが政所まんどころ」

とも、また略して、

「お堀ノ内」

とも呼んでいる。

冷え冷えと青い木暗こくらがりをつつむ広大な城戸きどの内は、鑁阿寺ばんなりの七堂伽藍がらんをもあわせて、

裏山にまで屋形の屋根を望ませていた。いうまでもなく足利党の宗家、足利貞氏の本拠だつた。

が、貞氏はついぞここには見えなかつた。久しく鎌倉の大蔵おおくらヶ谷やの方にいて、国へは帰る日もないとみえる。

夫人の清子が留守をまもつていた。——同族の上杉家から嫁いできてもう二十年以上になる彼女だが、

「……家の浮沈とは、今のことか。ついぞこのような瘦せを、身に知つた日はなかつたのに」

と、今朝もまた、屋形の北ノ丸から庭つづきの鏤阿寺鏤阿寺へ、朝詣でに通つていた。

朝々のそうした姿は、かつて彼女が、わが子の又太郎高氏を都の空へ旅立たせた当時から今日まで、どんな風雨の朝といえ、ここに見られぬ日はただの一ひと朝あさとてなかつた。

そして。「……やれ、つつがなく帰つて来るか」と、子の無事をよろこんだのも、いま思えば、つかのまのこと。

その高氏は、一昨年ついそこの、渡良瀬川の対岸まで帰り着いた日、執権の命をたゞさえた一群の武者に待たれて、

——鎌倉問注所ノ査問ノ儀、仰セ受ケテ、申シ開キ相スム迄、国元ニ蟄居シ、慎ミ在ルベキコト”

と、いう厳しい命を蒙つてしまつたのだ。

しかも、である。——高氏拘禁の役目をおびてきたその武士どもは、鎌倉派遣のものではなく、足利ノ庄とは、つい隣国の、新田につけた小太郎義貞の家来を主とし、それに宇都宮、結城などの兵を交じえた一隊だつた。

これも皮肉な処置である。

足利、新田、宇都宮など、境を接する国々の守護には、なるべく、つねに反目を持たせようと努めている幕府の底意地わるい政策にほかならないものだつた。——足利党の家中みながら、無念としたのも当然である。みすみす、主と仰ぐ若殿が、日ごろ下風に見ている新田党の手にかかるて、その自由も蟄居ちつきよの門も、彼らの警固に、ゆだねられた上、「たとえ、高氏殿のおん母たりとも、鎌倉どののみゆるしなくば、お会わせ申すことはならぬ」

とまで、へだてられて來たのだつた。

——爾來じらい、月日はもうここに、二年余りをすぎてゐる。

年号すらも變つて。

正 しょう 中ちゅう 元年

その今年も早や、四月に近い遅桜が、裏の峰にもこここの濠(ほり)にも散りかけていた。清子は、大日如來の御前に、長いこと額(ぬか)ずき、また、地藏菩薩の宝(ほうぜん)前に、香や花をささげ、地藏經一巻を声ひくく誦(よ)んで、いつものように、杉木立の小道を、館(やかた)の方へもどつて来た。

すると、木蔭を走つて、

「母上。吉報です」

と、雀躍(こおどり)りして來た若者があつた。高氏の実弟、ことし十七の直義(ただよし)なのだ。

「よい知らせとな。では鎌倉どののお下(くだしふみ)状(じょう)でも?」

清子はすぐ、わが子の御ゆるしかと、胸おどらせた。

が、直義は首をふつた。

「いえ母上、この御飛脚です。——都におわす六波羅の伯父上（上杉憲房）から、この直義へ、いつになく、細々と」

母はやや失望したらしいのに、直義の方はひとりで弾(はず)んでいた。手の書状を、くりひろ

げて見せながら。

「（）らんなされませ。六波羅の任を解かれて、近く御帰国と見えましようが。……なお、その上にも、鎌倉表に下着げちやくのせつは、ただちに執權どのにお目にかかり、憲房が身に代えても、きっと、甥（高氏）こうしゆの蒙れる御不審に答えて、蟄居とがの科を解かんと、さも御確信ありげに、したためてござりまする」

「そうか。そりや、あの御方のこと。お力にはなろうがの？」

直義が単純によろこぶようには、彼女にはまだ俄にもよろこべなかつた。

これまでとて、幕府への詫びや稟明には、八方、策を尽して来たのはいうまでもない。だが、ふしげなのは、この二年余、問注所から高氏への喚問すら一度も行われていないのだつた。

「母上、母上。もうそんな身も世もなげな（）心配はなされますな。……あの思慮ふかい伯父上が、かならずと、こう書いておられる以上、よほどなお見通しがなくては能わぬこと。
ああ、兄者あにじやひと人もさぞ悶々としているだろうに、何とかこの吉報を、知らせる手だけはないものかなあ」

「……直義どの」

「はい」

「そなた、兄を思う余り、めつたなことを、考へてゐるのではありますまいね」

「悪いでしようか。兄者人へ近づいては」

「鎌倉どのの御直命で、蟄居の門は、わが家の家来ならぬ新田殿の手の者が、かたく見張つてゐるのでですよ」

「わかっています。その新田殿へすがつて、頭を下げるのが、おいやなのでございましょう。お案じなされますな、直義にも意地はありますから」

しかし彼は、母を北ノ丸へ見送つてからまもなく、道行山どうぎょうざんへ狩に行くといつて出たまま、その日、屋形に姿を見せなかつた。

従来も、あわよくばと、兄高氏の幽居へ近づきかけたことは再々だつた。が、どうしてもそここの警固はくぐれなかつた。

もちろん、家臣中にも血氣は多い。直義とおなじもくろ企みを抱く者、腕にかけてもと、悲憤に逸る面々の危険なうずきも見えるので、

「いや待て。へたをすれば、若殿御幽閉とその科わなを、二重にする惧れもある。また新田党にすれば、わが足利党が騒ぎ出るのを、罷おそに待つような、下心やも計りがたいぞ」

と、暴挙は厳に戒めあつて來たのだつた。

「……が、こよいこそは、いかにもして」

と、直義ひとりは、ついに思いとまれなかつたものらしい。その夕べ、渡良瀬川の芦荻ろてきの中に小舟をひそめて、彼は身をつつむ蓑笠みのかさに、やがて、じつとり降りてくる晩春のおもたい夜を待つていた。

日ごろの水の相すがたは、女体の肢線しせんを思わせるが、渡良瀬川は、あばれ川であつた。

ここから上流地方を眺めやれば、赤城、榛名、碓氷など、名だたる山波ばかりである。だからいつたん豪雨となれば、上野下野両国の曠野は、あばれ川のあばれ放題な本性になる。

そんな日の激流に削られたような切岸が、足利の町屋根から数町東の岩井村の辺で赤肌けづをむいていた。そして上には一叢ひとむらの茂みが見える。——もう二年越しも、きびしい鹿垣せんじゆげんの中に一切の出入りを禁じられている千手院の森だった。

今日も、夜となると。

千手院の一と間の灯は、暗い川音に揺れまたたいて、一机の辺りを、ちまちまと照らしていった。

蟄居の人、高氏は、仰向けに寝ころんでいる。——脚を組み、書物を枕に。——そして眼は何を見るともない孤寂こじやくそのものだった。

いましがた、廊の口でカタコトと物音がしたのを彼は知っている。いつものように、警固番の者が、夜食の膳を下げ、次の小部屋に寝具を展べて退がつたのだ。そんな些事まで、朝暮一切のことは、新田党の手で支配されていた。その二年余りを、彼の腹の虫は、「ばかげたことだ」

と、不逞に嘲わらつて、不逞を腹に育てずにいられなかつた。

新田家としては、「これは幕命である、たとえ両家の好誼よしゆみは欠くも、ぜひのない儀」と、しているに相違ない。

だがそれは公式の弁。本心はべつだらう。

由来、新田足利二家の関係は、ただ隣国だけのよしみではない。血においても親類といえる。事は古すぎるが、八幡太郎義家から祖を同じゅうしてきた同根の家すじなのだ。この地方での領土の開発や勢望でも、ほぼ互角の豪族として並び栄えてきたのである。

ところが、頼朝旗上げのさい、新田党の祖は不首尾をやつている。それがたたつて北条幕府代々の後までも、新田家は浮かばれなかつた。いまの当主、新田小太郎義貞の代とな

つても、その格式は、足利家の下風におかれ勝ちだつた。

いわばよくいう“遠くの親類、近くの他人”だ。さらには、幕府の方針も、画家の反目をもつて、つねに両勢力を撓めておく巧みな治策としていたのもいうまではない。

「それには、この身は恰好な具に使われたらしい。おれもばかだが、そんな手にのる新田もばか者よ。……が、どうなとなれ。まさか高氏の一生涯を、このままにもしておけまい。どうせそれほど命脈のある幕府ではなし」

彼は太々しかつた。

押し籠められてからの自暴ではない。本来の横着さだつた。

一身の運命も、そう片づけていたし、この室の有様をみても、彼の物ぐさと整頓には不得手な性質をよくあらわしていた。徒然に読みかさねた和漢の書も、机のチリも硯も、雜然たるもので——そのくせ新田の者には、掃除の手もふれさせなかつた。読書に倦めば寝ころび、食べては寝、今の世に折合えない二十の不逞な生命を、みずから持てあましているかに見える。

晩春の夜の生ぬるさは、いとど囮園の高氏をくるしませた。

若い肉塊は、なにか、疼きにたまらなくなるらしい。思うざまな大欠伸を一つして、

大の字形^{なり}_そに反ツくり返ると、

「いまみろ」

誰へともなく、咳いて、

「……いまに」

また言つて、眉をとじた。

思えば、癪な。

元服の折、天皇領の住人というので賜わつた“治部大輔”も、こんどのことでは、朝廷に返上して、慎みに服してきたのだ。それなのに、いちどの喚問さえなく、おれを生殺しにしておくこの処置は、いつたいどういう幕府のはらなのか。

いつか、新田の老臣という者が、義貞の代りに、見舞と称して、ここを覗いた折も、「もし足利家の御安泰をのぞむなら、ここはお目をふさいで、御出家あるのが、唯一の良策ではおざるまいが。御出家とも聞けば、きっと執権どののお怒りも解けようと、主君義貞もお案じの余りに申しおりまいたが」と、すすめおつた。

ふざけたことを。

おれは佐々木道誉とは違う。道誉のようなお上手もできないし、本心からの出家など、なお真ツ平だ。この青春の黒髪を剃^おろしてまで詫びせよとは、八幡殿の齋と口ぐせにほこる、父もいうまい、母も願うまい。

……ふ、ふウん。

いらざるおせツかいといわぬばかりに、懶^{びん}笑^{しよう}をくれたので、新田の老臣は、顔あからめて、あの時は退^すツこみおつた。

が、そんなことは、今の高氏には、腹の虫がおさまる何の足しにもなりそうもない。

——さても、知りたいのは、その後の世上のうごきである。蝦夷^{えぞ}の乱は、どうなつたろう。都における若公卿輩のうごめきは？

「もしおれが、堂上公卿の一人だつたら、やはりじつとはしていまい。何かやるな。いまののような幕府を見ては」

それにしても、右馬介はどうしたろうか。以来、右馬介とは引き裂かれて、彼のうけた処分も消息も、ここには皆目知れていなかつた。

「……お。鎧阿寺^{ばんなじ}の鐘か」

彼はむツくり起き直つた。毎晩、この音は腸^{ねはらわた}に沁む。——母を思い出すのであつた。——

一鐘の余韻が消えいるまで、高氏はじつと頭を垂れていた。

——と、それからすぐだつた。裏手の方で木でも裂けるような響きがした。つづいて鹿垣の鳴子の鈴が風もないのに鳴つた。

「やつ？」

身を刎ね起して、彼が縁さきまで出た時である。裏の切岸から渡良瀬川の流れへかけて、人影がみだれ合つていた、松明の火も走り廻つてゐる。警固番の手勢に違ひなく、声々に。「そこらだ。その辺」

「いや、もういない」

「上へは、越せぬはず」

「逃げたか」

「それ、向う河原の方へも、手分けをしろ」

——高氏は水を浴びたように立ちすくんだ。誰か自分へ近づこうとこころみた者があるにちがいない。南無三、逃げてくれ、逃げ果おおさせてくれと、彼は祈つた。

直義は、惜しくも兄の高氏へ、近づきそこねた。

根気よく、宵の頃から窺つて、たしかに兄のいる所の灯と見た千手院の鹿垣へまでは、

すがッたのだが、そこの鈴縄に、うかと身を擗からまれたのが運のつきだつた。「——しまつた」と、地に匍はつて、一度、息をころしてみたものの、もう、まにあわない。

彼方の警固小屋の辺で、

「だれだッ」

と、とがめた声が、胆きもにこたえた。たちまち、曲者曲者と、松明のヒラめきまでがすぐ見えて來た。

「ち。ざんねんな」

直義は、あきらめた。

ぜひなく、そこの切岸をすべり降りた。そして下の流れを、ザ、ザ、ザと脛で切つて渡り、向うの河原地へ、飛び上がつた。

夕方、小舟を隠しておいた芦のしげみまで、鶴の飛ぶような低さで走つた。けれど芦荻ろてきは深く、その蕭しょうしよう々は何処もかしこも同じに見えて、小舟は、なかなか見つからない。

「まずいが」

とは、思慮されたが、ゆとりはない。彼は陸へ逃げ上がつた。

すでに、見つけたらしい新田方の番武者どもは、執拗に、彼の姿を眼の線から放さなか

つた。また一方の直義は、わざと岩井村の東を迂廻して、町屋へまぎれ入ろうとしたが、しかし曲輪口には、城戸きどがあつた。

直義とは、気がつくはずもなく、足利家の夜詰の士は、

「待てつ」

と、大喝をくらわせ、

「何者か」

とばかり、あやうく長柄のみねで、宙を飛んできた彼の足もとを払うところだつた。

「わしだ。わからぬか、屋形の直義ぞ」

氣もせいでいるので、彼は言いすてたまゝ、郭内かくないへ逃げこみ、すぐ屋形門へ入るのは避けて、鎌阿寺の堀橋を走り渡つた。

「……はてな。御舎弟さまには違ひなかつたが？」

組頭の佐野十郎が、小首をかしげているまもなかつた。

もうそこへ追跡して來た二、三十名の新田方の番士と、城戸守りに詰めていた足利方の武士との間に、烈しい口争いが起つていた。

「いや、たしかに、曲者はこの城戸内きどうちへ逃げこんだ。渡せい。渡すがいやなら、ここを通

せ」

「どつちも相ならん。また、そのような人間は見てもおらぬ」

「そう庇うのは、いよいよ怪しい。曲者は足利屋形の一族だと、みずからいつているようなものに聞える」

「なんと言ひがかりをつけようが、一步も通せぬ。帰れ、帰れ」

「いや退ひかん。おれどもは、日頃の新田党ではない。鎌倉どのの御直命で、
固に当つておる者だぞ」

「な、なに。囚人とは、たれのことを」

「いうまでもないわさ。おのれらが若殿と仕えているお人よ」

「しゃツ、ほざいたな」

「言つたが、どうした。そこ退けい」

「やわ退こうか。通れるものなら、通つてみろ」

「それつ、踏みつぶせ」

どつち側の手が早かつたともいえない。青白い一閃せんがキラとしたせつなに、闇ぐるみ、

血の香は、人の全部をくるんでしまつた。

喧嘩は本ものになつた。

「やつたな」

血をみたのである。

坂東者の中に眠つていたものが、

「うぬつ」

吠え猛ぶやいな、

「通すな、一匹も」

「ここ通しては、足利党の名折れだぞ。まして大殿のお留守」

「思い上がつた新田蝗め。眼にものみせねばクセになる」

城戸に拠つた真つ黒な人影の中でガチャガチャと矢つがえの音が起つた。いや、その弓弦を充分に引くひまなどはもとよりない。眼近な相手の群れではある。いきなりただ盲矢をあびせかけたのだった。

「くそつ、小癪な」

新田方のうちにも、敢然、指揮をとつて、もう本格な合戦腰の吠えをあげる輩もあつた。
「怯むな、怯むな。足利とんぼが血迷うて、執権どのへの畏れも忘れ、烏滌おこな手むかいに

出たまでのこと。かまわん、かもうことはない。おれどもは公儀の御命を持つものだ。刃向うやつは、叩つ殺して、踏み通れ」

だが、そんな叱咤を待つまでのこともない。

すでに組んずほぐれつの格闘は始まつてゐる。太刀やら長柄やらの刃まぜのひびきも物凄い。逃げ腰の尻を槍で突きあげられて、奇妙な恰好で宙をつかむ者などもあつた。そして一場の黒いつむじの下に、幾人かの死者はもう大地に見すてられている。

これは極端な盲目沙汰だ。

火いたずらも、時により危険極まる。

さなきだに、この辺は、赤城嵐しの蕭殺あかぎおろ しょうさつたる風土と人心を、あるがままにしている坂東平野の広茫ばんどう こうぼうなのだ。

古い莊園制度がくずれ、半農半武士の武族たちが武家勃興ぼつこうの時の波にのつて栄えだし、多少、文化のタネがこぼれだして、人の生活らしき姿が近世咲き出して來たとしても、平ノ将門が生き暴れた時代から何世紀でもなく、原始的な自然児の爪あとはまだ郷土に生きとしていた。——で常々の、新田足利両国間の絶えないがみあいなども、将門以来の遺風といえないこともない。いまに始まつたものでは決してなかつたのである。

だから、それも武士と武士との対立だけでなく、領下の雑人や百姓までが、ひと口に、「——新田いなゞ」

と、彼を下風に呼べば、また一方の住民も、

「なんの、足利とんぼが」

と報いて、野性の歯を剥ぐのを忘れないといった風なのだ。

いわば相互に、悪氣流の支度は充分にできており、機きかけさえあれば、いつでも火となりうる形になつて、いた曠野の枯れ葦みたいなものだつた。——たまたま、それがついに、直義の一行動から、発火したものと観れば、事は小さくとも、なにか怖ろしいものを孕む夜空にも思われる。

さきに、鎌阿寺の堀橋の内へ逃げこんでいた直義も、城戸の変を知ると、いまは潜んでもいられなくなつた。われをわすれて、屋形の方へ。

「おういつ、夜詰ども。——東の城戸に、喧嘩があるぞ。出合え、出合え」

そして、彼方の闇が、おうつと、斜をなすのを耳に、彼自身も太刀のこじりを刎ねあげて、もとの城戸口の方へ駆けもどつていた。

日頃は、よく、

「ゞ」總領よりは思慮ふかいご舍弟

と、いわれたり、

「おちついていらつしやる。何事によれ、ご冷静な」

と見られている直義だつた。

が、その直義とて、やはり土の子、一片の坂東骨ばんどうほねであつたには違ひない。前後、夢中であつたにしろ、いまの彼たるや、別人のようだつた。

「あつ……」

宿を駆けて行つた彼の影は、途中で物に躊躇つまずいたかのゞとく、勢いよく横へ泳いでいた。ふいに一人の武者がぶつかつて来たためだろう。まだ、城戸までは行きつかないうちにである。

すると、空を打ツた武者は、振り向きざま、横なぐりの太刀を彼の睫毛まつげに見せた。直義は、はツと知つて、

「新田の者か」

と驚いて言つた。

いや、叫んだときは、とつさに抜合せていたのである。さしたる敵でなかつたのは、彼

にとつて倅せといえよう、斬ツて捨てるに、時は措かなかつた。そして一と飛びに、城戸まで来て、

「や、どうしたのか？」

ここかしこ、死者は地に見える。だがここでの乱闘は終つていた。城戸の常詰じょうづめは十人ていどだし、新田方の者は三十人近かつた。——当然、彼らの搜査と、それを阻める者とのたたかいは、すでに城戸内へ移つていたのだ。

「不覚つ」

自分がひきおこしたことである。直義は狂ツたような眼いろになつた。

だが、新田の者の蹤じゆうりん躡うりんも、そこらの森の浅瀬へちよつと踏み込んだまでにすぎない。彼らは、たちどころにまた、城戸内から散り散りになつて逃げ出して來た。——足利屋形は空家ではないぞとばかり、総門の内から駆けつけて來た家中の群れに、一トたまりもなく追われたのだつた。

「口ほどもない 蝙いなご輩ばら め」

「新田蝗の逃げ足、見たぞ」

「くやしくば、返してみよ」

罵るかぎり罵つて、それを町屋端れや、河原までも、追いまくして引き揚げた。

「これで少しは、日ごろの胸のつかえが下がつたわい」

悪酒を仰飲あおつた一氣の酔いに淋漓りんりたる鬼のように、こういつたのは無思慮な血氣や、軽輩にすぎなかつた。——当然、このあとのものが来る。そのあたりはどんな形であらわれるかと、屋形の奥の、さらに奥なる北ノ丸の方を、暗然と見ていた家臣も少なくはない。

——そこの北ノ丸へは、騒ぎがしづまるやいな、すぐ直義が呼ばれていた。

彼は、母の姿がいつになく恐いものに見えて、遠くにペタとひれ伏したままだつた。

当主貞氏がいない屋形は、彼女が当然な留守の重荷を負つてゐる。——兄高氏とちがつて、弟は、年に似げない分別者、賢い性さがと見ていたのは、女親の甘さだったのか。……じつと見すえる眼はさすが口惜しそうなものをキラとこぼしかけていた。

「……何をお言やる。あなたが腹を切つたからとて、それで、すむほどなことと思つてゐるのですか。おろかしい血迷い言を。——もう嬰兒あかごでもおわすまいに」

「……でも、母上」

直義は泣きじやくつた。

嬰児でもあるまいに、といわれると、逆に彼は、自分が嬰児みたいに思われ出した。

「——腹を切る、それしか、直義にはお詫びのしかたも見つかりませぬ。死にたい、死なせてください」

「まだ、血迷いを仰つしやるのか」

清子は、それきり黙つて。

「見下げた和子よのう」

あとは、直義の身もだえにまかせたまま、彼女は彼女自身がとるべき道を、じつと、眉に思い沈める風だった。

「……なりませぬか。母上」

「なりませぬ」

「どうあつても」

「鎌倉におわす父君におききなさい」

「父上にあわせる顔などありません。ああ、どうしたらいいか、このお詫びは」

「直義どの」

「はい」

「すこしは落着きましたか」

「落着いているつもりです」

「ならば、お寝みなされたがよい。明日ともなれば、あの始末は母がつけまする」

「どう御思案を」

「子のしたこと」

「…………」

「高氏どのを旅へ出したのも、その兄を思うての、あなたの失慮も、みなわらわの至らぬところから起つたもの。……そうつつみなく打ち割つて、この母が、新田殿の世良田の屋形へ、自身お詫びに行きましょうわえ」

「えつ、恥をしのんで」

「恥などはいうていられぬ」

「が、足利家の北の御方が、ついに意地をすてて、世良田の義貞殿の前に詫びを入れに行つたわ、と人々にいわれては」

「なんの。なんのいのう。……嘲う者には嘲われておりましよう。あなたの、おいのち一
つにも代えられまい。いいえ、義貞殿から鎌倉の府へ、こよいの喧嘩を、もし悪しげまに

でも上訴されたら、もそつと大きな禍いが返つてくるのは眼に見えている」

「む、無念です」

「いかなる愧えを抱いても、新田殿へ膝は折るな、蟄居のせがれに会わせて給えなどと、義貞殿にすがつてはならぬぞと、わが夫の貞氏どのからも、つねには固い御書状であつたが……よも今は、後でのお怒りもありますまい」

「わ、わたくしが、まいりましようず、母上、私をつかわして下さいます」

「あなたが、何しに」

「義貞殿に、頭を下げて謝します。かつは、こよいの下手人こそ、この直義と、彼の怒りでも仕置でも、この身に耐えて」

「それこそ、ただ笑われ草。兄一人の蟄居で足らず、弟までが来つるわと、そのまま、鎌倉表のお下知あるまで待てと留めおかれても是非なかろ」

すると、廊の外から、ことばの途切れを機に入ってきた静かな人がある。まだ三十路があらみのきれいな尼御前であつた。清子の横へ、手をつかえると。

「北の方さま。世良田のお使いには、私がまいりましよう。この尼をおやりくださいませふと。気づかずについた二人は、びくとしたように振向いた。

「お。……たれかと思うたら、覚一の母御前か」

新田桜

田の牛の背も、ぬかるみ道も、花ふぶきが持つてくる白い斑に、今朝は染められてないものはない。

あらましは世良田の屋形から青空へ吹き上げられて、やがてゆっくり降つてくる花であつた。総門道の並木もだが、花御所と里人のよぶ館たちの桜は殊に古木で目ざましかつた。ゆうべ、義貞はわが屋形で、

桜別おうべつの宴

というのを催した。

都の公卿ほどな風流でも贅ぜいでもないが、そんな情緒が彼は好きなのである。弟の脇屋わきやよ義助しげすけや近臣らと、行く春の一夜を惜しんで、思うざま飲み更かしたことだつた。

すると、曉ぢかく。

ここから東北四、五里の距離でしかない足利から、警固番の一士が早馬で、昨夜の変事

をつげて來た。

それに起されたが、義貞は、

「……明日聞こう」

とばかりまた眠つてしまつたのだ。彼にはその時刻がまだ夜半と思われていたほど、酔いもしたたかだつたらしい。

で、彼の起床は、今日にかぎつて、陽も高々な頃だつた。居室の脇息に倚つた姿も、いささか宿醉しゆくすい氣味にみえる。外の花の梢は、ことごとく一夜に衣更えした感で、急に茶みどりの吹キ芽が目につく。

「……さようか。むむ、わかつた。そんなことだつたのか」

眼を、廂ひさしごしの昼の雲にやりながら、彼は横耳で、昨夜のてんまつを、一家臣から聞いていたのだつた。が、これ一つでなく、蟄居中の高氏については、日頃もあまり聞きたがらない風があつた。

「なお、怖れいりますが」

「なんだ、まだ何かあつたのか」

「じつは、その昨夜の儀について。……足利から草心尼そうしんにさまがお越しあつて、殿のお目

ざめを、さいぜんから、お待ち申しあげておりまする」

「尼が」

ちよつと、迷惑顔して、

「あの、鎌阿寺のかたわらに一庵をむすんでおるとか聞くお若い後家尼だの」

「さればで」

「尼は上杉憲房の義妹。……その姉はまたこの義貞の乳人めのとじやつた。なにしに來たか」

「思ひまするに、足利殿の北の御方も、上杉殿の実のお妹。これやお察しに難いことではござりますまい」

「縁をたよつて、尼御前などを託びにさし向けて來たものか。会わでも泣き言はしれてい
るが、姉の乳人にすがられるよりはまだ始末がよい。……会うだけなら」

「会うておやりなされますか」

「有髪うはつのころは、京鎌倉にも少ない美人と、人のよう申せしを、おさなごころ幼心にも覚えておる。
墨染すみぞめすがたは、その麗人をどう変えたやら、見るも一興か。ま、通してみい」

義貞は、待つた。

ふどうごういた彼の心理を、たぶん好色家心理とするのは当るまい。彼はまだ二十四、

五。はち切れそうな肉体である。それに、遠祖八幡太郎の若き日も、かくやと思われる眉もくだつた。ただその彼に美男の自意識がチラつくのは、すこし疵きずだが、それも家臣一統からすれば、新田小太郎義貞の威とも光彩とも仰がれる一種の魅力ではあつたであろう。

「めずらしいお訪ねだの、尼御前には」

「はい……火急なお願いごとで」

「足利から今ごろ着くには、よほど暁早くにお立ち出でか」

「もう、見得もわすれて、牛の背でまいりました」

「はははは。それや見たかつたな。牛の背の美しい尼御前は、さぞや、墨染ふげんぼさつの普賢菩薩ぼけんぼさつのままであつたろうに」

「…………」

草心尼は、口をつぐんだ。

美しい、とよく人にいわれるのが、この女性には、いちばんいやなことらしい。

が、義貞は思つたままを、その通りに口にいつたまでだつた。のみならず何か、もてなしたい気もちすらわいて。

「さだめし、朝のおとき（食事）もまだでおわそう。じつは義貞もすんでおらぬ。ちよう

どよい折、共に朝餉あさげでも」

「いえ、もう」

尼はいそいで白い手を膝の上で振つた。白魚しらおのような指の爪に、内には流れているものが、ほの紅く透とおっていた。

義貞は、強いもせず「——では、後で」と、それは措いたが、しかし、あらぬ話題をすゞ向けて。

「たしか、そもそもには、よい和子が一人おりだつたの。和子はいかが召されてか」「その覚一は、三年ほど前から、都へ行つておりまする」

「ほ、幼いのに」

「琵琶の修行に、縁者えんしやの上杉殿うえすぎでんをたのみまいらせて」

「そうか。だが上杉殿は、先ごろ六波羅解番（解任）（げぱん）（解任）となつて、鎌倉表へ帰府したはず。……すると近日、愛し子の顔を見られるのじやな」「ただ愉しみはそれのみでござりまする」「さもこそ」

義貞はふと、とろんとした眼に物を忘れて、

「うれしかろ」

と、かさねて言つた。

しかし彼女は「……いいえ、なんで私だけが、子に会えるのを、よろこんでいられまし
ょうぞ」と、叫びたげに、顔を振った、その頬にこぼれる露を、義貞は、白桔梗しろききょう
のようなど思つた。思いつつ、彼女がめんめんと訴えることばを、じおもく穩やかな面おもてで聞きとつ
ていた。

「……むむ、足利家では、高氏たかしが二年ふたねごしの蟄居。その上、またも昨夜は、弟の直義なおよしが公
儀こうぎをおそれぬ乱暴沙汰らんぱさた……。そうした中で、縁につながる尼御前おにごぜんが、わが身ばかり、愛し
子との対面を、よろこんでもおられぬと申すのじやな。……なるほど」

尼は、べたりと、その白桔梗しろききょうながらの姿を折り伏せて。

「こ、小太郎さま。お助けくださいませ」

「助けよとは、たれを」

「足利の御舎弟ごしやちさまを」

「それや鎌倉のおさしつにあること」

「そう仰つしやらざに」

「昨夜のてんまつ。まだ逐一は上申の早馬もしていないが」

さ、
なお今なら、
お胸ですむこと。
お願ひでござりまする。一生、
御恩にきて忘れませ

12

「さよの野。……では、恩にきるとお言いやるのか」

尼は、薄い肩にギクとしたふるえを見せた。まだ黒髪をおろさぬ以前の、俗の名をふいに呼ばれたからである。

すうと血をひいて、尼の面が驚きに冴えたので、義貞の方がむしろあわてた。尼自身は忘れていた尼の乳房へ、心ない触れかたでもしたような罪をおぼえたのだつた。

「いやなに草心尼。……つい、昔名が口に出でしもうたまでよ。はははは、氣を悪うす

るな

尼はやつと、納得していた。むりもない、と考えられて来たのである。わが姉が、むかしこの屋形に起居していた頃は、じぶんも常に姉の局へ遊びに来ていた。そして小太郎君（義貞）のお相手にはよい者と選ばれて、ここから近い利根川の舟遊び、文珠山の紅葉狩り、冬は小坪の雪団めと、四季いろいろな記憶が多い。

また、それほどな過去の親しみに甘える気もあればこそ、今日の至難な役を、われから

ひきうけて来たのではなかつたか。……まもなく、彼女は彼女自身の内に、なお恥かしい血のゆらぎがつねにあるのを自覚して、そつと耳の色を紅くしていた。

「ところで」

と義貞は、眼をとじた。わざとらしい振りもなく。

「ほかならぬ尼御前のおすがり、いま申された一事は、よう考えておく」「ですが、足利家では、北の方さま、直義さま、家臣輩まで、命もちぢむ思いで、尼の返辞を待ちおります。どうぞ、お胸のところをたつた今」

「すぐ聞かせよというのも無理な。わしにも舍弟や老臣もある。わけて弟、脇屋義助はきかぬやつでのう。めつたに、うんとはいうまいと思われる」

「とは申せ、おん兄君の御意とあれば」

「そこが難しい。さかのぼれば、両家の確執は、きのう今日のことでもなし」

「御不幸な」

「どつちが」

「御両家ともにでござりまする。……この上野下野の両国に、一つ根から咲き分れた由縁ゆかり

も古いお家ですのに」

「血は薄いものだ。同族たりとも、ひとたび憎みあえれば他人以上憎しみあう。いや、いつそ他人なら笑いあえるが、根ツから新田足利の仲は、あつさりできぬ」

「よろこぶのは、近国の守護や鎌倉の府でございましょう。さもなければ、新田家とて、数代、このような御不遇ではありますまいに」

「それよ。女性すら、そう思うか。新田ノ庄はわが家の祖が拓いたもの。北条殿の御代以来は、一田の領土も貰つてはいない」

「足利どのとて、おなじでございまする」

「が、まだ足利は、うまくやつている。祖先のうちには、北条殿と姻戚をむすび、官職なども、わが新田家を超えて来た。……それが落ち目になりだしたのは、先代足利家時が、自殺となつたあの秘事からだが」

彼も尼も、急に壁でも見たように、押し黙つた。家時自殺のはなしが不用意に出たからだつた。が、義貞はすぐ語を変えて。

「尼御前。……まあ見ていやい。新田家とていつまで不遇ではおらぬ。義貞もまだ若うおされば。はははは。……いや、そもそもの願いはなるべくきて上げよう。ただ、一族どもとの談合もあれば、明日まで待て。明日の朝まで」

おそい朝餉が供された。

しいられる歓待の辛さに耐えつつ、草心尼は心ならずも義貞と共に膳へ向つた。——義貞はその間も、お互の幼時の記憶を持ち出しては、頻りに無口な尼へ話しかける。その隔意のなさに、彼女もふと、

「このような御機嫌ならば」

と、はや義貞の胸に、願いは、ききとどけられていたような錯覚もつい抱いた。
館たちの北庭に、いまは使われてない古い女御所によごしょづくりの一亭があつた。彼女は、義貞に

請うて、

「あの離亭はなれにて、お待ちしておりますれば、どうか明朝には、吉よい御返辞を」
と、かさねがさねの手をつかえた。

すると、義貞は、

「評議の末、どうなるかは、計られぬが、まあお待ちやれ」

と、また俄に口を濁して、奥へかくれた。

ああそだつた……と、草心尼は後では思う。まだ、ひきうけたと、義貞がちかつてくれたわけではなかつた。ただ返辞は明朝に、といったまでのこと。わるくとれば一片の世

辞だつたかも分らない。

「もし、このことが、調わずに終つたら」

思えば重すぎる使命。そら恐ろしい心地に打たれる。あらしの中に一夜を待つような不安だつた。

さなきだに、そこの、古女御所は冷え冷えしていた。明り窓にはクモの巣が見え、小机、櫛匣などの調度も、何代前の女人の用具やらと思われて肌さむい。

が、彼女は耐えた。すこし座に耐えていると、常に返る。

ひとは草心尼を見るに、冷ややかな花の孤独と、憐れみを感じるらしいが、彼女はじぶんを孤独と思つたことはない。

それも、親鸞(しんらん)がいつたような“——仏と二人づれ”でもなかつた。仏をも加えれば、彼女はいつも三人づれといつてよい。その一人は彼女が腹をいためて生んだ覚一だつた。だから彼女の姿には見えるその孤独も、じつは人知れず、心は賑やかな三人暮らしの月日だつた。——しかし今日ばかりは、その賑わいも心に持てず、ほんとの独りぼツちの身を、終日(ひねもす)、硯に水もない小机に支えられていた。

一方。——館の方でも、その日は暮れるまで、何か物々しげな人出入りだつた。

近郷の新田一族が、次々に館の外や中門に駒をつなぎ、また足利表からは、昨夜の死者のかばねや怪我人などもやがて運び込まれて来たらしい。

さらに、たそがれ迫る頃の評議では、何か激昂していう者の声が、草心尼のいる小机まで聞えて来た。

「おお、あの声は、死者の縁類か。無残な亡骸を見ては、その怒りは無理もない」

彼女は死者のために、口のうちの経をくり返していた。そのうちに、誰が運んできたのか、彼女の墨染の袖のわきに、ポチと夜の灯がともつている。

さすが疲れて、彼女は小机に横顔を伏せたまま、いつか、うとうと居眠つた。そのままの姿で夜明けを待つ覚悟なのである。

しかし四更の頃。義貞は、朝も待たずに訪れてきた。のみならず誰も連れぬただ一人だつた。前日の戯れ言もあることだし、彼女がはつと、きびしい居すまいを示したのも、無意識にせよ無理ではない。

義貞は、そばへ来て坐つた。

「……おう。ついに寝もやらずいやつたか」

「御評議のよい落着きを、ひたすら念じておりましたので」

「む。評議は二た刻ほど前に終つたがの」

「して、どうなりましたか」

「舍弟の次郎義助をはじめ、一族老臣どもまで、いッかな、この義貞のなだめに耳をかそ
うとはせぬ」

「……では、御主君のあなた様のおことばでも」

「足利の城戸では、わが家の郎党五名が斬られ、六名は重傷おもでを負うた。——しかも、手を
くだした中には、高氏の弟直義もいたとのこと。で、次郎義助などは激昂のあまり、すぐ
にも足利へ襲よせて、仕返せんと息まく始末じや。尼御前、せつかくであつたが、あきら
めてくれい」

「いえいえ、これを見ていては、御両家の間に、なおどんな血を見るやら知れませぬ。小
太郎さま。なぜ御主君の重さを以ても、おさとお諭しがなりませぬのか」

「小夜野さよの——」と、義貞は、尼の面をじいつと見すえた。それで氣づかれたことだつた。
義貞は館たちの方で、更けるまで飲んでいたのであるまいか。眼は不気味に赤い醉光をおびて
いた。

「口ぐせではあろうが、そもそも、わしの幼名を呼ぶ。だから、わしもそもじの俗名を呼

「ぶにふしきはないな」

「そのようなことは、もうどうなど……。それよりは、なにとぞ、もいちど、殿の御威光をもちまして」

「いや、まにあわん」

「どうしてですか」

「はや、事つぶさに認めた上訴の状を使いに持たせ、即刻、評議の座から、鎌倉表へ早馬を出した」

「げつ、上訴の早馬を」

義貞の宣告に似た言い方もだが、一縷の望みを、とつさに失つて、彼女は暗い目まいのうちに、手足の先まで、冷たくなつてゆくのを覚えた。

すり寄つて、義貞は、その手をとつた。

「小夜野、どうしやつた。……両家の間はどうなどなれ、そもそもじの身は、わしが悪いようにはせぬ。わしを頼れ。義貞を力と思え」

「お、お離し下さいませ。……わが身を嘆いているのではございませぬ」

「よも、義姉の身を、悲しんでいるのでもあるまい」

「…………」

「子の覚一のことか。ならばその子も、義貞が手にひきとつて、たとえ盲めいでも、ひとかど
の者にしてつかわそ。……のう小夜野、なにもさまで悲しむことはなかろうに」
「あつ、な、なにをなされます」

かたわらの灯が仆れた。簾れんのすそが大きく揺れて、紛々とうごいた白い花屑が、狂ツた
人影を、妖虫のように旋ゆくつて舞つた。尼の影は、縁の階きざはしをころげ落ちるように逃げて、い
ちど一叢ひとつむらの山吹の蔭に隠れ、また走ツて、供の牛飼の男を、あちこち呼び廻つていた。

——義貞は追わなかつた。縁の隅に立つて、
「はははは。ははは……」

と、幼い頃の悪戯遊びでも思い出したように咲笑していた。

相互の城地は、五里ほどな距離しかない。

だから渡良瀬川に小手をかざせば、世良田の動静は、およそ手にとる如きものだつた。
いちいち足利方を刺戟する風声とならずにいない。きのう以来、足利屋形の内外が、まる
で“砦がため”の観を呈したのも、

「新田はすでに、合戦腰だぞ」

と、つたえられ、

「鎌倉へ早馬して、あわよくば、足利断絶の下状を握り、これへ襲する腹とはみえたり」などと険悪な声も流れたからであろう。——聞きつたえた足利譜代の郷武者たちは、氣早にも黴かびを払つた伝来の物ノ具などして。「——宗家のおん大事、今にあるか」とばかり、近くは佐野、御厨みくりや、あるいは田沼、葛生くずうの山奥からも、夜ツびて城戸へ馳せつけて来る騒ぎだつた。

「たれが、そのような令をば布令ふれたか。——城戸に軍いくさ揃そろいせよ、などとは、わが夫貞氏つまどの以外には、一人いちにんとて、いわれまじき令であるはず」

夫人の清子は、老臣いちにん、侍さむらい頭がしらなどをよびつけて、その盲動を、きびしく叱つた。

——とはいえ、これは彼らの命令でもない。いわば自然の発火現象で、彼らもその鎮撫にはほとんど眼いろを変えている。

こうした中で、ただ一縷る、清子は草心尼の返事だけを心待ちに待つていた。

——が、やがてその日帰つてきた尼は、疲れた姿を、義姉あねの前に薄くひれ伏すと、懐こらに詠えてきたものを、いちどに吐いて咽むせぶように、

「お、お使いの儀は、やぶれました。さし出がましゅう、われから世良田へまいりながら、この不首尾、おわびのしようもございませぬ。くちおしゅうございまする」

と、泣き沈んだ。

「そうかや。ああ、ぜひもない」

清子は、予期していた風もある。かえつて、身も心も一そうひきしめたように、きつとなつて。

「おそらく、わらわが世良田へまいつても、やぶれは同じだつたである。……この上はもう、さいごの心をきめました。そなたは元々、尼前あまぜのおん身。草庵に帰つて、ひたすら籠つておられるがよい」

しいて、尼を退がらせ、すぐ老臣をよんで、

「——従者は多勢いらぬ。旅輿たびこしの支度を命じて給もれ」と、いいつけた。

そして、また。

「わらわはこれより鎌倉へまいる。わが夫つまのおさしづを伺うためじや。また、次第によつては、執権殿へ御拝謁をねがい、子の高氏とがの科は、元々、この母にあることなれば、子の

罪に代わらせて給えと、お訴えしてみる覚悟ぞ。……が、もしやわらわの留守の中に、一ト矢の争いでも起しては、みな仇事あだごと。きツと逸り男はやおどもの荒駒を、城戸の内につながせて、よう留守をたのみますぞえ』

と、いい渡した。

そしてその翌日、彼女の旅輿は渡良瀬川を越え、南の方へ旅立った。

置文おきぶみ

輿に頼る行程は、牛の背よりもまどろしい。女性の旅のばあいは、なおさらである。

担う小者は、一里二里こしごとに、肩を代えて行くが、すぐ汗もしどとに喘ぎ出す。

しかし、事態の非常は、緩々たる日頃の悠長さをゆるさなかつた。『足利殿の北ノ御方』という威力やら供人の馬蹄の音も、それにムチ打つごとく、遮しゃにむに二無二、旅路をちぢめていた。

早馬でさえ、鎌倉までは三日路あまりといわれている。その三日目、輿の列はまだやつと、武蔵国比企郡の低い山すそ道を、入間川いるまがわの方へさして行くのが小さく見られていた

にすぎない。

「あと、幾夜を」

疲れも思わず、輿の遅さに、清子は途々さいなまれていた。——そしてまた、

「……このような国もとの大事を、良人の耳に知らせたものか、聞かせぬがよいか」

それもなお、途々、心に迷うところだつた。

そのことは、彼女の胸だけにとどめ、家中でも老臣以外には、告げていないが、久しく鎌倉表にある良人貞氏は、もう長いこと病中だつた。

これは子の高氏、直義すらも、知つていない。

世間もまた、それを貞氏の単なる公儀への“慎み”と見てゐるふうだが、事実は、寒い足利にも帰れぬほどな病態であり、鎌倉の気候が彼の療養にとつて、別れえないものだつたのが、いちばんの理由であつた。

それゆえ、清子も、

「もし、このために、ご病氣を重らせでもしてはならぬ。万一のときは、上杉殿を相談あ
いてに」

と、密かには、心にきめていたのである。——実兄の上杉憲房が、六波羅から帰府して

いると聞いているのが、このさい、ただ一つの力だつた。

しかし、当面の難問題、良人の病弱、二児の行く末など、彼女の今は、櫓梶ろかじもない小舟が闇夜の狂浪にゆられてゆくのにも似ていた。——すると、供先で一人が叫んだ。

「おつ、彼方から三騎、無法者らしいのが、砂けむりを立てて飛ばして来る。道をよけろ」旅を行けば、いざこの領下にも、大太刀と荒駒を持つ若い無法の群れがやたらに目につく。

輿の従者たちは、駅路うまやじに着いても、市いちを見かけても、努めて彼らの眼光を避けた。彼らは、若さと野性を平和な日に持て余して、つねに退屈の吐け口を、どこかに見つけようとしているような者どもだつた。

——たちまち。

バ、バ、バ、バツと三騎の武士が一瞬に前を過ぎた。そこでまた、輿は道に出て、南の空を見つつ歩いた。今日あたり、ようやく、やがてさしかかる武藏野の彼方に、富士の姿も大きかつた。

すると、後ろで、

「あいや、しばらく」

呼ぶ声に、振返ると、やりすごした先の三騎が、取つて返し、

「もしや、お輿の上の女^{によしょう}性^はは、足利殿のお内^{うちかた}方^{では}おざらぬか」と、訊ねた。

はて、やつかいな。怖れるのではないが、大事な旅先と、生返辞をにぎすと、すでに武士たちは、駒を下りて、

「おう、やはり足利殿の御家中だったな。われらは上杉殿の郎党、主命にて、これより足利表へ急ぐ早馬の者でおざるが」

と、これは意外なことばだつた。

「輿^{こし}を降ろして給も」

清子は、降らせた輿の内から、三名の姿へ。

「いま聞けば、上杉殿より足利表へ急ぐ使いの者とか。……？」

「御意にござりまする」

一人が頸にかけていた革苞^{かわづと}から一書を取出して。

「鎌倉を立つ折、お主の仰せには、途中、北ノ御方の旅輿^{たびこし}に出会うかもしだぬ。氣をつけて行けとの御意でござりました……が、あやうくただいまは」

「オ、こなたは知らず、つい、駆け交うところであつたの。……して上杉殿には、都から御帰府の後も、お変りないか」

「以来、一日のお憩いもなく、いちばいお忙しげな毎日を見ております。——お下向早々、高氏さまの不当な御蟄居が、そもいかなる幕府の御嫌疑によるものなりやと、その御詮索の奔命やら、要路の方々に迫つて、いちいち御直談をおとげあるやらで……」

「ああ、さまでに」

「折も折、そこへ新田ノ庄より幕府の内へ、早馬の上訴でした。——で、御処断によつては、足利家はお取潰しだろうとか。イヤそれには服すまいとか。さらには、新田足利領の国もとでは、すでに合戦が起つてゐるとか、いやもう、異な風聞が鎌倉じゆうにわき立つて、われらまでも、ただではすまじと、その夜は、鎌を磨いていたことでござりました」「では、新田殿の上訴が、そのように大きく聞えて、あらぬ噂までを、鎌倉の上下につたえていたのですか」

「当夜も、おあるじ上杉殿には、鎌倉政^{まんどころ}所につめ切つて、評定衆の座でお激論もありしどか。また、内管領長崎殿や執権の君へも、直々のお訴えを披瀝して、夜半もすぎる頃、扇ヶ谷のおやしきに引きとられるや、ただちに行けど、われらに、この飛脚をお命じ

あつたものにござりまする」

「…………」

勿体なやと、清子は聞くうちにも、兄の宴やつれを瞼にうかべた。
みだれた幕政と権力の百鬼を相手に、いかに兄憲房が、孤軍奮闘したことかと、その慘さ
心んしんが察しられる。

使いの武士は、書状をささげて。

「では、途上なれど、紛まごうなきおん方様、これにてお手渡し申しあげます」

「おお大儀であつたの」

輿ひらの内で、すぐ披く。

いや、その見馴れた兄の薄墨の筆ぐせを眼にたどるまでは、拝むような心地と、さては
また、凶が吉かと、痛いほど胸はときめいた。

いそぎ参らすまま、委細はいま告げ申すまじ。一刻も早く、そもそもに安堵させんが
為の、兄の凡情とのみ、御覽候へ。

高氏どのの身柄みがら。

近日、鎌倉表へ召ある可べく。

新田へも同様、沙汰下さる可候ふ。

両飛脚とも、今明中に、御加判賜はり次第、府を立ち、
不日おん眉を開き候はん。

雪山春不遠
せつざんはるとほからず

唯々、解くるをお待ち候へかし。

のりふさ

足利御内室

おん許

「忘れはおきませぬ」

憲房の手紙を涙にして、清子は鎌倉の方をふし拝んだ。

——近日、赦免しゃめん

とまでは書いてない。が、高氏へ鎌倉の召めしが行われ、ほぼよい解決の見越しもあるらしい兄の文意である。闇夜に光とはこのことか。彼女はしばし輿の内にその姿を泣き沈めていた。

「いやいや、まだ、疲れを思うのは早かつた。まことの安堵をみるのは、これからのこと。
そうじや、ここまででは来たなれど」

そこで憲房の使いは返した。同時に彼女もまた、この日途中から足利表へ引っ返して行つたのはいうまでもない。

それと前後して、執権加判の鎌倉下状が、新田ノ庄へも足利へも、早馬で着いた。
いざれも召状である。「——幾日迄ニ着府ノ事」と、期日も明示されていた。

即日。

高氏のいる千手院の警固は解かれて、番屋の新田衆は、当然、新田ノ庄へ引き払つた。
そしてその後へ、幕府の使臣が臨み、

「上府は、お身までよいとの仰せ下しどおざる。ただし、お示しの日までに、相違なく
御着府あるよう」

と、高氏召状の一札いっさつを直接彼に渡して帰つた。

つつしんで、命はうけたが、高氏はこの沙汰に、べつだん驚喜の態でもなかつた。当り
前ともしていないが、やがて、どやどやとそれへ来て、一様に平伏して泣く家臣輩を見て
も、また、その者どもの無念がることばにも、よろこびの嗚咽おえつにも、彼のみは、瞼も赤く

しなかつた。ただ大勢の感傷の中に欠伸をしないでいたにすぎない。

そこへ、母の清子も來た。

「みなは、退がつていやい。ずっと遠くにいて給も」

彼女は、人を払つて、

「……久しやな、高氏どの」

と、子の前に坐つた。

さすが、胸の色も出て、

「母上でござりましたか」

「思いのほか、変りものう……」

「母上には、いたくお襄やつれになられましたなあ」

「そうかや。母はあなたを信じていて。それゆえ、さまでは老いぬつもりでいたが」

「先ごろは、直義めがここへ近づいて、ばかな真似をした由でござりますな。あの律義な

弟めが」

「いえ、それも、一時はきつう胸をいためたが、かえつて、あなたの身を解くに、今となれば、偉せとなつたようなもの。委細は、お聞きか」

「ただ今、家来どもの口々から、聞かされていたところでござりました。……が、高氏は、新田との喧嘩はどうも好きませぬ。家来どもの言い条は、ややもすれば、新田への意趣遺恨とか、外聞とか、それに尽きているようで、困つたものと 思います」

「よういわれた。あなたが屋形へ坐られたら、第一にその儀を、家中一同へ言い渡して給もいの。そして、早々に鎌倉表へ出向かねばなりませぬぞえ」

「行つてまいります。——が、その前に、折入つて、お願ひの儀がござりますが」

「願いとは」

「鎧阿寺の秘封と聞く、家時公の御厨子の置文みすしを、お見せ下さいませぬか。ぜひ高氏に、このさい、披見をおゆるし下されませ」

「えつ、置文を」

……母は血をひいた面を凝らして子を見ます。

……子の高氏は恐い眉をしてその母を正視する。

母子の血はたたかつた。

日ごろ、一家中の誰もが“魔の言葉”のように怖れ、足利家の禁句として、口にもせぬものを、母子はいま、母子の仲でつい口にもらした。

いや、なにか異常な決意でもあるかのようだ。ひいんと氷を閉ざした池みたいに、清子が^{けしき}気色を変えたのも、むりではない。

「……見たいのですか。高氏どの」

「ぜひに」

「どうして、俄にそんなお望みをば」

「いえ。決して俄な出来心などではございません」

「では、いつから」

「過ぐる年の、忍び上洛のみぎり、わが家の知行所、丹波篠村の領家へ立ちよりましたさ
い、書記の引田妙源より、その“置文”的秘を、聞き及びました」

「おう、妙源がのう」

「薄々には、高氏も前から、存ぜぬことではありません。が、一見の欲止み難く抱き初めたのは、まさにその折からです。……すでに高氏元服の過去にも、見すべしとなす者、また、いや幼年ゆえ、まだ早しとなす者、二た派に別れて、ついに沙汰止みとなつたまま、
今日に至つたものとか」

「…………」

「母上。高氏とて早や二十歳です。もう幼年でもござりますまい」

「……が、^{のう}高氏どの。聞きわけて給もい。ほかのことなら、何なときいて上げますが」「な、なぜいけないのです」

「まあ、恐いお子やの。そう食つてかかるいでもよからう。鎌倉へ出府したら、お父上に伺うてござらん saisai」

「いやですっ」

と、高氏は駄々つ子のようにかぶりを振つた。

「そんなことなら、ここで母上におすがりはしません。さいぜん母上は何と仰せられましたか」

「……の母が」

「ええ。——母はあなたを信じていて、と仰つしやつた。そのただ御一言こそ、どんなに、高氏にはありがたかつたかしれません。いや、母上もこの子を、やつと一人前の大人に見て下すつたかと、うれしかつたのです。……しかるになぜその子を信じては下さいませぬか」

「……」

「第一、私には、わが足利家の内に、そんな魔の呪符じゆふみたいな暗い物があるということだけでも我慢がなりません。母上は秘密がお好きなのですか」

「ま。憎ていな」

「おゆるし下さい……」と、急に身を小さく、子の姿にして。
 「じつの所、高氏は瘤かんが立つております。家来どもには、木像のごとく押し黙つて見せておりましたが、二年余の忍辱にんにくと堪忍が、つい母上には甘えて、せきを切つてしまふのでござりまする」

「……わかりました」

「お分り下さいますか」

「高氏どの。あすの暁、鑿阿寺ばんなしへ来て、お待ちなさい。いつものよう暗いうちに、母も朝詣でにまいりますから」

「では、その時に」

「おお、母はもいちど、あなたを産む氣で、男の子こを産む陣痛に耐えましようわいの」

母の清子と共に、高氏はやがて、千手院から、屋形の方へ引移つた。

輿を降りた彼の姿を見ると、城戸から中門、さらに杉木立の奥まつた辺りまで、歓呼と

もいえるどよめきが流れた。何年ぶりかのこだま駆である。

同日中には、領下各地の郷武者さとむしゃたちも、それぞれの郷へ帰つて行き、家中一統の間には、久々の謁見やら、内輪の小宴なども行われた。そして、明日はさつそく、鎌倉立ちの途につかねばならぬが、高氏の就寝は、夜半をすぎていた。

——それからのこと。眠る間はなかつたろう。いや、眠れなかつたという方が彼の心のすがたに近い。

「……おお。……はつほどときす初時鳥」

高氏はもう起き出している。

山時鳥は、毎年聞く。

が、この朝の時鳥ほど、はつきり初時鳥と意識して耳を醒さまされた例はあるまい。

まだ、暁もまつ暗だが、彼は寝所の廊を出て、大股にどこかへ消えた。——ほどなく遠い湯殿の辺りで、ザツザと何十杯となく水を浴びているらしい響きがしていた。

それに眼ざめた小侍が、

「あつ、御起床か」

あわてふためいて、燭しょくやら衣服などを、持ち運んでゆくと、

「そこへ置け。そして退がつていい」

高氏は赤裸な背を向けたまま、凍(こご)えた四肢を拭いていた。
髪をなで、やがてまた、衣服を着こむ。

肌着から小袖、袴まで、みな白地だつた。狩衣は薄色かもしれないが、燭の光では、それも白い。

ゆうべ、北ノ丸から、

「……明朝は、これを召してお渡りあれ」

と、母がわざわざ侍女に持たせてよこしたことから推しても、今曉、母が自分に見せる
と約した鎧阿寺の“置文”には、どんなおそ畏れと大事をとつてているかがわかる。

その厳肅な意味を、子へ、どう受けとらせるかに、思いを千々とくだいでいる母の無言
なものが、日ごろ物(もの)臭(くさ)な高氏をしても、この水垢離をとらせたといえようか。

ほどなく、彼の白い姿は、新しい菅草履(すがぞうり)をうがち、音もなく、中門を出て行つた。
すると、物蔭で待つていた弟の直義が、つと、

「兄者人(あにじやひと)——」と、兄の袂をとらえて言つた。

「……私も参つてはいけないでしようか。置文を拝見に」

「や。直義か」

「兄者人がゆるされるなら、弟の私にだつて」

「母上に伺つてみたか」

「いえ、おゆるしはえておりませんが」

「じゃあ、よせ」

「なぜです」

「なにも、四つの眼で見るには及ばんさ。なあ直義、おれが一見しておけば、おぬしも見たのと同じじやないか」

「は」

「しかし、それは同じでないというならば、尾^ついて来い。その代りそれは二人は他人だということになるぞ」

「……兄者人。……行つてらつしやい。直義は参りますまい」

「そうか。よくききわけた。まだ夜明けにはだいぶまがある。家来どもが眼ざめるとまたうるさい。戻つて、寝ておれ、寝ておれ」

鎧阿寺、ばんなり
大日堂のゆかは、だいにちどう
漆^{うるし}のような闇だつた。

太柱ふとばしらも、高い天井も、墨一色のしじまである。ただそのまんなか辺に、ぽつねん孤坐していた高氏の影だけが、微かに白い。

「……まだか」

今曉みたま。御靈屋みたまやのおくを開いて、置文おきぶんを取出している母の、ゆるしの合図を、ここに控えて、さつきから、待ちすましている高氏だつた。

母の清子は、自分より先に、北ノ丸を出でいたらしい。

母はゆうべ言つた――

「わらわが、置文を取出したら、やがて御靈屋の鈴繩を引きましよう。それを聞いたら、あなたも、廊の橋を渡つてよい。そのとき、母はおらぬが、篤とくと、腹をすえて御披見なされよ」と。

ここは足利家の氏寺うじでら、母の清子は、わが居間みたいに、隅々の勝手まで知りぬいている。……高氏はもうだいぶ待つた。

そのうちに、遠くで、誦經ざきょうの声がした。母が朝々欠かさない地蔵經のおつとめらしい。高氏も自然それを共にするかのように頸を垂れた。そして、

――腹をすえて。

と昨夜言つた母のことばを、さまでまに解してみる。「腹をすえて」。そもそも何を、置文のうちから見るのか？

やがて、誦経がやんだ。

と、まもなく、闇の一隅で。

り、り、り、りん……

と秋の虫でも顛え啼くように柱の鈴繩が鳴つた。「……おうつ」と高氏は、腹のそこで、母の合図にこたえて起つた。

廻廊から廊の橋を、キシ、キシとしづかに踏み渡つてゆく。御靈屋の一宇はいとど暗い。が、御壇みだんノ間まの床に、手燭の小さい灯が見える。そして母の姿は、もうそこにはいなかつた。

「…………」

高氏は、床ゆかに坐つた。

——これ見給え、といわぬばかりに、手燭と共に、法相華文蒔絵ほうそうげもんまきえの手笛てばこがおいてある。笛には青銅の座金もあるが、鍵はかけてない。ぼてつと湿氣をおびた一封の包み奉書ほうしょが中についた。

「……あ。これか」

いちど手にはとつたが、高氏は、またすぐ下においた。

そして、御壇ノ帳とぼりの蔭に冥々めいめいと立ち並んでいる先祖代々の位牌の御厨子を、微み小しような灯ほゆらぎの中に、じつと見あげた。

それは、彼自身の血を単位に、過去の繁茂を仰ぎ見せる“系図の大樹”そのものだつた。

このほか女子や母系の人々、分家の支族など、かぞえきれない葉や枝がある。置文（遺書）の筆者家時などは、つい近年の故人にはすぎない。が、その祖父の自殺の原因も、今は解けよう。高氏の手はわなないた。

祖父の家時を、高氏は、顔すらも知つてない。

ただ、幼時のうろ覚えには、その足利式部大夫家時は、弘安十年、まだ三十五の若さを、この御靈屋で、腹を切つて死んだとか。

そしてそのさいの遺言状“置文”は、以後、厳秘となつて、世継のもの以外は、見せし

めない家憲となつた。——がただ、高氏の父貞氏のみは、かつて、見た日があつたにちがない。

「……あわれ、なにをば、切腹の日に、書きおかれしか」

高氏は、默礼した。

そして、畏る畏る封を除くと、紙質のちがつた、べつの一書があらわれた。……と、故人の鬼魂きこんがそこらを旋まわつて啾しゃうしゃう々々と生き身に何かを訴えるようだつた。——高氏は、指のふるえを禁じえない。抜きかけたが、ベリツと、いいそうな、硬こわい感触にもためらわれた。斑はんはん々々と、紙端に黒く乾ひからびているのは、血の痕らしい。

「おつ……」

燭を切る。

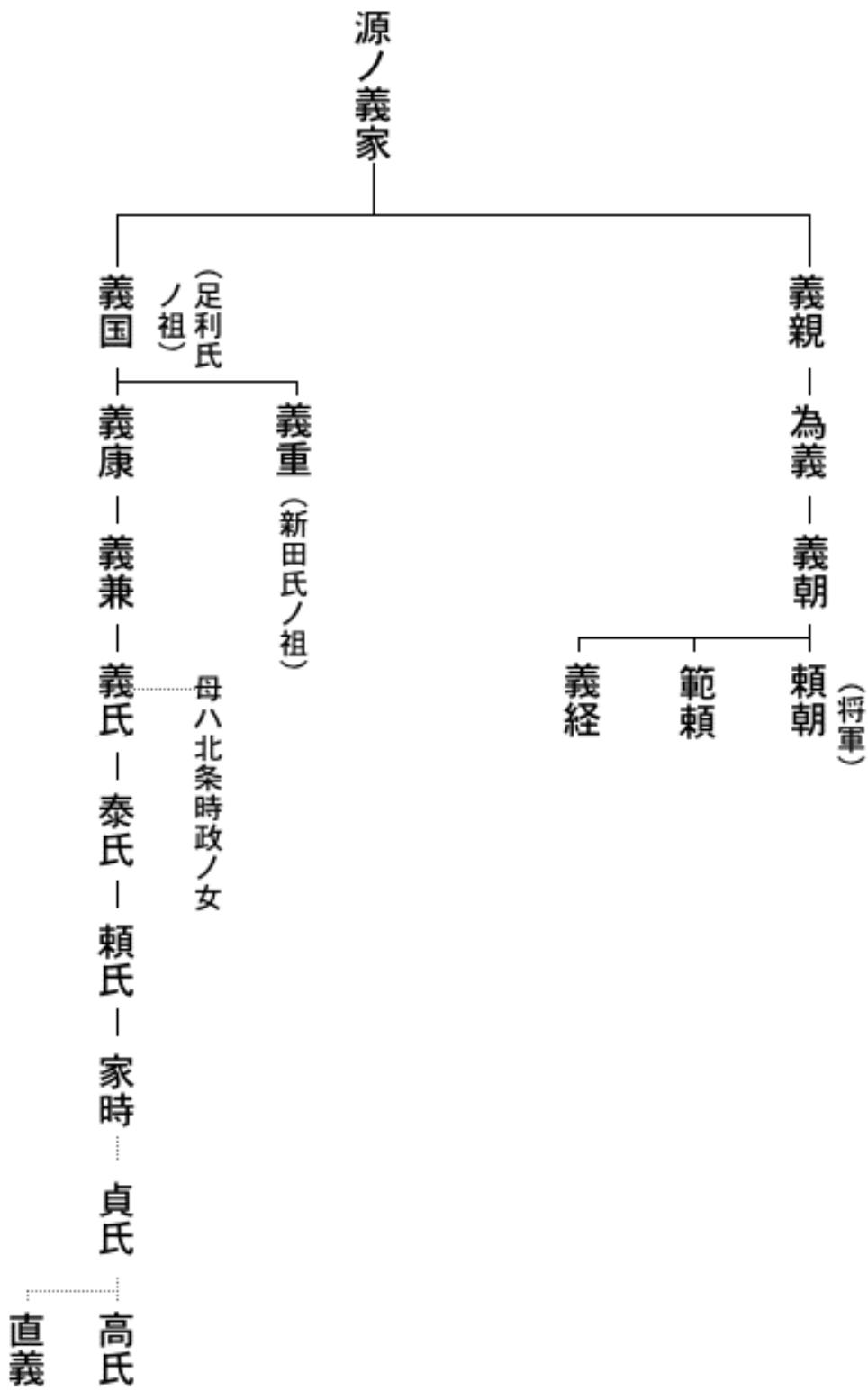
下に繰り展べた血書の一字一字へ、彼の眼は食いつくようにかがやいた。

弘安十年二月二十一日

ゆゑあればこそ、ここに書きおくなれ。さあれ、世には告げてよ。

われ、狂ひ死にせりと。

不肖家時、清和の嫡ちやくりう流に生まるといへど、かなしいかな、徳なく才とぼしく、



家祖の遺託に応ふるあたばずして、苦計むなしくやぶれ、かへつて、家統も危きを見、わづかに家名の絶えを支へんため、ここに一切を闇に附し、一身を屠腹して、子孫に詫わぶ。

そもそも是これ、家時が宿命なるか。

すでに、家の遠祖の人、置文して、後代のわれに言へり。「七代の孫そん、かならず天下をとり、時の悪政を正し、また大いに家名をかがやかさん」と。

すなはち、家時はその七代の孫にあたれり。しかも、家門は世々衰微をたどるのか、北条が悪政は、いよいよ民をくるしめ、朝てうを悩ましたてまつる。

家時、凡庸なりといへ、いかで祖廟の垂言すゐげんに報ふなく、生を偷んで晏如あんじよたりえん。

ひそかに、青雲を思ふや多年。どさう土倉に弓箭きゆうせんは満ち、山沢さんたくに健児は待つ。然れども、その日を見ず、いま、事あらはれて、鎌倉沙汰の軍士、檢非違けびゐのため、この地に殺到さつたうあるべし、と聞ゆ。

機熟きさず、諸州の同心と往来の秘状のみ、今は、あだとなつてここに積まる。むなしき弓箭、またすべて、一炬きよの灰となされん。乞ふ、家時が亡骸なきがらも、その火に附せよ。

死するに当つて、われより三代の後の子に嘱す。わが意を次げよかし。ゆめ、供^{くやう}
養事^{ごと}無用なり。唯、われに代つて、遠祖の遺託を為しとげてよ。泉下、その日を待
ち侍^{はべ}らん。

置文を前に、高氏は化石したようにいつまでもその眼を凝らしていた。

そして忘れていた呼吸が、つよい衝動の底から、ほツと一つ大きく吐かれた。

「……三代の後とある。……祖父家時どのから三代めの子といえば、おれではないか。た
れでもない。この高氏」

彼は、そそけ立つた。

自分もまた、この置文の主のように、いつかは、腹を切るような宿命の生まれなのか。

「いや。ば、ばかな……」

誰へともなく、つよく首をふツて、

「この高氏なら、そんな下手はやらぬ。もし、やるからには」

何か、総毛立つばかりな大覚悟を感じながらも「……もし、やるなら？」と、心はどこ
かで踏み迷っていた。「やる！」とは踏みきれない理性か臆病かが、彼はある。

とはいえ、彼のせまい眼界で現実を見ても、人は北条氏に飽いている。世はその悪政に

怨嗟^{えんさ}している。若い疼^{うず}きは、一切でない。いまにみろ、とは閉門中も明け暮れつぶやいていたことだ。出たら暴れてやるぞ、とは腹でちかつてていた程である。

だが今。

家時の血書の置文を見るにおよんでは、その猛氣も、かえつて、水を浴びたような怯み^{ひるみ}に彼を変させていた。——それが彼の臆病さだとはいえるかもしれない。——が、彼の心の皮を剥けば、こういう思慮に違いない。

「おれは、腹切りはいやだ。……祖父家時どのみみたいな愚は真似とうない」

そして、また、

「おん祖父は、よほど正直正道なお人。それにひきかえ、この高氏は横着者よ」

そもそも、奇なる家柄ではあると、思う。——わが足利氏は、北条氏の主筋ともいえる名門、いつかは北条を仆して天下をとれ、などと遺言した一番最初の遠祖とは、誰人なのがか。

そんなせいで、由来、足利家には、言わずかたらず、叛逆の気もちが、代々の血に流れて來たのである。——また、時の幕府も、警戒をもち、気長に足利弱小化を、計つてきたに相違ない。

「この身が、最後だ」

高氏は、しかと、そう考える。

「もしこの身まで、祖父の二の舞をしたら、もう終りだ。置文の書き継ぎなどは再び効かぬ。……そうだ、かかる物は、高氏が胸にたたんであればよいこと。益なき秘物……」
彼は、置文をつかんで、ぎりぎりと捻じまろめた。手燭を持つて、縁へ起つ。そして、燭の火に翳してしまつた。メラメラ……と一花のかくの紅蓮は、彼の手からボトンと地へ落ち、薄い一ひらの灰と化していた。

「……おや、高氏さま、何をなされたのでござります?」

思わぬ人が、思わぬ所から、声をかけた。

空は、チチチチとさえず、轟りに明けかけている。その澄みきつた浅黄いろの大気の下に、草心尼の姿が一茎の野の花みたいに弱々と見えた。

「おつ、尼御前か」

高氏は、ちよつと、びつくりしたが、すぐ、さり気なく。

「いやなに、無用な反古を、焼いていたまでのことです。何でもありませぬよ。はははは」
草心尼は、あらたまつて。

「……高氏さま、おめでとうございます。昨夜はこの尼までほつとして、よう眠りました。……今朝はそのことを御靈屋へ、御報告にでも」

「されば、蟄居の身も、ひとまず解かれましたゆえ」

「さだめし、御先祖のみたまも、これで御安堵なされたことでございましょう」

「いや、なかなかまだ、私たちも、安心はしておりますまいよ。はははは」

「私の住む草庵はすぐ彼方の木蔭、供御くごの茶もござりまする。お一碗如何でござりますか」「それは、願うてもない。……じつは先年帰国のさい、あんな不慮の事件がなければ、すぐにもおん許を訪うて、言伝てせねばならぬ用もあつたのです」

「もし覚一のことなれば、その後、都の便りにも見ておりまする。どうぞ、お忘れ下さいませ」

「いや、ほかに頼まれた一と品もあつて」

「あの子から」

「いかにも」

「ま。何でございましょうなあ」

「そうだ。いちどもどつて、すぐ御草庵へ伺い直す。……高氏、あとから参りまする」

彼は、御靈屋の内へかくれた。そして置文の空管を、元の御厨子ノ壇へ深く納め、大急ぎで屋形へもどった。

自室へ入つて、白い小袖や袴を解きすて、色の狩衣に着かえると、すぐにまた出て行つた。庵のある小柴垣は、屋形と饅阿寺との途中の森の小道だつた。

尼は、泥炉に、茶を煮て、待つていた。

庵はもちろん手狭てぜまだが、軒ばの木々の芽ざし、簾の子す（縁）に垂るる卯の花の朝露、清楚、眼を洗われるものがある。

この人は、母の義妹いもうと、すなわち、自分には義理の叔母だ。高氏は、身内の中に、かかる人もいたかと、いまさらの如く見直した。

「……余りに、時過ぎましたが、おうけ取りくださいまし」

彼はさつそく、小さい包みを、差し出した。

「ほ。これが覚一の」

「そうです。私が都から帰国の日に、母御へ手渡して給えと、覚一がよこした一と品です」

「ま。しおらしや……」

彼女はもう、頬ずりでもしたいように、すぐ手に取つて、開き始めた。

都ならではの香苞こうづとが、香の薰りと共に一つ出て來た。また、鞠まりが出来るほどたくさんな琵琶の切れ糸もその中につつまれていた。

「これは……？」

「覚一が申すには。……これ御覽あれば、このように覚一は、琵琶の習びまなに励んでいると
いうことが、文ふみで書くより、万言で申すより、母御によくお分り下さろうとのことでした」
「オオ。あの子が、そう言いましたか。……健氣けなげやの」

尼は、糸の屑を、胸に当て、頬に当てて、子の面影を瞼にしつつ、その親心を、もつれ糸のようにした。

ところへ、外から、屋形の家臣が、こう告げていた。

「若殿、若殿。——鎌倉へ御出府の用意も早やとのいました。北ノ方様にも、お門出の朝餉あさげを共にせんと、お待ちかねです。すぐお戻りあつて、お身支度を」

なべとかま

雨後、久しぶりな快晴だつた。海も山も、燦々さんさんとして眩まばゆい。

鎌倉の浜には、銀びかりの鰯が、今日はおびただしく水揚げされ、鶴ヶ岡から若宮大路の方を見ても、桜若葉のたなびきが、日ましに色濃くなつて来たことに気づかれる。

「ああ、夏も近づく」

上杉憲房は、つぶやいた。

彼の胸に、こんな季節感がふと映じたのも、何十日ぶりか。

無二の知己とたのむ赤橋殿の門を辞して、従者の曳く駒の背にうつり、大鳥居内の横大路を曲がるせつなに、しみじみ、振返られたことだつた。

「……思えば、この一と月、われながら、ようたたかつて來たものだわえ。花も見ず、現もなく」

しかし、その足利家受難の問題も、赤橋殿の力添えで、ほほ公辺の疑いも拭われていた。身は疲れていたが、眉は久しぶり明るいのだつた。

で、その尽力に、万々の礼をのべるため、あらためて今朝、赤橋殿へ伺つたところ、かえつて、饗応の微醉に眼もとを染められ、やつと今、辞去して出たところだつた。

「……ありがたい。これで甥の高氏どのの身も晴れ、足利家にも疵はつかぬ。すべて、あの御方のお力じやつた」

もいちど、彼はいま辞して來た大屋根を振向いた。——そこの門前近くには、八幡宮の放生池ほうじょういけから來る清流に架けられた朱の橋がある。で、それを姓のように、

赤橋殿

と、みな呼んでいる。が、正しくは、北条殿といわねばならぬ。執權北条氏の一族なのだ。

当主、赤橋守時あかはしもりときはまだ若い。

その父、前の六波羅の探題北条久時ほうじょうひさときは、もう世になかつた。——が守時は、父がの

こした多くの知友のうちでも、上杉憲房だけには、

「何かのとき何を打明けてもよい人物。たの恃めるお人」

として、いまだに、厚く交わっていたのであつた。

途々、それらを思い出して、

「わからぬものよ」と、憲房は痛感した。「……亡き久時殿から、遺した子らをたのむぞ

といわれた身が、逆に、お子の赤橋殿から、こんどのようなお助けに会うとは」

駒は、扇ヶ谷に近づいていた。

もう屋敷は遠くない。その門は、見えだしていた。

——すると、どこかで見たようなよその侍が、その門側にたたずんでいたが、憲房の姿を遠くに見ると、彼の方から、飛ぶように駆け出して來た。

そして、憲房の馬の前に、べたと、ひざまずき、

「おなつかしゆうござります」

と、両手をついた。

憲房は、駒のたてがみ越しに、しげしげと覗きおろして。

「や。たれぞと思えば」

「一色右馬介いつしきうまのすけにござりまする」

「こりや久しい。まことや、高氏どのの若党、右馬介よの」

「若殿御上洛のみぎり、六波羅のおやしきにて、お目にかかりまして以来なれば、足かけ三年に相なりまする」

「そちもたしか、主と共に罪を問われて、牢舎ろうしゃと聞いていたが。……ま、ここでは話も

ならぬ。わしについて、まずまいれ。憲房の屋敷のうちへ」

右馬介が、陽の目を見たのも、ごく近頃のことである。

かつて、高氏が幽閉の厄に会つた日、当然彼も、忍び上洛の供人というかどで、その場

から鎌倉表へ逆送され、以来、きびしい取調べをうけたのだつた。

が、彼の頑固な^{かんもく}黙には、白洲^{しらす}の奉行人も、もて余したことらしい。やがて、郷里の三河幡豆郡^{みかわはづぐん}へ送り返され、郷党たちによる共同の責任のもとに“牢舎預け”となつていた。

「そうか、そちの身は、いざこに牢舎されたかと案じていたが、郷党預けに付されておつたか」

上杉憲房は、彼を自邸に伴つて、委細を聞き終り、

「しかば、そちに対しても、赦免^{しゃめん}が達せられたので、さつそくこれへ見えたのじやな」

「御意の如くで」

と、右馬介は語りつづけた。

「何はおいても、若殿のご無事を見ねばと、三河を立つて、足利ノ庄へいそぐ途中、又太郎高氏様には、はや鎌倉の府においてあるやの噂も聞き、さてはと、この地へまいりましたなれど」

「いや、高氏どのは、召によつて、すでに国もとを出ておるが、まだ鎌倉表には着いておらぬ。……察するに、ここ幾日もの大雨に会い、旅路に手まどつているのであろうよ」

「では、ここ数日はまだ、鎌倉入りの旅の途中におわせられますか」

右馬介は、考えていたが、矢もたてもなく。

「先年、渡良瀬河原にて、主従、西と東に裂かれて以来、一片の音信だに交わせず、今日にいたり、今は、寸時も早くお目にかかりとう存じます。……それがし、途上までお迎えにまいるなどの儀は、公辺の憚り向き、如何なものでござりましょうか」

「なんの、いまは晴れて閉居を解かれた両名。いつこうその儀は、さしつかえはあるまい」「さらば、下野国からの鎌倉街道は、ほぼ一と筋、さつそくですが、これよりお迎えに行^いてまいります」

「まあ、さは急ぐな。——そちの見えたことこそ幸いじや。途上、高氏どのに出会うたら、鎌倉入りの前に、云々の儀だけは、心得おかれよと、そちの口から憲房の意のあるところも、よう伝えおいてもらいたい」

憲房は、そういうと、自室の周囲から召使をみな遠ざけた。そして、それから一刻余り、右馬介にむかって、諄々と、何事かを託していた。

やがて右馬介は、いとまを告げて扇ヶ谷を立つて行つた。そして翌日はもう、今宿から相模野の野路を、北の方へ急いでいた。

しかし、兩三日の大雨の後とて、帷子川も名もない野川も、縦横にあふれ走っている。

本街道とはいながら、ひと通りな難渢なんじゅうさではない。

「これでは、お旅路も遅れているはず」

高氏の道中も察しられた。身軽な彼すら、行き惱むこと再々だつた。——が、同日の夕方ちかい頃には、高氏の同勢らしい一行を彼方に見かけた。

武藏の府中から、多摩川をこえて来たかと思われる一群の人馬がある。主従四、五十騎みな蓑笠みのかさすがたで、馬の脛すねも、徒士徒士の小者も、泥なづんこだつた。

「やあ。それへおいであるお人々は、もしや」

右馬介は、駆け寄つて行つた。

そして、あぶなく。——高氏さまの御人数ではないか。と次の大声で、呼びかけてしまふところだつた。

「あつ、違つた?」

彼は急に足をすくめた。戸惑とまどつたのはいうまでもない。慌てて並木の木蔭へ身を交わした。

足利家の紋は、丸の中に二引びきりよう両。つまり丸に二本筋である。

ところが、眼の前へかかるて來た人馬の笠印かさじるしやら道具を見ると、俗に中黒なかぐろとい

う丸に太い一本筋の紋——。足利家のと、よく似てはいるが、違っていた。

「や。新田殿だ」

両家の紋は、世間でも往々によく間違えられやすい。で、要領のいい庶民たちは、こう
いつて見分けている。

新田殿の鍋のふた。

足利殿の釜のふた。

木蔭から右馬介は今、息をつめて、鍋のふたを見送った。

幸いに、怪しみもされず、泥まみれな馬群の列や蓑笠の郎従は、たちまち通りすぎると
と思われたが、とたんに、彼方で、

「待て待て」

という声と共に、列が止まつた。右馬介の姿を、列は一せいに振返つてゐる。

「はて。見たような?」

「一色らしいが」

「えつ、一色右馬介か」

そんな口騒くちざわめきの中で、ひとり黙然とこなたを見すます陣座羽織に腹巻すがたの派手

やかな人が、当の新田義貞らしかつた。なに思つたか、義貞はちよつと馬を返して來た。

「そこな男。そちは足利殿の内か」

「はつ。御用捨下されませい。ただ今は、つい粗相をば」

「そんなこと、咎めるのではない。高氏どのは、まだ彼方の川を越えておらぬぞ。……義貞は他に急ぎもあるゆえ、出水でみずの大河を、無理と知りつつ越えて來たが、人馬ともに、えらい難儀な目に會うた。くれぐれ、心して渡られよと、告げるがよい」

「ありがとうございます」

「先頃の大雨は、鎌倉表も変りないはず。万一、召の御期日に遅るるとも、義貞が先に着いて、公儀向きへは、よしなに旅途の困難を披露しあけば、お気づかいあるなども申せ……」

⋮

「は。御好意のほど、よくおつたえ申しあげます」

「むむ。いずれ鎌倉の府にて、お目にはかかるが」

「……」
言いすてて、義貞は列に回り、まつ黒な一陣影を、南の方へ、見るまに小さくして行つた。

別れて小一里、右馬介が、やがて多摩川の大丸河原へ出たときは、はや宵月が冴えていた。

た。

「なるほど」

夜目にすら濁流の色がわかる。日ごろの鎌倉街道も人影一つなく、ただ、大丸渡しの渡し小屋には、にぶい灯の色が一つあつた。

小屋を覗いて。

「足利殿の御人数は渡つたか」

すると、小屋の男がいう。

——新田殿は、今日の午下がり頃大がかりな 箍組いかだぐみを作らせ、両岸へ綱を張つて、無二無三渡られたが、足利殿は、まだ川止め状態のまま、府中にお泊りらしい御様子、と。
「どうか。向う岸まで手繩り綱があるとは偉せ。ひとつ渡舟わたりしを出してくれい。駄賀はいくらでもやるぞ。望み次第与えるほどに」

高氏は、武藏府中の駅路うまやじで川止めにあつていた。

六所明神ろくしょみょうじんに近い一旅亭の門に、ひと目で“釜のふた”と市人いちびとにもわかる足利家の紋幕がそれである。主従二十余騎、今日で二日三晩の足ぶみだつた。
街の灯はごつた返している。

街道の要衝だし、また家々は、大昔の武藏の國^{こく} 庁^{ちよう} 時代からの櫛比^{しつび}である。それとの川止め客の混雜とで、酒は売れ、辻喧嘩は宵を戦^{そよ}がせ、旅籠旅籠の駒^{こく}の柵^{さく}まで、夜をいななき騒いでいた。

「おや、釜のふたの方は、今夜もまだ、でんと^どこ逗留らしいぜ」

「ほんに、鍋のふたは、あれしきの水嵩^{みずかさ}を、渡れぬことがあろうやと、午すぎ、広言を払つて宿を立つたのに」

「はははは。宇治川の先陣というわけか」

「所は東^{あずま}の多摩川だが、これや見ン事、釜のふたの大負けだつたな」

旅舎の前を通る雜人輩のたわ言だつた。

往来を行く彼らにすれば、聞えぬつもりの放言だろうが、つい足利党の耳にもはいる。でなくとも、二日の川止めに、いら立つていた供人たちなので、皆、外をにらんで、いまいましがつた。

「……ちいツ。あんなことを言つて通りやがる」

そのままが、高氏の耳にもとどいた。——夜食の酒の座で、供頭の佐野十郎やその他の近習が口々に告げたのである。

すると高氏は、不快がるどころか、唇にしかけた杯の酒を吹きこぼして笑つた。

「うまいことを申すものじやな。鍋のふたと、釜のふたとは」

庶民の機智に、すっかり感心したていで。

「おもしろい。まさしゆう、ここでは釜は鍋に先を越されたわ。だが、凡下ぼんげどもの戯れ言ざわご」

は、吉兆だぞ。高氏にはありがたい声だ。天が人を以ていわしめるものか」

「はて。ありがたいとは、いかなる御意で」

「わからぬか」

「解わけしかねまする」

「なんでもない。今のところはまあ世は泰平だ。鍋も釜も、申さば空つぽではないか。火にかけられた鍋釜ではない」

「なるほど」

「が。かりに、その尻を火にあぶられた場合は、鍋と釜と、いずれが重いか。もし一朝の事あらば、わが足利党は天下の飯を炊くであろうよ。そして新田党には、菜でも煮させておけばよい。……あはははは。どうだな、街の俚謡りようがそう謡ううていると聞けば、めでたい辻占であるまいか」

「いや、さる御比喩とは、思いも及びませんでした。なにさま、鍋と釜では、生れながら位がちがう」

「これ、釜のふたども、分つたなら、そこで、もう一献酌いでおくりやれ」
氣のおけぬ若い主あるじというものは、家来にとつて、よいものらしい。特に高氏には、弟の直義にもない雑ざツかけなさと、大容な風がある。

が、ここは旅舎、そろそろ枕につこうかと言い出していた時である。しもや下屋の郎党から、一色右馬介が訪ねて來たと、高氏に告げてきた。すでに彼は別間へ入りかけていたが、「なに。すけ介が訪うて來たと」

と、わかれら坪（中庭）の渡りの辺まで弾むように出て行つた。

「やあ。無事でおつたか、右馬介」

「おつ、これは若殿」

彼は、高氏を見るや、二年余の感慨に、どつと胸を占められた。不覚と思いながらも、ただ、涙のみ先立つて、廊の下段に、へたつと両手をついてしまつた。

高氏は、その手を拯すくい取つて、

「さあ、入れ。そんな所で辞儀はいらぬ」

引きずり込むような、なつかしみだつた。そしてふと、彼の濡れ鼠な姿に気づいて。

「や。いかがいたしたのだ、この身なりは」

「何、さしたる程ではございませぬ。わたし渡舟の上で、ちとばかりしぶきを浴びたとみえまする」

「では、多摩の濁流を渡つて來たな。やれ、それでは腹も減つていよう。まず湯殿で衣服を着がえ、腹拘えもしたがよい。その上にて奥へまいれ」

左右の者もいうので、彼はすすめに従つた。そして、あらためた人心地で奥へ伺い直した。すでに高氏は、近習を遠ざけ、独りで待ちかね顔だつた。

「……さて。何から申しあげましようやら」

まことに、一別以来の主従であつた。しかも、単なる一別ではない。高氏もさすが瞼を常ならぬものにした。

やや半刻はんときほどは、灯も白々と、以後の物語りで二人とも持ちきつた。そして、上杉憲房の蔭での大きな働きに話はやがて移つていた。

「おお、じつは。……ただ今も申し上げたような次第で、その上杉殿から、若殿のお耳へという御伝言なども、この右馬介へ、お託しでござりました」

「そうか。伯父上からいかなる御注意をば」

「このたび、鎌倉へお入りあらば、従前とは事ちがい、ただちに問注所の控え屋敷に入つて、一時、そこにて御起居あるものとか伺いまする」

「む。もとより大蔵の父上や、伯父上にも、すぐお会いできようと、虫のよいことは思うておらぬが」

「なお、仰せには、赤橋守時さまのお骨折りにて、執事、よりゆうど寄人よりゆうど、ほか歴々の間で、すでに内評定は相すみおれど、一応の吟味、或いは、対決などが行われるやも計りがたい。

……されば、その辺のお覚悟もと

「案じるな。腹はきめておる。が、対決とは、誰を相手に？」

「さ。まずは新田殿」

「新田とか」

「さらには」

「ほかにも、まだ、おるのか」

「その辺、確とは、仰せ聞かされませぬが、過ぐる年の若殿忍び上洛中の逐一を、幕府のうちへ、つぶさに密告した者があるやにござりまする」

「ふウむ、それは初耳だ。奇特なやつもおるものだのう。伯父上にも見当はついていないのか」

「おくちうらでは、どうやら、近江の佐々木道誉どうよこそは、油断がならぬ者よと、ひと言、おもらしなされましたが」

「あの婆娑羅ばさら大名がの。ムム、なるほど」

「とは申せ、佐々木道誉といえ巴、執権どののお覚えめでたきしゅつとう出頭人にん。營中の羽振りも思いやられます。されば、彼との対決には、ご短気をつつしまれ、堪忍第一にお臨みあるようとの、上杉殿が老婆心かと拝察されたことでござりました」

「わかつた」

本質の彼は元來強情なたちだが、人の善言には素直に耳を傾ける風もあつて、
「右馬介。心配すな」

と高氏は、いたわる。と、右馬介も、

「は。ご幼少からお側に仕え、若殿のご氣質はよく存じ上げておりますゆえ、上杉殿ほどには」

「伯父上の老婆心はかたじけないが、問注所に坐つた上は、出たとこ勝負と観念のほかあ

るまい。対決の相手が、道誉であれ、新田であれ」

「ところで今夕、その新田殿に、はからずも行き会いました。相模野を駈けて、鎌倉入りを急ぐ途中で」

「お、出会うたか」

「事面倒と、身を避けましたが、先は目ざとく見つけて、高氏殿へ告げよと、新田殿御自身、駒を返して、私へ申されました」

「新田が、なんと？」

「旅途の困難さは、我より公儀へ報じおくゆえ、高氏どのは、多摩の減水を見た上にて、ゆるりと、お渡りあるがよろしからん、と」

「はははは。それが新田の親切気か。高氏が遊女でもあることなら、これや、うれしがる
くぜつ
口説かもしけん」

「察するところ、新田殿には、ひと足先に鎌倉へ入つて、何ぞ、事前の策でもめぐらす下心ではありますまいか」

「……かも知れぬなあ」

「それを、何で若殿にはご悠長に」

「む。かく川止めの泊りをかさね、彼を見過ごすかと、いうのだろう。——今日の午^{ひる}、新田が川を渡つたと聞くや、家来ども躍起^{やつき}となつてみな言いおつたが」

「何か、ほかにご思案でも?」

「さればさ、まだ多摩の水かさは退かず、そちも難儀して來たとおりな濁流であろうがの。そんな危ない川は、この大勢で渡るのには難しい」

「でも、新田殿の列は」

「新田は勇ましい男だ。よくぞ、今日の多摩川を越えたものと、感心する。高氏には、とてもそんな勇気は出ぬわ。わしには、川が恐くて渡れぬのじや」

「ははあ?」

右馬介は、黙つた。

たつたいま、自分のいつた言に、彼はひとりで低徊する。

——ご幼少からお側に仕えて來た身なので、若殿のご氣性は万々存じ上げているつもりで——と、先にはいつたが、だが、ちょっと高氏が分らなくなつて來た。

こんな高氏をこれまでには彼も知らない。かつて、都の小酒屋で、足くびに噛みつこうとした献上犬の口へ、逆に、その足を猛犬の喉元まで突ッ込むような不敵さを備えたお人

が、すなわち、わが高氏ぎみなり、とばかり思つていたのである。

「……いつから、こんな」

彼は、主人の変化に、小首をかしげずにいられなかつた。——しかし、もしこの晩、高氏の口から、彼が祖父家時の置文を見てからの心情を打明けられたら、或いは、覚るところがあつたかもわからない。

が、高氏はこの右馬介にさえ、その内容はおろか、置文を見たことすらも、告げなかつた。

——かくて、翌日は、多摩の水かさも減つて、所々の洲や河原の肌も、見えだしていた。高氏以下が、やがて同日、多摩を南へ越え渡つたのもいうまではない。

裁許橋
さいきょばし

さきに鎌倉へついた新田義貞は、かたのごとく侍さむらい 所どころノ別べつ当とうへ着到せきとうを告げ、同日問注所のある裁許橋の内へ入つた。

裁許橋とは、市人いちびとたちの俗称である。

無数の谷や低い山群にかかるまれてゐる鎌倉の府は、自然、渓水のせせらぎや、静かな川音が、街中のどこにもしてゐた。琵琶小路から西の山寄りに見えるそれも、鎌倉十橋の一つで、そこを渡つた所が、すなわち問注所の一郭だつた。

問注所は、幕政下の“政所”とならんでの鎌倉三大官衙の一庁である。——原告と被告との双方へ物問い合わせしてそれを注記する——というのが「問注」の名のおこりらしい。

幕府の初期には、これも柳営内にあつたのである。ところが、建久の年、熊谷直実と久下直光とが、領地ざかいの争いで、対決したさい、裁判の不當に怒つた直実が吠え猛つて、吟味の東ノ廊を震駭させた。

後々の語り草にもなつたように、熊谷はその場でもどどりを切つて逐電し、法然上人の許で、名も蓮生坊とかえ、生涯、弓矢を捨ててしまつたのだ。——これは当時、平家に代つて誇つていた勝者の府に、皮肉な衝動を与え、武士たちにも、武門の何かを考えさせた事件だつた。

「こんな例があつては物騒千万。御座所ちかくに、白洲をおくのはよろしくない」

要路の声から、問注所を柳営外へ移したのは、それからだといわれている。——で、い

まの所在地は、執権の亭館よりずっと遠く、北は源氏山から西は大町小路をへだて、橋ノ内には、万一、熊谷蓮生坊の「ごとき」者が暴れ出しても慌てぬように、常備の詰武者もあるほどな広い一地域を劃されていた。

そして、どんな大身たいしんも、ここでは一被告か一原告である。三名以上の供は連れて入れない。もちろん義貞も、部下を大町小路にとどめ、規定の従者だけを伴つて、所内の装束屋敷に入つた。

もとより罪人つみびとではないので、客の来訪や出入りは自由だつた。これが囚人めしゆうどならこそへは来ない。直接、侍所ノ別当へ廻され、断獄されるまでである。義貞の宿所には、その夜、客と彼の笑い声がさかんにしていた。義貞の如才のなさは、鎌倉にも多くの知己をえているらしい。

やがて、翌日。

高氏は、義貞よりも、まる一日遅れて、ここへ着いた。

おなじ控えの装束屋敷へ入つたのだが、しかし義貞とは顔も合せなかつた。建物そのものの棟が、顔を合せぬような布置にもなつていた。

「若殿。いよいよお執事（長官）の問注は、明日でござりますな」

介添えの中に、右馬介もわれから望んで、来ていた。

「どうだ、あぶない川を越えなくて、召の御期日には、充分、まにあつたであろうが」「が、明日ノ刻（午前十時）の御出頭では、お休みのまも、お心がまえの暇もいかがかと」高氏は、顔の薄らあばたを、みな笑クボにしてみせた。

「眠るだけでたくさんだ。わしを訪ねてくる客もあるまい。久しぶり海の香にひたつて、まずは深々と眠るまでよ」

問注所の朝は、森閑として、小鳥のさえずりの中だつた。—— 庁内の法廷ともいえる拭き磨いたような板じきの広間にも、まだ何人なにびとも見えていない。“審問ノ間” “対決ノ廊”などとここをいつている。

床には、召の者の円座だけがおいてあつた。西の側に一つ、東側に二つ。そして一だん高い正面に、問注所衆の座席やら書記机などが見える。

また、その横に“御簾みすノ廊”とよぶ小部屋があつた。時により重大な裁判には、執權しつけん代だいとか、將軍の連署などが、陪審に臨むことがある。簾の内でこの場のもようを詳細に見聞きし、立帰つて後、上間に達するのである。

——ひらつと、床に鳥影がひらめいた。

中庭の白砂に遊んでいた鶴^{せきれい}鴿^{くわ}がそこを覗きかけて廊の外へそれたのだつた。鶴鴿を驚かしたのは、彼方の廊を渡つて来た人々の音もない跫音だつたのだろう。——打ち見やれば、問注所執事以下の奉行人七、八名の姿が、しずしず来る。そして、ただちに着席していた。

中央の座に、金沢貞^{さだあき}顕^顕。

その左右、寄^{よりゆう}人の座には、名越時元、江馬越前守、北条茂時、二階堂ノ入道出羽守、高崎悪四郎左衛門高直など……。

またまもなく、横の“御簾ノ廂”にも誰か着座したようであつた。簾の内だが、

赤橋守時

その人の影によく似ていた。

すぐ、高氏が呼び出された。

彼は西の円座に坐る。

つづいて、新田義貞の名が、外の廊で呼ばれた。

義貞は、反対側の杉戸から大床へはいつて来て、問注所衆と“御簾ノ廂”的方へ、礼を

したのち、ぴたと座にかまえた。

「…………」

高氏と相見て、こころもち黙礼する。高氏も礼を返す。——書記机で墨を磨すらしい冷ややかな香があたりにただよつた。

執事の金沢貞顕が、まず。

「申すまでもないが、問注の床は、上意の台下も同じとお心得あれよ」

「はつ」

義貞が指を床につかえ、頭を下げた態なので、高氏もまたそれに倣つた。

「そこで双方に訊ねるが、足利新田両家の確執とは、そもそも何に因づくもつれなるか」「あいや、お訊ねなれど……」

義貞は、胸を起して。

「ひとの沙汰は知らず、義貞が身にとつては、足利家に宿意をいだくなどのことは、從来、全く覚えもおざらぬ」

「ないとか。ならば、足利は」

高氏もまた。

「新田にないもの、足利にあるべき由謂はございませぬ」

と答えた。が、貞顕はたたみかけて。

「いや、由謂なくはあるまい。——先ごろ、新田方より政所への早馬によれば、高氏の弟直義を先立て、足利の武士ども大勢、兄の幽所を破らんと押し襲せ、新田の警固番十数名を殺傷したことではないか」

「…………」

高氏は答えなかつた。おもしろくなさそうである。そろそろ持ち前の不逞が頭を擡げたものか。

「足利。返答は」

高氏が、むッそりと黙つてゐるので、寄人の座の一名から、注意するような叱咤しつたが出た。
執事金沢貞顕も、ここでは、やや声をはげまして。

「右の一条、申し開きが相立たねば、弟直義の罪科は恐らくまぬがれまいぞ。また新田方の、公命の警固にたいし、わたくし私の宿意を構えたものとも断じられるが、どうじや」

「おそれながら」

と、やつと高氏は口をひらいた。声にはなんの感情のひびきもない。

「おただしの義、高氏の知るところとは、はなはだ違つておりまする」

「どう違う。そこを仔細に述べられい」

「身の受けた蟄居二年の門には、ばくぶう幕封をかしこみ、わが母すら近づいた例はありません。

たまたま、弟直義が、警固番の怪しみをうけたとは申せ、それも決して、垣を越えたわけではなく、ただ、近くの河原へ来て、兄の幽所の灯を見ていたまでと、聞きました」

「そりや、新田の上訴の状とは、大いに相違するが」

と、貞顕は、義貞の方へ、視線を転じて。

「——御辺としては、早馬にて上訴の箇条を、あくまで動かぬ事実と、固執あるにや」「いや、義貞としては、先の具申の内容を、いささか改め申したく、お召なくとも、出府の心でおりました」

「では、先のは誤報か」

「なにぶん騒動直後の早馬、弟義助も、激昂のなかにて、上訴をしたためたものと思われます。が、事しづまつてみれば、郎党どもの報も、すべてが眞まこととも聞かれず、また蟄居中、高氏の慎みは、神妙でもござりましたゆえ、なにとぞ、訴状は一応、お取下げ願わしゆう存じまする」

「しからば、両家の間にて、和談のお腹よの」

「わが方にも、死者傷者十数名はあれど、足利方でも、同様、犠牲のあるものと思われる。かたがた、新田足利の間に、根ぶかい確執もあるように沙汰されでは、まことに迷惑、その上にも、公儀におわざらいをかくるなどは、御家人の道でない。わけて世事多端の時でもおざれば」

「むむ、げにも」

義貞の態度を、みな、好感して見たような風であつた。事実、高氏と彼とをこう並べてみれば、容姿といい、弁舌といい、高氏のどこか横着げな田舎者臭さとは、比較にならぬほど、義貞の方は、水際立つて見えた。

「新田はああ申す。足利にも、和談、異存はあるまいな」

「何なんじょう条、異存など。——弟直義への、お咎めだに晴るるならば」

高氏は、ぼそつと言つて、頭をさげた。——と貞顕は、その機をすかさず、宣告をくだした。

「新田はお退がりなさい。……が、足利又太郎高氏には、なお、ゆゆしき訴えが、余人より政所へさし出されておる。足利はそのままに」

義貞が起つて去ると、ほどなく、召口めしぎちの杉戸から、べつの一人にんがまた呼び出されて入つて来た。さすが高氏も、それには、色なきをえなかつた。まさかと半信半疑でいたが、やはり佐々木道誉であつたのだ。

道誉は坐つた。装束の両袖を大きく開いて、問注所衆の列座へ、まづうやうやしく一礼する。

「……？」

高氏は喉の辺で、おおと、つい言いそうちだつた。が、道誉は對い合つた高氏へ、ちよつと一瞬べんをくれたものの、にんまりともする風ではない。

かつて、近江伊吹ノ館たちでは、いやらしいほど愛想よく見えた彼の頬の黒子ほくろも、今日は何か、敵意をふくんで挑む物にしか見えないのだ。冷淡さ、まるで別人の気がされる。

だが、烏帽子えぼしこそ乗せていても、その青々とした若入道の頭に変りはない。たとえ一夜でも、歓宴わいえんを共にした人間に、よくもこんな面構えができるものだと怪しまれるほど、恬然んぜんと、嘯き澄ました行儀であつた。

しかも、法廷はその道誉の扱い方にも、高氏への審問にも、よほど今度は慎重らしい。

執事の座では、貞顕を中心に、寄人よりゆうどたちの間で、書類笞を廻したり、何やら、ひそ

ひそ声をかわしたりしていたが、やがてのこと、

「足利にただ糺すが」

おごそかに、金沢貞顕が、審問の口をきり、

「——条々の御不審、一々即答せられよ。ただし、こは訴訟に非ず、上意同様のお訊ねならば、つつしんで答えませい」

と、言い渡した。

高氏は両手をつく。が、道誉にとつては、ひと事のようである。冷然と、ただ横耳に聞いていた。

尋問は、箇条わけに、次々、問いただされてゆき、

第一に。……忍び上洛の目的は何なりしか。

第二。……献上犬への無礼。

第三。……前ノ大内記日野俊基朝臣と洛中にて密会をとげたるは、そも、いかなる存意もとの下にや。

と、たたみかけられた。

その間、高氏は、目をとじていたがとじている眼にも、道誉の顔がちらつき、努める理

性も邪さまたげられた。

「お答え申す。まず、忍び上洛との、お極めつけには、高氏、不服にござりまする
「なに、不服とな」

「されば、去ぬる元亨げんこうの年、それがし、都へ出でたるには、相違こざりませねど、そは、
前年の十一月、歳々としどしの恒例にて、領下の御厨みくりやの貢物みつぎ、伊勢神宮に運上したてまつるお
使いにてまいつた帰りを、都廻りして、立帰つたまでのこと。……何で、無断上洛にござ
いましようや」

「それや言い抜けぞ。伊勢より都へ廻るは、わざとにひとしい」

「いや、足利には、天皇領もおざる、その御報ごほうじも兼ねおかねば、二度の旅費たびついえをせ
ねばなりませぬ」

「では次の条。——京の小酒屋において、あろうことか、御献上の紀州犬に、土足を食ら
わせしという一事は」

「食いつく犬には、足を引くのが人情なれど、執権の君に奉る献上のおん犬と知つたれば、
引くは畏れあり、足くびぐらいは、惜しからじと、おん犬の口中へ、われから、餌に奉つ
たまででおざる」

高氏はけろとして言つた。この返答は、人を食つたものだが、またいかにも、当意即妙に聞えたらしい。道誉もニガ笑いし、問注所衆の面々から“御簾ノ廂”の人まで、クツと笑いを懐えたようだつた。

厳肅なるべき法廷に滑稽感は禁物である。高氏の言で、今、問注所のそうした空氣も、ふと妙に、迷ぐらかされたのを見ると、主席の執事貞顕は、すぐその弛緩しがんをひき緊めるべき職責に駆られていた。

「よろしいつ」

と、叱咤に似た頷きの下に。

「——やよ足利。二箇条の返答は、それと聞き措く。が、第三の御不審は、何ソと？」
高氏もまた、きびしく、あらためて。

「それこそは、まつたく、身の濡れ衣ぬぎぬと申すもの」

「覚えなし、とか」

「かつての旅中、俊基朝臣にぜひ会い給えと、人の誘惑はうけたが、会うてはいない」

「誰よりさような手引きを」

「そこに、そら嘯いておる男より……」と、道誉の座を、顎あごでさして、

「察するに、事を逆しまにして、政所へ密訴せしは、そこな若入道でおざつたな」
 「はははは」

道誉は正面を切つて笑つた。

「聞けよ、足利。——近江佐々木ノ庄の守護道誉は、執權の君より内々のおむねを受けて、京鎌倉の往来を、不斷に目付しておる者ぞ。密訴とは、ばかなうろたえ言を」

「では、あの折の密語は」

「いまは告げてもよからう。御辺の怪しき遍歴と、その本心を洗わんため、土岐左近を用いて詮議せんぎさせた手段にすぎぬ」

「ならばなおさら、この高氏に、なんら御不審を蒙るいわれなきは、明白であろうが」

「いや、道誉はそう合点しても、土岐は御辺に多くの疑いを抱き、放免ども（目明し）を用いて、なお詮議をつづけていたのじや。つい過日までも」

「しからば、この高氏が滞京中の行為に、何か他にも不審とみゆる証拠でもつかみえたか」「ありがたく思われるがよい」

道誉は、相手の語氣をスラと交わして、

「——幸いに、土岐の詮索せんさくも無駄だつたゆえ、足利領も無事を得、また御辺の身も、今

日の召に晴れて罷り出されたのでおぞろうが。……いや何、列座のお役方」

とさらに、貞顕以下寄人たちの方へ向つて言つた。

「あいにく、土岐左近事は、国元にて病中のため、ここには立会えねど、あらましは、以上、御聴取の通りに相違ありませぬ。またもとより、この道誉とて、足利にたいし、日ごろ氣の毒とこそ存ずれ、何ら意趣あるものではなし、かく一応の御審議も相すみたる上は、政所へも、疑惑一掃の由、御披露ありたく存じまする」

列座の顔は、みなうなずいた。簾の内の人影にも、ほつとした気配が見える。

依然、不服顔なのは高氏だつた。やがて役方は、閑廷を宣して、一せいに起ち、道誉も起つたが、彼のみは、あらぬ方を見て、坐りこんでいた。

「さ。参ろうか」

道誉は彼に、退出を誘つた。

そして、かつての伊吹の居城では、たしかに、こうだつた人柄に返つて、道誉は頬の黒子もニコやかに、

「——祝着祝着。新田の件といい、忍び上洛のことといい、これでまずお上の御不審

も解け、幕府御家人の醜しうをも世間へ見せすにすんだ。高氏どの、何を腐つておられるか。

もはや晴れてどこでも歩かれい、大手を振つて」

と言いながら、その場を一と足先に、出て行つた。

裁許橋の内の、時ノ太鼓が、正午を告げていた。

気を揉み揉み、控え屋敷で待つていた右馬介は、やつと退がつて来た高氏をそこに迎えたが、彼の冴えない顔を見て、はつと胸を暗くした。

「如何でござりましたな。……若殿。対決のおもようは」

「いや、思いのほかだつた」

と、高氏は口も重げに。

「問注衆の列座を前に、新田は良い子になりおつた。また、道誉と来ては、箸にも棒にもかからぬ曲者しれもの。なるほど当世の婆娑羅者とはああしたものか。開いた口もふさがらんだ」

「では事ごと、御不利な結果にでも」

「何、そうでもない」

「凶でなくば、吉でござりましたのか」

「ともいえようか。……赤橋殿や伯父上杉殿の、蔭にあつてのお骨折りに相違あるまいが、

とにかく、高氏が身には、御不審なしと申し渡された

「えつ。晴れて、お咎めなしと」

「むむ、まずはな」

「すれや御祝着。……若殿おめでとうござりました」

「よせつ。道誉の口真似などは」

高氏は突如、不きげんな色をなして、右馬介を怪しませた、というよりもびっくりさせた。

彼にすれば、高氏のそんな激語の逆りなど、理解できるわけがない。問注の場のいきさつは見ていず、また、高氏の胸奥にある、もひとつつの秘を、打明けられてもいなかつた。

いや高氏自身にすら、複雑な今の胸を、どう支えるべきか、持つて行くべきか、冷静な処理もついてはいない。

では一体、何をそんな重荷に感じているのかといえば、いうまでもなく、かの“祖父家時の置文”にほかならなかつた。

その置文は、あの朝、密かに焼きすぎて、内容だけを、自分一人の胸に秘封してしまつ

たのだ。その日から、高氏という人間はどこか違つて来ている。又太郎高氏の再生が始まつていたといつても過言でない。——許した母の清子が、「もいちど、男おの子を生むにひとしい陣痛」といった意味も、今にして、よくわかる。

だから、もし、置文を見ぬ前の高氏であつたら、多摩川の場合にせよ、新田を先に渡してただ見てはいまい。——臆病な彼がよけい臆病に見えたのは、置文を焼きすぎて朝から、彼の内容において、生命の比重がちがつて来たのである。何かにつけ、「……生命なくば」と大切に思い、そのいのちも「……長からねば」と、心がけるようになつてきたのは争えない。

また、今日の佐々木道誉との対決にしても、である。

ひとたび、彼が堪忍を破つて、事実をたてに、言いたいことをいわんとしたら、どうなつたことだろうか。

——それを、じつとこらえて、ただ被疑者の弁解ですまして來たのは、伯父憲房の忠言にもよるが、高氏の胸に、かの啾しゅうしゅう々たる置文の声があつたからである。「……小事。かかることは一切小さい。大事は前途にある。良い子になりたい新田なら良い子にさせ。婆娑羅の道譽には、存分、婆娑羅の欲望でも誇りでも振舞わせておけ。大丈夫の大

事をなす道。それはすべて遠いものだ」と、胸をなでていたのだろう。いや、置文の声が彼に命じていたといつてもよい。

なぜなのか。——右馬介は、叱られたという氣もしない。それだけに、高氏の不機嫌になお、氣をつかつた。

「さぞ、お疲れにございましょう。ひとまず、上杉殿の内へ、おひきあげなされましては」「お。そうするか」

じつは高氏も、不用意に見せた眉色の捨て場に困つていた機である。すぐ面をやわらげて、

「長居は無用。さつそく退出したくはあるが」

「何かまだ？」

「大蔵のお父上にも、さだめし高氏をお待ちかねかと思われる。……だが右馬介、高氏はそんなに疲れ果てて見ゆるか」

「なにせい、過日来のご心労も積りおりましたこと。ごむりではございませぬ」

「いけないなあ……」と、高氏は自分の頬を両の手で撫でまわしながら。「久しく御病中にある父上へ、そんな顔は見せとうないので。ムム、こうせい右馬介」

「は」

「やはりわしは両三日、伯父上の屋敷にとどまる。が、そちは早速、大蔵へ伺つて、今までのことを、父の貞氏殿へ、ともあれ逐一、おはなし申しあげておけい」

「かしこまりました」

「でないと、この高氏、久々に父上の御病態を見ては、ものも得いわず、ただみだれてしまうかも知れぬからな。ところで、父上もお案じなのは、今日の問注の次第だろうが」と、新田、佐々木との対決の模様を、ざつと語つた。

その間にも、高氏はふと“置文”的まぼろしを胸のうちに持ち悩んだ。——自分の本心というものを、右馬介へ完全にわからせるには、どうしても、ついその秘をこの者だけには洩らしたくなるからだつた。

が、高氏はなお。

「……打明けるべきではない」と、きめていた。「自然、秋^{とき}は来るかもしれないが、それまでは」と、深い井戸の側に立寄る者を戒めるように、自分の弱い心を独り警戒していた。

「では、退がろうか」

ほどなく、主従はそこを出た。

裁許橋を渡ると、あらためて、眼に、世間が映る。

右馬介は、高氏を、扇ヶ谷の門へ送った上で、すぐ大蔵へ向つた。国元から来た供人らも、当然、足利屋敷の内に落着く。

一方の高氏は、扇ヶ谷で、

「伯父上は」

と、上杉家の臣に、たずねていた。

「は。殿には今朝から、侍所へ御出仕でござりまする」

「何か、申しおかれたことはないか」

「されば、あらかじめ、奥の御一室を昨日から清めおかれ、若殿のためにと、お待ちうけらしゆうございましたが」

「そうか。ではそこで」

高氏は、奥へ通つた。そして初めて、鎌倉山のしたたりや、閑かな林泉に耳を洗われた。

すると夕刻頃、また、べつな老臣が、顔を見せ、

「ただ今、主人よりお使いがあつて、はからざる大事のため、夜半までは、營中から御退

出は難しいかもしぬとのことにござりまする」

と、いう。

——すると、夜に入つてまた、再度、同じような使いがあつた。何が起つたのだろう。氣のせいか、夜半の鎌倉中に、駒音が忙しげだつた。そして憲房は、ついに明け方まで、歸邸しなかつた。

うつつなき人

昨夜のただならぬ駒音が何であつたかは、小町大路ノ辻を劃す柳營の長い長い 大築土おおついじ の外からでは、もとよりその片へんぱう貌うかがすらも窺うかがい得ない。

が、一般の雜人たちも、昼間、腰越口から極楽寺坂を経て、町中を駆飛ばして行つた早馬が、柳營の一門へ入つたことは眼に見ており、はやくもそれには、

「おや。なんだろう?」

と、怪しみを起し、その上、またも晩には、二度にわたる早馬が、同じ亭館の内へ消えこんだことを知つている。

「いやだなあ。昼のも夜のも、三度とも六波羅飛脚だつたが」

「そうよ、六波羅飛脚が、こうぶツづけに入るなんてときは、ろくなことがあつた例はない」

——知ラシメズ、唯、拠ラシメヨ。という政治の制度下におかれていた庶民には、従つてまた、そんな些事さじにもすぐ“異”を感じる動物的な勘がするどかつた。果たせるかな、それから一刻余ときよの後、さらに夜半にかけてまで、鎌倉中の大地が馬蹄や人蹕じんきょうに鳴つた。おそらくは、あれから須臾しゆゆの間に、政所の召ぶれが、幕府重臣の家々へ達せられたのであるまいか。

小町、若宮などの大路附近の邸はもちろん、遠くは七切通ななきりどおし、谷々やつやつの屋敷からも、やがて不時の召にこたえて出た大身たいしんたちが、ぞくぞく、柳營内の駒ツナギに下馬しては、「そもそも何事の?」

と、わき眼もふらぬ顔を硬かためて、次々、奥へかくれ去つた。

かかる晩にはまた、きまつて、鎌倉じゅうの犬が、いやにいんいんと啼き吠えた。

例の、執權高時のお犬好きから、武家やしきでは軒なみ闘犬を養つていたし、わけて八幡宮の東の鳥合とりあいヶ原は、その上覽桟敷さじきやら御愛育のたくさんな御犬寮もある所なので、一犬の吠えが万犬の吠えをよび、その諸声もうごえは、鎌倉の海のとどろも打消して、陰々いんい滅めいい

んめつめつ々、なんともいえぬ夜空のこだま斜こだまをなすのであつた。

時により、そんな世音せおんも、心ある者には、北条治下の世の将来に、安からぬ予感をいだかせていたには違いない。龜ヶ谷寿福寺の一禪僧が、画贊の詩に、

肥狗ヒクハ天ニ傲オゴツテ吼ホ工
瘦人ソウジンハ地ニ黙モクシテ哭コクス

と書いたことが、高時の側近に知れ、重い罪に問われたなどという取沙汰も、つい先頃のことだつた。

それはともかく。——今日の六波羅飛脚は何をこのさいの幕序へ報じて來たのか。

高時の執權御所にも、当夜ばかりは田楽ばやしの振り鼓つづみも聞えず、深夜から暁かけての灯も森閑とひそまつていた。

その座に、高時はみえないが、すでに政所には、評定所衆とよばれる枢機すうきの重臣たちがそろつっていた。

内管領の長崎高資たかすけをはじめ、多くは北条家の親族といつてよい。北条仲時、茂時、名越、安達、金沢父子、普恩寺入道、または赤橋守時といつた風に。

なお、佐々木道誉だの上杉憲房などの姿も、ずっと席次の下の方には見えた。がしかし、

憲房などはおそらく「長く六波羅にいて、朝廷や都の情勢に明るい者」として加えられていたに過ぎないものかもしだれぬ。

——ところで。その夜の評定所会議だが、どうも、事は容易でなさそうだつた。
舌の痺れたような小声ながら、評議中には、しばしば、

「——天皇御謀反」

などという言葉すらも洩れている。

現在、都の探題職には、北ノ六波羅に北条範貞のりさだ、南ノ府には北条維貞これさだがつめていた。
飛札ひさつは、その南北探題の連名である。

それによると。

すぐる四月初旬頃より、またまた、宮廷では、昼夜のわからなく、中宮(みきさき)御ご
懷妊かいにん祈祷きとうの大修法を行つてゐる——とのこと。

が、これだけなら、皇室の一私事だ、何でもない。

問題は、またまた、というところにあるらしい。中宮懷妊おん祈りの大修法は、すでに、
おととし元亨げんこう二年の春にも聞えたことで、鎌倉が知つただけでも、これで数回なのである。

しかも、いつこうに、

中宮御産氣

とは聞えて来ない。

いや御妊娠のもよだに窺われないのに、年々の大祈禱とは不審である。——六波羅ノ
序では、かねがね宮中に隠密として入れてある者をして、入念にさぐらせてみると、果た
せるかな、世のつねの加持祈祷でないことがほぼ判明したとある。

従来とて、諸山の高僧に仰せくだして、さまざまな秘法を修せられたことは明らかだが、
過去の行法(ぎょうほう)は、誰々がしたのやら、調べもつかぬ。——しかし、この四月においては、
次のごとく明白、と記述していた。

すなわち、宮中深きところに、秘勅の壇を構え、昼夜、護摩(ごま)を焚き、あぶら汗もりんり
と、顔も焰にして、誦經(ずきよう)、振鈴の精魂(しょうこん)こめた修法僧は

小野ノ文觀僧正。
法勝寺の円觀上人。

および、淨土寺の忠円。
以上の三名と思われる。

また、その必死な祈祷も一様でなく、仏眼金輪五壇ノ法とか、一字五反孔雀經とか、七仏藥師熾盛光、五大虚空藏、六觀音、八字文殊、金剛童子ノ法などという、およそ聞くだに凄まじい呪法ばかりで、読經の声はシワ嗄れ、護摩の煙は御廟を捲き、どんな惡魔怨靈も、世の障碍も除かれるかのような思いを人に抱かしめずにはおかない。——何でこれが、女人のみごもりのためのお祈りであろうか。

察するに、こは、

関東調伏ノ御願。

たるに相違なく、事を、中宮御産にかこつけて、年々呪法の精を凝らし、かたがた、祈祷僧を通じて、叡山そのほかの僧団勢力と、密々の秘契をおすすめあるものと思われる。幕府としても、今にして、善処なくば、北条氏百余年の治もついに危うからんか。——と、両探題からの報は、今にも、鎌倉の廂に、呪法の火が燃えつきでもしそうな急を文書に叫んでいたのであつた。

やがて暁に近かつた。

評議はまだつづけられている。しかし、いくら議しても、問題は原型のままだつた。何の対策もえられぬらしい。

もつとも二、三の試案が出なくはなかつた。その一試案をもつては、内管領の高資とほか一、二名がしばらく席を立つて行く。そして、執權の御座所へ伺い、太守高時の意をきいてまた戻つて来る。——そうしたお座所通いも幾度か、くり返されつつ、しかもなお、「——飛脚のこと、かく対処あるべし」

と、六波羅へ指示すべき幕府方針の一案も見いだしえない有様だつた。

——がようやく、その面にみな濃い疲労をたたえ初めてきた頃、誰からともなく、「では、ひとまず……」

という声が出たのを機しおに、

「ま、そのような所で」

と、すべての顔が頷うなずきを一つにしていた。

さきに、この集議へ下つた執権の言では、「——朝廷が、わが北条氏に抗して、一切の政権を、御手みてに收めんなどとするわけはない。武力がなくば出来ぬことだ。六波羅飛脚はどうかしておる。ばかな取沙汰ではあるぞ。事あらだてるな」と、まつたく楽観的なお旨だった。

だが、この座ではたれ一人、執権の御意そのままを信奉しようとした者はいない。かか

る事態が降ツて湧くと、まことに困ツたものになるが、誰もが執権高時の“君主的暗愚”は、わきまえていた。一応の伺立ても形式にすぎないのである。

そこで、とどのつまり、高時の上意も充分いれたような最後の一案をねツて終つた。そして、

「しからば、これを以て、御裁可を仰ぐことといたせば、御一同は、各 のお支度部屋へ退がつて、暫時、御休息をとられたがよろしからむ」

と、人々に一応の退座をうながしてから、内管領ノ長崎高資と赤橋守時のふたりだけが、そこから執権御座所の方へ先に立つて行つた。

廊、また廊を曲がつて “平沙ノ庭” とよぶ坪の中橋を渡ると、執権御所の 錠口じょうぐち だつた。

——その中橋ノ廊を、二人の影が越えてゆくとき、ちょうど、暗い暁天のどこかを、時鳥が啼いてすぎた。けれど二人の耳には怖らくよそであつたろう。……そしてすぐ、二人が聞いたのは、燭光まだ夜半のまま照り映えている八連の御簾の内から、とつぜん、きやツきやツ……と洩れてきた高時の笑い声だつたことは、確かである。

高時は、女たちを侍らせて、酒宴していた。

いやその相手なき酒宴には、とうに飽いて、杯盤も遠くにやり、茵の横には、脇息がわりに、白絹の夜具を厚く折りかさねていた。それへ凭れて、片脚を投げ出し、今、ひと刻のまどろみから、眼ざめたらしい容子もある。

「や、内管領。ようよういますんだのか」

と、さすが、片足をひつ込め、

「オオ赤橋も一しょよの。なんでまた今ごろまで、長々評議におよんでいたのかよ。これ見い、高時もついに寝所へ入らず仕舞いじや。……いや、卯の花どきのうたた寝はよいものだが、評議待ちでは面白うも何ともないわ」

「太守——」

内管領の高資は、執権のまえに平伏すると、おそるおそる、まず言つた。

「しばらくの間、お人払い願わしゆう存じますが

「ア。そう」

高時は、左右の女たちへ、柔軟な眼をくばつて。

「高資がああ言いおる。そもそもは暫時、遠くへ退がれ。また呼ぶからな」

言下に、女性たちがみな長い黒髪を背に見せつつ静かに退がつてしまつたのを見と

どけると、赤橋守時もまた、高資と共に膝をすすめていた。

「昨夜来、まことに、お心をわざらわせましたが、評定衆一同、ほぼ意見もひとつに、まとまりましたので、御聴許を仰ぎたく、伺候いたしましてござりまする」

「お。それはよかつた。して、どんなふうに」

「なにせい、事、朝廷へのお疑いにかかわりますれば、御説のごとく、あくまで慎重にいたさねば相なりませぬ」

「いうまではない」

「かつは六波羅飛脚とて、文書もんじょだけでは、詳しい分ぶん明みょうもおぼつかなきゆえ、さつそく心ききたる者二名を、京へつかわし、宮中御祈祷の御心みこころは何にあるか、事の真偽を、入念に取りださせんと存じまするが」

「なるほど。京へは誰を派すか」

「雜賀隼人さいかはやと、長井遠とおとうみ江の二名こそよからんと、みな申しますので」

「いいだろう。その議事はゆるす」

「次には」

「次とは、何を」

「南の六波羅ノ探題維貞どのを、急遽、お召返しあらせられますように」「召還せいとか。それやなんのためにじや」

「もし宮中の御祈祷が、関東調伏の御心などにあるといたせば、かならずや、朝廷内外のおうごきには、それ一事にかぎらず、天皇御謀反の兆きざしが、他にもあらねばなりません。……しかし、さような大秘事は、めつたに飛脚状にも託しかねましよう。よつて、維貞どのをお召返しあつて、直々、おきき取りあそばすなれば」

「まあ、待て」

高時は、思案に時を費やしてから、やつとのこと、首を振つた。

「それはよしたがいい」

「御意にかないませぬか」

「さまでには及ばん」

「が、万一小も」

「及ばん、及ばん。……思うてもみい、両六波羅には常詰じょうづめの武士二千は欠くまい。長門、筑紫の探題の兵も、いざといわば、いつでも京へ馳せのぼせよう。関八州の兵はいわゞもがなよ。なんで武力もない朝廷に謀反などを。……いや、もしその声ありとせば、事

を好む人間どものあらぬ流説るせつにちがいないわ。——さような者を取締まるこそ、六波羅の任。まずは、武者所の者二名を調べにつかわす程にしておけい。騒々しいこと、由来、高時は大の嫌いじや。そつと片づけい。すべてそつと」

これは高時として本当をいつたものと思われる。地方の乱だの、重大な人事などに少し頭をつかうと、すぐ疲労を感じるらしく、今も女のような白い指でこめかみの辺を頻りにぐりぐりさせている彼であつた。

彼が自分のこめかみに手をやつて眉をひそめ出すときは、もう触らぬに限るのである。それは彼の思考力の限界と、次に起す小児病的な痳痹かんぺきを予告しているものだつた。

執權相模守高時

といえは、威は朝廷をこえ、世を震わす権力の象徴ぞうめいだったが、実体の彼は、まだ二十三、四にすぎない。しいて周囲から作られた人工の端厳美たんげんびと、みずからの人間性とを、たとえば、牡丹と雑草のツルを一つ鉢にしたように、その身へ絡み合せて、常住の権威の座で、しばしば狂いもがいている人と見れば、むしろ憐れで、何もおかしいことはない。

が、それを世の人は、

「暗愚な君」

と、ひそかに誹る。^{そし。}

ひとり執権幕下にその傾きがあるだけでなく、高時の行状は、いちいち京方にも響いてゆくので、都人みやこびとのあいだですら、

「うつつなき人」

と呼ばれている。

げに、うつつなき人、高時ではあつた。しかし自身が求めてこうなつたわけではない。父は相模守貞時。執権職にあげられたのは、わずか十四のときだつた。

だから国事は、妻の父秋田時頭、内管領長崎円喜（高資の父）などに任せきりで育つたのである。そのうえ多病で、病むといつも大熱を出した。あらぬ口走りや、ふるえを起して、看護みどりや一族をおびやかすので、いよいよ以て、言いなり氣なりに、そのわがままをつらせてた。

よく世上でいう日夜の宴飲えんいん、鬪犬狂い、田楽陶酔といったような遊戯三昧の行状も、この人としては、べつだん世の賢者にたてついたり、身の宿命に反逆しているわけではない。ただ運命に殉じ、運命に弄ばれている彼なのである。

で、日常どこか、病影さが翳していた。

体は小柄で、顔はまろい。そのくせ肉が薄かつた。眉太は、北条氏の血統的な特徴だが、やや尖り鼻^{とが}だし、唇は受け唇の方で、ぽかつと、かなつぼ眼が異様だつた。

頭は青く剃つてゐる。

これは先年、大患のとき、医師が「蓄髪はおよろしからず」と、すすめたことからの剃髪で、べつに出来家^{しゆつけほっしん}発心^{ほっしん}のためではない。

もつとも数年後には、本格に得度をうけて、それ以後は法名^{とうじょう}崇鑑^{そうかん}を名のり、また世上、相模入道どのとも称されたが、まだその頃は、伊吹の道誉とおなじように、青い剃り頭も、つまりは時好の新粧として、清洒^{せいしゃ}を誇つてゐる風に見える。

「では、御誕のほど、再度評定衆へ申しわたし、いさきかも、事、露^{あらわ}ならざるように、計らいおきます」

上意ぜひなしと拝して、やがてのこと、高資は、赤橋守時へ眼くばせして退がりかけた。すると高時が、あわてて言つた。

「赤橋はまだ残つておれ。表への達しは、内管領ひとりでよかろう。赤橋には、足利のせがれ、高氏のことについて、ちと聞きおきたいのじや」

いわるるまま、赤橋守時は、あとに残つて。

「高氏について、おたずねとは、何事にございましょうか」

「ほかでもない」

高時は、どこか大人びのないその眼もとを、くるつと悪戯ツボくかがやかして、「……赤橋、もそつと近う。ま、近う寄つたがいい」

こう、くだけたのは、ただの守護大名や御家人とちがい、赤橋は最も近しい北条血縁の一人なので、内輪の親しみを特に示したものと思われる。

が、守時はどこまで、主従の一線を、慎みぶかくおいて、

「は。おん前に」

とのみ、少々はにじり出たが、この若き太守に狎れるなどの風はどこにもない。

「な、赤橋。足利のせがれがよ、新田や道誉を前におき、問注所にて怯みもなく、身の科とがを申し開いた由は、且、其許そこもとから聞いたが、どうも其許の話は、ただ型のごとき報告であつたようだの」

「はて、なにか遗漏いろうがあつたとでも、仰せられますか」

「そうとも。彼が都で献上の紀州犬を足蹴くだりにした件は、この高時には、まだ聞かせておらなんだぞ。いや、その沙汰は、とうに余の耳に入つていたが、高氏が問注所でなした答弁

を、其許はなぜか、聞かせておらん」

「は、は、は」と、守時は軽くうけて。

「いや、それが御不満でございましたのか。じつは余りに戯れ言めいた答弁なので、わざと、そこだけ申し控えておいたまでで、べつな存意ではございませぬ」

「では、高氏が言つた通りに、申して聞かせい。……食いつく犬には、足を引くが人情なれどとか、申したそくな」

「すでに御存知なので」

「まあいえ。何と高氏が答えおつたか、そこのところを」

「されば。……食いつく犬には、足を引くが人情なれど、執権の君に奉る献上のおん犬と存じたれば、引くは畏れあり、足クビぐらいは惜しからじと、おん犬の口中へ、我から餌えに奉つたまでのことでござる……と、かよう申し述べたのでございました」

「ひやつ、おもしろい。何度聞いても、おもしろい答弁じゃな」

高時が度外どはすれに弾はずむと、女性の声帯そつくりな奇声になる。彼は手を打つて、きやつきやつと笑い出しながら、

「はてさて、愉快な。こよいも評議待ちの徒つれづれ然に、女性たちへその話をしてつかわすと、

女どももみな、腹をかかえて笑いおつた。誰に語つても、笑わぬやつはないぞ」

「この守時の御報告より前に、誰からそれをお聞き知りでございましたか」

「道誉が告げた」

「あ。佐々木が」

「道誉は、近頃また、高氏を賞めちぎつておる。初めは油断ならぬ者と思われたが、まつたくは、よい人間じやと。なにさま、高氏とは、おかしげな男とみゆるの」

「高氏が元服の折は、たしか父貞氏に伴われ、御拝謁をとげおりますゆえ、太守にも、御記憶のあるはずでござりますが」

「いや、忘れた。どんな顔の男やら、覚えもない。……で、其許に申しつくるのじや。十日ほど後、いつもの鳥合ヶ原で、犬合せが催さるるのを知つてか。その折、高氏を伴うて、余の棧敷へ罷まかれ。よいか。其許をひきとめたのは、そのためじや。忘るるなよ」

登子とうこ

その後も、六波羅飛脚は何度かあつた。

だが、政所召集は、当夜の一回きりだつた。——あの直後、『中宮御産祈禱の真相』をさぐる秘命をおびた者が、武者所から京へ急派されたなどの一事は、当然、ごく少数しか知つてはいない。

「なんのこと、人騒がせな」

街の表情は、雨のない黒雲の一過を頭上に見送つたように、すぐ忘れた。

そして、鎌倉の五月は、まつたく、べつな方へ人々の興味をかりたてている。

こここのところ、寄るとさわると、闘犬興行の噂であつた。

月例の上覧闘犬のほか、五月の“犬合せ”は、鎌倉中のお犬祭りといつてよい。鳥合ヶ原には大矢来が結いまわされ、一般人の見物がゆるされる。着かざつた男女は遊山気分で矢来にむらがり、飲んだり唄つたり、また大びらに銭や賭け物を賭け、競馬のような声援や雑鬧ざつとうをみせるのだつた。

いよいよ、その日という朝。

高氏は、大蔵の自邸で、出仕支度していた。

扇ヶ谷から、ここへ移つて来たのも、つい四、五日前である。病床の父貞氏には、

「……長々御心配をおかけ申しました」

と、不孝を詫びたのみで、あらましは、伯父憲房の報告にゆだね、父子らしい語らいは、まだ沁々しみじみとはしていなかつた。

——が、その朝、正装をすますと、高氏は父の病間へ、両手をついた。

「父上、今朝は御氣ぶんは如何ですか。これより行つてまいりますが」

貞氏はめずらしく、白い病床の上に坐つていたが、

「お、出仕か」

顔だけを横に向けて、薄く笑い、そして自分の瘦せた背を支えている家臣へ向つて、「彼かれの狩衣かりぎぬが、襟もとでめくれておる。背すじの曲がりは見ぐるしい。直してやれ」と、いいつけた。

家臣の手が、高氏の後ろへ廻つて、衣紋えもんのゆがみを正してやると、それを見ていた貞氏は、病床からうなずいて、

「よし、よし。……二年見ぬまに、また一ぱい大きくなつたものだ。こう見れば、そちもはや、たれにも劣らぬ一人前の男よ。それにひきかえ、口惜しいが、この貞氏は空蝉うつせみに感じる。いかにせん、この病体」

「なんの、お父上とて、まだ五十路いそじ、御養生次第では」

「は、は、は……。出先につまらんことをいつて悪かつたな。今日の御大合せには、直々、鳥合ヶ原のお棧敷へ向うのか」

「いえ。御上意のほど、何かは存じませんが、その行きがけに、赤橋殿のお館へ立寄つて欲しいとのこと。おそらく守時殿も御同道かと、ぞんじられます」

「そうか。鎌倉諸大名が集まる曠はれての中、わけて太守の御前、いささかの進退にも、よう氣をつけよ。京の小酒屋などとは、場所が違うぞ」

「はははは。大丈夫ですよ、父上、もう高氏とて、昨日の高氏ではございません」

わけもなく彼は笑つてみせた。こんな折にも、ふと心のうちで“置文”が意識される。しかしその“置文”を見た件は、父からも問われていないし、自分からもまだ自白してはいなかつた。

従者八名ほどを連れ、駒の口輪は、いつもの若党右馬介に取らせた。——そして高氏は今、しきりと焦れる鹿毛の手綱を抑えながら、自邸の門から大路へ出て來た。

「若殿。鳥合ヶ原へお出向きの前に、途中、赤橋殿へお立寄りでござりますな」
「む。先頃、上杉家へお使いがあつて、今日は赤橋殿と御一しょに、太守のお棧敷まで罷まかれとのお達しだつた」

「ただのお目通りなら、御所へ召されそうなもの。異な所で拝謁の仰せつけとは、そもそも御用でございましょうか」

「はははは。そちは余程、苦労性よな。呼ばれたら罷るまでのこと。それしかあるまい」街を行くには、人混みを縫うほどだつた。まだ時刻も早からうに、晴れ着の男女が、もう群れをなして、鳥合ヶ原へ急ぎあつていた。

また、その人出の中を、いちばい綺羅きららな武家の輿やら乗馬も織り交ざつて流れて行く。「いや、たいへんな人間だの。この鎌倉も、頼朝公の開府から百五十年。それ以前は、わびしき漁村と、松の岡と、初夏は、山つつじの色ばかりだつたそ娘娘が、こうなるものかなあ、百五十年の年月には」

「あ。若殿、お下馬を」

「何で下馬せねばならぬ?」

「あれ。みな下馬したり、路傍へひざまずいておりまする。執権殿の御愛犬が今し辻を通るものとみえまして」

「さようか」

ばかなと、嘲わらうかと思いのほか、高氏も素直に馬を降りた。そして、往来の流れがもと

の姿にもどるのを待つてから、馬上に返つた。

「——御威勢だな」

一列の犬奉行の人数とその輿とを、高氏は妙な顔して、振向いていた。

かつて京の小酒屋で見たような逞しい闘犬が、別搆えの“御犬輿”の上に担われて、傲然と、路傍の庶民を睥睨へいげいし、武士数十人をしたがえて、今日の曠れの場、鳥合ヶ原へ向つて行くのだ。——それは、人間喪失の憤りを伴う割り切れないおかしさともいえる感情だったが、彼は、ぶいと、駒首をめぐらして、

「急ごう。赤橋殿もお待ちかねぞ」

と、かるく馬の脇腹を、踵かかとで蹴うった。

放生池の水は、つつじの花と緑を映して、今朝も市塵しじんの外にあつた。大鳥居の下で、手綱を右馬介に預け、彼一人で赤橋を渡つて行く。そして、清げな館たちづくり造を木の間に見ながら、一門の前栽を深く通つて、

「お約束の、足利又太郎にござりますが」

と、内へ告げた。

すぐ通されて、客書院に坐す。——庭はすぐ裏の鶴ヶ岡を容れ、落つる水は、放生池の

流れへそそぎ、風ともなく、自然の音楽が屋を繞つて吹き、その微妙な奏でに独りの客も、しばしば飽かぬ心地の中だった。

ほど、あつて。

「お待たせした」

と、あるじの赤橋守時が姿を見せた。かねて、高氏もこの人のことは伯父憲房から聞いている。蔭にあつてのわが恩人であることを。——で、姿を見るや座を退がつて、心からな両手をついた。

「これは、守時様でおわせられますか。足利の部屋住み、又太郎高氏にござりまする」

「おう、お待ちしていた。それになお、先ごろ御出府の件も、まずは無事に落着して、およろしかつたの」

「まつたく以て、お力添えのおかげ。もし御当家のお助けなくば、高氏が身はもとより、国元の始末なども、いかに成り果てたやら知れませぬ」

「いやいや。何も別儀なことをしたわけではない。礼などいわれては、かえつて迷惑」

「はつ。……ふかく御恩とぞんじて今朝のお訪ねを機に、ただ、心の一端までを」

「なんの、守時は北条家のひとり、また、政所の一臣として、なすべき勤めを、ただした

までのことにすぎぬ。なにせい、太守のお若さに乘じ、柳營の内にも、さまざまな人物がおるのでな」

「…………」

「和殿なども、やがては、貞氏どののお跡目を継いで、鎌倉勤番のお身となろうが、君側の人々、北条一族、さらには地方の守護、御家人輩が、かくも狭い御府内に顔つき合せて、寵におもねり、権を争うていることじや。人との交わりなども、以後は、よくよく心せられよ」

「は。胸に銘じておきまする」

「よけいなことだが、父貞氏どのは、あの御病体。……和殿こそは、足利家の大事な若木わかぎだ。……と思うての老婆心」

「ありがとうございます」

「つい見舞うても上げぬが、貞氏どの、どんな御容子かの」

「医師のことばでは、ただ、寒冷の邪氣をさけて、養生のほかない由にござります。が、

昨日今日は、この愚子の煩いも晴れたせいか」

「ムム、お快い方ようろか。御辺の無事を見せられたのが、まず何よりの薬餌やくじであつたとみゆ

る。よかつたのう、高氏どの」

と、守時は、しん底、他人事でないようこびを共にする。

先頃の問注所の対決では、『御簾ノ廂』にいて、蔭ながら高氏の挙止や態度を、つぶさに見聞きしていた守時である。——が、なんでこんなに好意をみせて、今朝の出がけにまで、こう細やかに話しこむのか。

高氏に、守時の心は読めない。だが彼も、北条氏歴代の過去には、こういう正義と愛情に富む為政者にして武人であつた君も、かつては、まま世にあつたことを知つてゐる。

よく民になつかれて、民治と仁政に心した三代の名主北条泰時、武門のつつしみを知つて、宗教や学問を振わせた五代の最明寺時頼、また、元寇げんこうの国難の日をよく耐え凌いだ八代北条時宗——。

ぼんやり、それらの過去の像を胸に描きながら、高氏はまたひそかに「……この赤橋殿のようなお人も」と、その数のうちに入れて、その人の顔を見ていた。

——すると、廊ノ間の簾越しに、ちらと、美しい人影が立つてこここの書院を覗いたように思われた。それは高氏の若い血にすぐ敏感な響きをおこした。えならぬ香氣すら感じられる。——そして彼女の方は、客と知つてすこしうろたえたようであつた。簾のすそに、

手をつかえ、遠くから内へ、こう告げた。

「兄ぎみ様、もうお出ましのお時刻ではございませんか。……おいいつけの湯もたぎらせ、茶堂のお支度もとのえましたが」

〔とうこ
登子か〕

守時は振向いた。

そして遠い所の声のぬしへ。

「そうだな。客まろうど人にお気づまりをさせても悪い。いつそ、そなたの手でこれへ持てまいらぬか」

簾の蔭で、「……はい」と、きれいな答いらえがしたようであつた。その黒髪の人が、廊の奥へ消えてゆくのを、高氏は見もせぬ振りで見送つていた。

「じつは今朝、茶堂に用意させておいたのだが、かえつて、それも迷惑である。いまこれへ運ばせる。さ。おくつろぎあつて」

「かたじけのう存じます。したが、鳥合ヶ原へ罷まかる時刻も、はや遅いほどに思われますが」

「いや、大合せの番組など、どう進もうが、かまいまはせぬ。太守の仰せつけは、単に、和

殿を連れまいれといふだけのこと」

口ぶりでは、守時も闘犬にはまったく興味がないらしい。それだけでも、高氏はこの人を今の幕府主脳の人物並に、その同列とは見たくなかつた。

話のあいだに、二人の侍女が、菓子を供えて退がり、やがてまた、天目台に茶をささげて來た姫と老女がある。

姫は十六、七か、まだ初々しい。高氏の伏し目になつたすぐ前に、海棠のよだな耳を隠した黒髪の簾すだれと白い襟あしが見えていた。……で、彼もあわててその三ツ指へ礼儀を返した。

「お待ち」

守時は、姫だけを、その座にどどめて。

「高氏どの。妹です。お見知りおきを」

「おう、お妹いもうみ君くみで」

「登子。なぜなぜあいさつをせぬ」

「はい。……」

「そなたも常によう話には伺うておる足利殿の御子息じや。存じておろうがの」

いわれないでも、初めから、姫はなにか羞恥はじらい顔におかしさを紛まぎらせて いる姿だつた。高氏はいそいで、もいちど、辞儀をし直した。

「や。申しあれました。高氏です」

「わたくしこそ。……守時の妹、登子と申します」

「御当家へ参じたのは、今朝が初めてですのに、どうして、高氏を御存じなので」

「お従弟いとこさまが、ようお噂まことをなされますゆえ」

「え？ 徒弟が」

高氏はハタとその考え方へ、片手を当てた。頬が熱かつたし、その辺の薄らあばたを、姫に見られたくない氣もしたのである。

「いや。それだけではお分りあるまい」

守時が笑つて助言する。

「——先頃の一夜、上杉ごめくらどのが、ぜひ、この小盲人の琵琶こめくらを聞いてやつてくれいと、ここへ連れてみえた愛らしい小法師がおざつた。それが縁となつて、以後、登子とその覚一とは、大の仲よしとはなつた。登子が、和殿のお噂をよう知るわけも、それでほぼ御合点が出来ましよう」

「では、覚一小法師の身は、いま御当家のお世話に」

「いや、一日も早う、母の尼に会いたいと、それのみ申す可憐しさに、じつは男一人を付けて、きのう足利ノ庄へ旅立たせたばかりで……」

登子を入れて、しばらくは、覚一小法師の身の上ばなしに、守時も高氏も、つい時たつのを忘れていた。

「では、あの子の母者は、草心尼というのですか」

高氏の話に、登子は、その感じやすい年ごろの睫毛まつげを、すぐ、いっぶぱいな露にして聞き入った。

それが、つよく彼を惹いた。

自分のはなしに、この姫が感動したというだけで、高氏は甘美な心地と、満足に浸ひたつた。

「お。——鳥合ヶ原の遠太鼓がしきりに鳴る。高氏どの、そろそろ行こうか」

やつと、守時は腰を上げて、

「登子、行つて来るぞ」

廊へ出た。

彼女は、廊の口までは見送つたが、その先へは来なかつた。高氏が振向くと、まだ渡わたど

殿の角にたたずんでいた。

守時の従者はさすが大勢である。彼は高氏と駒を並べて、なにかと、途々も話しかけた。だが高氏は、ぽつんと答えてはすぐ黙つた。——高氏は、往来へ出てからやつと、登子の容姿や面ざしを、くつきり心に再現して観ることが出来かけていた。

——美人とは人はいうまい。

けれど好きな顔だ。自分には。

あの糸切歯の辺の一本だけが、歯並びからやや外れて、少し笑うと、珠を噛んでいるようにならが見える。その唇もどが好ましいのか。

つぶらな眼、あれもよい。

また、愛くるしいうちにも、聰明さがある。ただの人形美ではない。そして、どちらかといえば面長な。

「や。……？」

愕^{がく}と、彼の眸がすわつた。

ここまでを想い描いて、五月の陽の下を、うつろでいたとき、と或る街辻から、自分が、じつと見ていた女の眼に、どきつと、彼は一瞬の全部を奪われていたのだつた。——

——もし守時と同列でなかつたら、あやうく、

「藤夜叉」

と、声を発していたかもしれない。

いや、声はなくとも、それにひとしいほどな胸騒むなぎいは、眉の凝結におおいえない。たしかに藤夜叉だ。幻覚ではない。あの眼には、忘れえない責めがある。恨みをこめて、自分を刺してくるものがある。

彼女は一人でないらしかつた。

そこらの町屋の棚（店）で何か買い漁りしている仲間を待つてでもいるものか。田楽役者らしい派手粧いの男女が、ほかにも、大勢見えた。

——と思うまもない。彼の駒は、他の駒脚と同步調でそこはすぐ過ぎかけていた。が、彼は、反り身になるまで、振返らされた。なぜなら、ほとんど血の氣のない彼方の白い顔も、眸の矢のとどくかぎり、馬上の彼の背を、追つている——。

なぜか、高氏は恐怖された。

伊吹の悪酔、あの夢中感。

そんな自責だけでもない。——似ぬどころも多いが、どこか登子に似たところがあつた

からだつた。彼は二つの顔を、二つにわけて、あたまに描くことが不可能なほど、みだれていた。

「若殿。御下馬を」

口取の右馬介にいわれて、気がつくと、身はいつか、喧々けんけんたる闘犬の声、見物人のどよめき、耳もと近い太鼓の音など——黄塵こうじん万丈の中に来ていた。

闘犬場はわき返っている。

矢来の外は、数千の見物だつた。一勝負の終るごとに、潮うしおのような声と、黄いろい埃ほこりつむじが、薄く立つ。

諸大名の仮屋かりやは、袖矢来の東西にわかれ、各家それぞれの紋幕が、紋づくしでも見るようにはためきを競ツっていた。

出場の犬はみな、それら諸侯の“持ち犬”であり、あらゆる日頃の飼育と訓練をこめて来たのだ。——勝てば、執権高時の賞辞や、莫大な“賭け物”を一挙につかむ。

熱狂ぶりは、むりもない。

だが、これを。

かりに、圈外の冷静な眼で見たならば、なんとも戯画的な“時代の縮図”と見えたであ

ろう。

時の人すこぶが、春秋の筆法で、後に、評言したものがある。それは頗る要領がいい。次に抜抄を掲げてみる。

——始メ、北条氏ノ世ニ臨ムヤ、民政ヲ旨トシ、民政ノ上ニ立ツ。
 民政ノ要ハ、寡欲クワヨク公平ニアリ。——北条氏モ中興シユノ主ハ、自ラ質粗ト武朴ブボクヲ守リ、
 官ハ從四位ヨリ以上ヲ望マズ、領ハ武藏、相模ノ二国ニ限り、唯、努メテ北人固有ノ
 剛健ニ恃ム。

然ルニ、高時ノ頃ニ至ツテ、政道ハ素ミダレ、起居ハ王侯ヲ模モス。カツテノ執権、最明
 寺時頼ノ母スラ、自ラ破レ障子ヲ繕ツクリウテ、勤儉ノ教ヘヲ垂レタリト聞クソノ松下ノ禪
 尼ノ子孫高時、今ハ數十人ノ妾セフヲ蓄ヘ、妾ニハ領地ヲ分力チ、白拍子、猿樂サルガク、田樂
 俳優ナド、府内二千人ヲ超ユルニイタル。

特ニ、闘犬ノ鎌倉ニ集マルモノ数千匹。名犬ハ税トシテモ貴タフトマレ、一匹ノ価、百貫
 ヲ呼ブモアリ、武門悉コトゴトク、犬ヲ繫ギ、犬ニ仕ヘ、日、暮ルレバ又、宴樂アルノミ。
 カクテ、昨日ノ寡欲ナル武門ハ、驕奢ケウシヤニ変ジ、驕奢ノ門ハ賄賂ワヨロヲヨロコビ、賄賂ハ
 マタ、苛斂カレント誅チユウキウ求メ、諸地方ニ生ム。

茲ニ至ツテ、北条天下ノ民土、全ク、旱天ノ龜裂ニ似タル危殆ヲ呈シ、民、雨ヲ

待ツノ声、今ヤ地ニ満チテ、シカモ声無シ……。

わああつと、またも、どよめきが揚がつていた。竹矢来は揺れうごき、一瞬は犬奉行の勝名のりも聞きとれない。

正面の高時以下、その群臣から、女房棧敷の顔まで、すべて憑かれたもののように見えた。

「さても、えらい噪さわぎ」

高氏は立ち惑つた。

茫として、先へ行く守時の姿もしばしば見失いかけた。もうここでは、藤夜叉のまぼろしも、登子の映像も、彼の頭には完全に搔き消されていた。

「高氏どの、高氏どの。こちらじや。そこを登つてまいられい」

高棧敷の一端で、守時が呼んでいる。あわてて彼はまたその人の姿について行つた。

そして、いわゆる鎌倉山の星月夜にも紛うといわれる群臣の綺羅や女房棧敷のあいだを縫つて、やつと、高時の御座所まで近づいた。——がしかし、守時も彼も、しばらくは、『うつつなき人』のお茵しどねの後に、黙つて控えていたしかなかつた。

ぜひなく、高氏も共に、見物していた。すると、闘犬そのものに熱している者は少なく、多くは、何か“賭け物”を賭けているらしいことが分る。執権の高時すらも、

「負けたわつ」

と叫んで、女房棧敷の方へ、唐織物一巻ひとまきを投げていた。それが宙で解けて、女房たちの手の上で虹を描いたので、わつと、人々が囁はやしたりした。

番数ばんかずも、終りに近づく。

いつまで、控えていては、果てしがないと思つたか、すきを見て、守時が、執権の横顔へ向つて告げていた。

「太守。……先夜仰せつけの高氏を、これへ召しつれましてござりますが」

「オ。来ておつたのか」

「は。さきほどから」

「なぜ早く申さん。して、足利のせがれは、どこに」

高時がきよろきよろする眼の下へ、高氏は、ずっと背かが屈ませて進み出た。

「——おん前に」

「ほう、いたか」

「はつ」

「そちが貞氏の子高氏か。のう赤橋。あまり似ておらんの。……母似か、そちは」「かも知れませぬ」

「幼時、痘瘡ほうそうを病んだか」

「はい、母が地蔵菩薩を信仰しておりますので、子が石地蔵に似たものかと思うております」

「ひやつ、この男」

高時は仰山に笑い反そッて。

「なるほど、おもしろいぞこの男。骨柄も逞しい。な、赤橋。取立てて得させよう。鎌倉大番とし、武者所出仕を命じおけ」

「ありがとうございます」

「が、ただ一つ、堪忍ならぬことがあるわえ。その腹いせに、も一つ命じる。高氏」

「は」

「余が自慢の犬、天下無敵の雷霆らいていと銘づくる犬を曳いて、あの勝負庭の四隅の柱を三度廻つてまいれ。そしてどの犬舍いぬやへつないで戻つたら、余の腹立ちもゆるしてやる」

「おやすいことでござります」

「なに、おやすいことじやと。ムム、そちの脚くびを、餌にやるくらいなつもりなら難しくもあるまい。たたかわら誰ぞ、犬奉行をこれへ呼べ」

呼ばれて来た犬奉行は、すでに前から、執権の意図をのみこんでいた者らしい。すぐ高氏を伴つて、御犬寮へみちびき、たくさんな犬小屋のうちでも、特に牢の如き頑丈な小屋の一つを開いて。

「これが雷霆でござる」

「や。巨きな犬よの」

「癖くせ犬いぬでござれば、お氣をつけて」

と、犬役人は言つた。

氣味の悪い注意の下に、彼の手には、首輪の細鎖ほそくさりがあずけられた。

「……ははあ、さては都の意趣を、犬に代つて晴らさんとする。執権殿のお悪戯いたずらだな」

——むかし、若宮の庭で、九郎冠者義経が、兄頼朝の命で、やむなく大工棟梁だいくとうりょうの馬を曳いたという故事は聞いていたが、鎌倉の群集と諸大名の前で、犬を曳かせられるとは……と、高氏はちょっと感傷を覚えた。

しかし、それは彼の羈かげともなつてはいなかつた。彼は懸命に。「……しツ、しツ」と犬を小屋から追い出そうと努めた。だが犬はなかなか動かない。と思つてゐるうち、いきなり、ぶんつ——と、それこそ雷霆のように、犬は自分の意志で外へ飛び出し、高氏は、勢いに引かれて、よろめきかけた。

高氏は犬好きでない。犬も、犬嫌いな人間はすぐ嗅かぎわかる。

特に雷霆は狼に似て、猜疑さいぎぶかく、この巨犬には犬奉行の配下もみな怖毛おじけをふるつて“犬神”ともよんで敬遠していた。事実、なんだ咬まれているか知れないのだつた。

「ちツ、ちツ」

と高氏は、口を鳴らす。——しかし彼の鎖は、馬を曳くような所作で犬を曳いた。犬神はたちまち彼を小馬鹿にする。勝負庭へ入る“放ち門”までは不承不承歩いたが、もう、テコでも動く態ではない。

「こらつ、歩け、歩かぬか」

彼は自己が憐れになるほど、犬神の“きげんを取り、手くだをつくした。

が、人語は犬の知るところではない、と承知のような踏ふンぞ反りだつた。その鼻ヅラで周りの人間どもをねめまわしている。

事情を知らぬ犬同心や組子の輩は、高氏がこの獰猛な物をどう扱うかと、ただ興味の下に見ているにすぎない。

「えい、面倒な」

つい、持ち前の業腹ごうはらを起したらしい。汗の額ひたいに青筋が立つた。しかし彼は、近ごろ心に誓つてゐる。今日もまた、どんな卑屈にも忍ぼうとしていた。彼は犬神の後ろへ寄つて、その巻き上げつてゐる腹へ両手をまわした。抱きかかえて通ろうとしたのである。

——ぎゃんつ

と、犬神は大魚みたいに刎ね返つた。とつさに、咬まれたのか、高氏の手くびがぱツと鮮血にそまつた。が、高氏は一騎打する武者みたいに、転けつつもすぐ組んで、そのまま放ち門の内へ駆け入つた。

犬神は怒つた。

下へおかれやいな、高氏へ跳びかかつた。彼は身を交わしつつ、鎖の端を持つて、勝負庭の四角よすみに立つてゐる地鎮柱じちんばしらのぐるりを轉まろび轉まろび逃げ廻つた。

こんな図は、『犬合せ何十番』のうちにもない。群集はわけもなく笑いどよめいた。いや、女房棧敷や諸大名の顔は、みな笑い囁はやして鳴りもやまぬ噪さわぎである。わけて高時は、自分

の考えが図に中つたのをよろこんでか、児童のように狂喜した。

「あれ見よ、あれを」

例の奇声で、きやつきやつと笑いこけながら、何か頻りに手を振つて、
「もうよい、もうよい」

叫んでいる風もある。

だが、高氏は止めることが出来ない。三度巡れとの君命は果したわけだが、犬神の牙が
踵を尾つけて離れないのだ。彼はついに鎖を捨てた。そして元の放ち門へ駆け込もうとする
と、再び背へむしや振りつかれた。それを、どう叩きつけて来たかは、あらしの如き人間
の狂氣じみた喊呼かんこにも吹かれて、全く覚えもない。

——とにかく、控えの仮屋まで退がつて来て、右馬介を呼び、
「袖も袴も、この通りぞ。いそいで着がえを」

と、いいつけた。

右馬介は、主のうけた恥辱にふるえ、その顔色を蒼白にしていた。ところへ赤橋守時も
見えた。そして、君公のごきげんは上々の首尾であり、御賞辞とお杯を賜わろうゆえ、す
ぐ御前へ罷るようによつたえ、また、高氏の背をなでては、

「よくなされたの。……御分別、御分別」と、宥りぬいた。

すると、高氏の眼じりから、ぼろと、一すじ白く流れるものがあつた。

波まぎれ

その後、新田義貞は、いちど国もとへ帰つたらしい。だがまもなく、彼の身へは、
六波羅所屬、禁裡大番役

たるべし、という公命が下つていた。

同じ頃、高氏の方へも、

鎌倉御所大番

の任命があつた。――要するにそれもこれも、問注所裁きの結果にちがいなかつた。とかく発火しやすい因縁と接触をもつ、新田足利両者の国情も、この一処置によつて、しばらくは冷却期間となすを得ようか、という政所令と思われる。

とにかく、政所主脳は、ここ常にあたまが痛い。

北方、津軽一帯の乱も、まだ、かたづいていなかつた。

宇都宮や結城の軍が、去年から、しづめに赴いているが、遠いみちのく辺りでは、幕府の権威も、とんと、土軍を 慄しおうふく 伏するには足らぬらしい。

もし、こんな状態が、諸州にひびいて、

「鎌倉の底力も知れたもの」

と、各地の守護、土豪などから、霸府の軍力を疑われだして来たら、それこそは、北条治下の一亀裂である。——というような煩わざわらいも、主脳部にはある。

ために、新田と足利の間も、ここは極力、事なきを策したのだろう。かねがね新田は、大番上洛を望んでいたので、彼には彼の好む花を持たせ、そして、幕府方針としては、一に朝廷のおうごきに、その焦点をしぼつていたのはいうまでもない。

こういう折に。

も少しだだしくいえば、鳥合ヶ原の日から、約一ヵ月ほど後のことだつた。高氏の一身上に、思いがけぬ内輪話が起つていた。

彼の結婚についてであつた。

「——一国の御世嗣ごせいしとして、お年としても、おそいほどです。わけて日頃から大殿には、

あのようなお身弱さ」

伯父上杉憲房の、心からな説きすすめなのである。

「妻を、ですか」

意外そうなその表情は、無意識に出る青春の者の銜てらいにすぎまい。彼も日頃にそれを思わぬことはなかつた。いや、欲しかつた。母ならぬ、べつな女性は欲しかつたのだ。

が、国元の足利といい、鎌倉の屋敷といい、その家庭には、どつちを見ても、今のところでは、そんな気にもなれない冬があつた。それは彼の胸にもあつた。もつと重大な、そして春まだ遠き氷池ひょうちの下の望みがあつた。

「お気はすすみませぬか」

「待つてくれい。いちど父上にも問うてみる。もう迎えてよい頃か、まだ早いか」

「いや大殿には、はや、ご安堵ていの態にすら見えまする」

「父もか」

「なお、お国元の母君からも、折返して、それはよい縁組、ぜひ、すすめて給もれとの、

お文なのです」

「いったい、相手の家は」

「赤橋殿です」

「え。赤橋どの」

「妹君の登子さまを、ぜひ高氏どに娶つてほしいと、守時様直々に、この憲房へ、折入つてのおはなしなので」

「あの妹君をか。……ふうむ、姫もそれは、承知のうえのことなのだろうか」

高氏は急に、本気になつて、考えだした。

「御念までもありませぬ」

憲房には、甥高氏の言が、何とはなく、ほほ笑まれた。

「——登子さまの方でも、わが智君となる人はたれか、それさえご存知なくして、お興入を得心あろうはずもござりませねば」

「……そうだろうか」

高氏は、なお「どうして?」と、それにつけ加えたいほどな気がしていた。彼女がこの高氏をひと目見て……とまでは、うぬ惚れきれない。

それに先方は、執権の近親だ。——家柄では劣らない足利家といえ、こちらは、不遇の底にある地方の一守護。

どうしてだろう？

彼の純情が、怪訝いぶかさせる。

わけて、鳥合ヶ原のこと以来、太守高時のお覚えはたいへんいいそうだが、諸大名の間では、よい笑いぐさになつてゐるこの高氏にちがいない。その笑われ者へ、妹を娶めとつてほしいと申し入れてきた赤橋守時の心は、いつたいどこにあるのか。

「若殿。たいそう、お考え込みでござりまするな」

「はははは」

高氏は笑いだした。

ふと、固着していた自分を、自分から突つ放してみると、ほんとにおかしくなつたらし
い。

「なにせい、生涯のことだからなあ」

「ゞもつともです」

「それに、登子どのが承知とは、ちと信じられなかつたのだ。正直に申せば、わしはある

妹君が嫌いではないが

「では、内々のご承諾を」

「まかせる、伯父上に」

「その由、赤橋殿へお答え申しあげておいても」

「むむ、いいだろう」

「憲房。これで、ほつといたしました」

だが、このことには、もちろん、執権高時の承認も第一に得なければならず、まだごく内々の下約束にすぎなかつた。婚儀の時期、ゆいのう結納などは、すべてこれから運びとなろう。

さはいえ、大蔵の屋敷は、すぐ明るくなつた。

足利ノ庄からは、母の便りが、ひんぱんに来る。病床の父貞氏も、この夏はだいぶお氣色が快い。——いや何よりは、当の高氏を見る家の間も、

「秋になるか、年暮くれになるか、やはり若殿も、その日がお心待ちには違いない。近頃は、われら雑輩の端にまで、よく御冗談など仰つしやるではないか」

という風に變つていた。

しかし、内々の進めも、七月中は一頓挫していた。

後宇多法皇崩ほうぎよ_ふ御の訃が聞えたのは、前月の月の末だった。——当然、鎌倉の柳營でも、

数日間は、音曲は停止され、それからしばらくの間も、諒闇の喪が令されていたからである。

が、初秋が来て。

おちこち、里祭りの多い八月ともなると、街の灯もさやかに、歌や鼓も、聞かれ出した。

「若殿、御書見ですか」

「才、右馬介か。なあに、申すほどな勉学ではない。母上からお便りのたびに、稀れには、和歌草稿を見せよとか、近ごろ禪書は見ておるかなどとあるので、ま、ほんの申しわけだ」「秋の夕です。ちと、浜辺の方でも、お歩きなさいませぬか」

「いいなあ。だが、そちがそんな風流を誘うのはめずらしい。何があるのか」

「は、ないこともございませぬ」

すぐ下は、小壺こつぼノ浦うらか。

波音をたよりに、松ばかりな丘の暗い小道を、高氏は足さぐりで降りかけていた。と。右馬介が後ろで言つた。

「ここらは人も越えませぬ。……若殿、その辺で、ちとご休息なさりませぬか」

「ム。あれに見ゆる亭は？」

「実朝さねとも公の雪見の跡と申し伝えておりますが、今は人も住んではおりません」

「右馬介」

「はつ」

「よりによつて、今宵は妙な所ばかりを、連れ歩くの」

「かりそめのお散歩ひろいにせよ、街を行けば、足利殿の曹司よと、すぐ人目に見られますので」「さても、大名の子の悲哀あわれさだなあ」

「されば、そこはお気のどくな御宿命と申すほかありません。……可惜あたら、二度ない青春も、お気ままには振舞えず、その上、御先祖のむごい御遺命まで負わせ給うて、人知れずのお悩みなどは……、まさに名門のお子の悲哀あわれさというもので」

「な、なにつ」

高氏は、かつと、彼をにらんだ。それは右馬介でさえ、これまで、見たことのない恐こわい顔だつた。

「これ。そちはいま、何といった。……御先祖の御遺命が何とか、聞き捨てならぬことを申しおつたな」

「ま。それへお腰かけ下さりませ。いや亭の濡れ縁も、こう朽ちていては危ない。……」

なたの石にでも」

チリを払つて、ひざまづく姿へ、凝視をくれつつ、高氏は腰をおろして、すこしの間、冷静を努めていた。

「……どうも、今夕の誘いといい、そちの口ぶり、腑におちぬがと、いぶかれたが、さては何ぞ、この高氏に、人なき所で話したいことでもあるのか」

「お察しのとおりでござりまする。かねてから、いつかはと、折を窺うておりましたが、もう一日もゆるがせならぬことも降ツて湧きましたので」

「降ツて湧いたとは」

「つい一昨日——八月十七日の夜——南の六波羅ノ探題おさらぎど 大仏殿(北条維貞) が、ひそかに鎌倉へ召返され、翌日へわたつて、評定衆もぐく限られたお内輪のみで、密々の御協議、ただならぬ態にみえまする」

「……して？」

「仔細は、窺いえませんが、どうやら、宮廷の若公卿や一味の武者輩のうきについて、六波羅にても、はや捨ておかれぬ謀反の兆ちようを確認したものらしく、その処断、打合せなどそのため、急遽、大仏殿のお下向となつたものらしゆうござりまする」

「ま、待て右馬介」

「はつ」

「わしすら知らぬ、いや鎌倉中の御家人たれ一人とてまだ知らぬ、そのような秘議をば、どうして、そちのみが知つておるか」

「もとより探らいでは分りませぬ。この耳で、探りとつたのでござりまする」

「どうして」

「腰に干飯^{ほしへ}を持ち、ひそかに、二日二た晩、評定所の床下に這い込みまいて……」

「ば、ばか者つ」

あたりの松に波音は高い。誰に聞かれる^{おそ}惧れもないとしてか、高氏は、体じゅうの声と怒りを、彼の頭へたたきつけた。

高氏は、激昂して。

「やい右馬介、そちに密偵^{いぬ}を働けなどと、いつ、高氏がいいつけたぞ」

「一存です。まかりちがえば、その場で腹を切るまでと」

「あら、たわけよ。何でそんな愚かな思い立ちを」

「さほど大事。陪臣^{とも}ずれの右馬介が、われから目企むはずもおざらぬ。因は、お胸に問

わせられい」

「何、身の胸に訊けど」

「されば、たれにもお洩らしきぬ大望が、まだ二十はたちの若いお胸には、四六時中の重荷となつておわそうが」

「…………」

「むずかしい世の雲ゆき。しかも、登子さまとの御縁談もあるに、人にもいえぬ大望を負つて、明日へのけわしい中原ちゅうげんの争覇を思うなど、いや、空恐ろしいお行く末だ。そんな御主君を持つたこそ、身の因果よ」

「……な、なんじやと」

高氏は、怪しみを、うめ唄うめきにこめて。

「ううむ。察するに、そちは、この高氏が鑓阿寺ばんなじの“置文”を披見したのを、いつか知つておるのだな。……いや、どうして、それを知つた。たれに聞いたぞ」

「いや、いえませぬ。口を裂かれても、その人のお名だけは」

「そちの知るはずはなし、あの折、たれも御靈屋みたまやにいた者はないはずなのに」「天知る、地知る。人知るとか。……たとえ、置文は焼いて灰となされても」

「しゃッ、この下郎めが」

高氏は、突つ立つやいな、太刀の鐔に、びツと鶴の尾のような神経を見せて。

「おのれ。主人の秘事を嗅ぎ知つて、誇りおるか」

「いや。主家の大事、また若殿が御一生の岐れ目とも存すればこそ」

「だまれつ。世に洩れたら、即座にわが足利家の命脈にもかかわること。それを汝は、盜

み知ッたな」

「いや、決して、世間に口外などはいたしません。この後とても」

「いうなッ。何といおうが、もう追いつかぬ」

将来の惧れと、当面の処置とに、高氏の若さは、当惑の極に立っていた。

「これつ、そちは、わしが童の頃より傳役として付き添い、わしもそちを友とまで思つて來たが、今はゆるせぬ。置文の秘を知つたからには、生かしておけん。……不愍ながら命は貰うぞ。それとも、腹を切るか」

「いやでござりまする」

「いやだ？」

「この右馬介とて、今は死ねませぬ。——若殿に未來の御大望があるごとく、右馬介にも、

したいこと、なさねばならぬ儀が、たくさんにある」

「よしつ、いやと申すなら」

「な、なんとなされます」

彼が、反射的な腰構えをしかけたせつな。

「成敗してやるつ」

太刀のつかへ、高氏の手がかかつた。しかし、右馬介がその肱^{ひじ}を、下からつよく打つたので、高氏は柄^{つか}手^{はず}を外し、次の動作に移る体を欠いたまま、

「おのれつ」

と、ばかり右馬介へ組みついた。右馬介もまた、起ち損じて、それを受けつつどうと、諸^{もろ}仆^{だお}れに、ころがり合つた。

憎めぬ仲の人間でも、反する目的と、鬪争^{もと}の下では、どつち側にも、いつか畜生同士のことを憎しみが、動物本能とおなじ状態におかれていた。

「しゃツ、こやつが」

すぐ組みしかれて、その後頭部を大地にこづかれた高氏は、右馬介の喉輪^{のどわ}を、からくも、片手で締め返しながら、

「小しやくなつ」

と、足では、必死の蹴わざをこころみた。

だが今は、右馬介の方も、

「なにを」

とばかり、^{かしゃく}假借はない。

下のもがきへ、窒息を思わず圧痛を加えつつ、膝の関節で、高氏の右の手くびを、抑えていた。

離せば、自分が殺される。

もうここには、主従もない。

生きたいためには、この人の意志を捻じ伏せずにはおかれないので。右馬介の眼はつり上がつてきた。下の高氏は、なおさらである。赤ぐろい血相から飛び出しそうに出た二つの眼が、上の顔を睨まえている。

お互いのあらい呼吸は、しばし息と息だけで、^{あいう}相搏つた。

そのままのかたちで。

「さ、どうです。……これが戦場ならば、あなたのお首はもうないところですぞ」

「くツ。……く、そ」

間髪、下からの手が、右馬介の横面を、びしツと撲つた。しかしそれだけのものだつた。高氏の四肢は、またたちまち、彼の力に畳みこまれてしまつた。

「およしなさい、そんな児戯は。——十年の余も、あなたの傳役をつとめて來たこの右馬介。お年も下だ。しかし今は、あなたに負けては上げられない」

「ちツ、吐^ほぎいたな」

「若殿、いや、こう呼ぶのも、いまがさいごだ。いまを限りに、右馬介はおいとまを頂戴いたそう。……門地ばかりお高くても、田舎大名の若党勤めなど、先行き何の望みも持てぬ」

「かツ。こやつ、仮面を剥^はいで見せたな」

「おう、これが本体かもしけぬ。右馬介も人間だ」

「下郎つ。正氣か」

「あなたこそ、どうなんです。置文の秘を、この若党に知られたからといって、すぐ成敗するの、生かしておけんなどという主人に、一日たりと、仕えてなどいられるものか」

「よしつ、暇^{いどま}はやる。——離せ、だから離せ」

「いや。その手はお古い。とかく、あなたはまだ乳臭うござる。そんな者が、人知れぬ大望を抱くかと思えばなお末おそろしい。……可惜いのちだ。^{あたら}右馬介は武家奉公をやめ、これから先は何商売なとして金を儲け、都でしたい三昧の婆娑羅^{ばさら}な生涯を送るつもりだ……。又太郎さま、おさらばでおざる」

あらためて、右馬介は、下の顔をじいつと見入った。

その深い眸が、ふと見せたものに、高氏は思わずあつといつた。勿ね起きざま、自分を離れて走り去る影へ、

「待てっ、待つてくれい」

数十歩、夢中で追つた。——しかしもう、右馬介の応え^{こた}はなかつた。そして、彼を吹きめぐる墨のような磯風のどこかで、ふと、思いがけない女の声がしたように思われた。いや明らかに、女は高氏の名を呼んでいた。

「や。誰か？」

あたりを見まわす。——あたりは依然たる磯山の松と、夜の海鳴りのみである。どこにも人は見えない。

「いてなろうか」

高氏は、まだ落着き切れない胸と荒い呼吸のうちで思う。

腹心の家来ですら、生かしておけぬと考えたほどの自分の秘密だ。もし、他人に聞かれていたら、それこそ破滅。

「——いるはずはない。南無三、たれもいるわけはない」

呟いたものの、それは些かも彼の不安をなだめるものにはならなかつた。彼は気を研ぎすまして、後へもどつた。そして、朽ち荒れた雪見ノ亭の破れ廊^{やびさし}やら、そこらの物蔭へ、つぶさな眼を凝らしはじめた。

すると、その眼はすぐ、廃屋の濡れ縁に佇んでいた不幸な者を見つけた。——不幸などは、とつさに、高氏が持つた思いだつた。すぐ自分の心に殺意がひらめいたからである。

しかし、女は逃げもしない。怖らくは、獣が小鳥に迫るような害意にみちた彼の眼光が、じわじわ彼女へ近づいていたろうが、魅せられてでもいるように、彼女はうつとり迎えていた。

「おうつ、そなたは」

高氏が仰天して言つたとき、彼女も初めて、ぶると、全身を戦慄につきぬかれた。

それは本能的に動作しかけたものを、一瞬、抑止したような姿に見えた。が、それに代

る凝視の眼もとから、涙のすじが、さんぜんと、白い面を濡らし、微かにわななきを刻む唇を、今にも咽せ破りそうにしていた。

「ふ、ふじ夜叉。……そなたは、藤夜叉ではないか」

「小殿」

彼女は、やつと、言いえたように。

「お忘れではございませんでしたか」

「何で忘れようぞ」

「伊吹の夜のことも」

「いうまではない」

彼女は、とたんに泣いた。うれしいつ、と叫んだのも、その面も、双つの袖でつつんでしまった。そして、高氏の胸へ、仆れかかるように寄つて來た。

「しつ、しずかに」

高氏は、人を憚れた。おそ世間はばかが憚られた。だが、とどろな波音の夜こそ、偉せだつた。過ぎし年の、覚えをまざと甦よみがえらせるその黒髪を搔い抱いたまま、共に濡れ縁へ崩折れた。

「——今、誰か、わしを呼んだ気がしたが、それは、そなたの声だつたか」

「ええ。……藤夜叉でございました」

「すりや、不思議。何ともふしぎぞ。そなたは、どうしてここにいたか」「みな、あの御家来の」

「えつ、右馬介が？」

「親身しんみになつて、何から何まで、計ろうて下されたお情けでござりまする。その上、こよいもここで待てば、きっと小殿にお会い出来ようぞと」

「や、や。右馬介が、そういつたか。……では、今宵、わしを誘うたのは、そなたと諜しめし合つての上か。はてなあ？」

高氏は、右馬介が去つた遠くの闇へ、ふたたび、眸をさまよわせた。そして、その右馬介の本心も、藤夜叉も、自分もあわせて、すべてが分らなくなつていた。

不知哉丸
いさやまる

藤夜叉は、すぐ黙つた。

女にとつて、恍惚の沈黙は、何にもまさる官能の言葉だつた。

この至上な一瞬ときを、われから素みだしたくないのであろう。

もう、みち足りているすべてのように、彼女は、高氏の肩の辺へ、濡れた片頬をのせたまま、

「……小殿」

なんども、唇をふるわせていた。

「逢いたかつた。お逢いしたかつた。……もう離れないで」

二人のうえに、虚空こくうの波音だけがあつた。しかし高氏の胸を吹きめぐっているものは、彼女の恍惚の甘美とは、およそ両極ほどな相違があつた。

「藤夜叉」

「あい」

「いつからそなたは、この鎌倉へ來ていたのか」

「五月の頃でございました」

「鳥合ヶ原に、犬合せのあつた日、辻に見えたの」

「小殿も、私の姿に、お気づきだったでございましょう」

「知っていた。……が何せい、人目の中」

「その人前でなかつたら、私こそお馬の脇へ、すがりついたかもしません。だのに小殿は無情い。私は恨んでおりました」

「恨んでいたと」

「だつて、おなじ鎌倉にいるど存知のくせに、あれきり何のお沙汰も下さいますね」

「したが、宿所は知れぬし」

「でも常々、道誉さまとは、御所の内でも、お会いなされておいででしょうに」

「なに。それでは、宿所は佐々木道誉の屋敷うちか」

「はい。新座の田楽衆の皆と一しょに」

「では、太守（高時）の上覽に供えんため、道誉が近江から連れ下つて来たのだな」

「ええ。義父おやの花夜叉や仲間の衆は、御上覽田楽を誉れとして下りましたが、私だけは、この鎌倉下りこそ、もう自分の舞台のさいごぞと、ひそかに誓うてまいりました」

「どうして」

「ひよつとしたら、鎌倉では小殿にお目にかかりよう。もし、また、鎌倉においてなかつたら、仲間の一座を脱けて、足利ノ庄とやらまでも、お慕いして行こうと、心をきめておりましたから」

「えつ、足利までも来る気でいたのか」

無意識なものが、つい、彼女の重さを、邪けんに自分の肩から外^{はず}しかけた。しかし、彼女の黒髪は、濡れた面を卷いたまま、すぐまたひたと、高氏の胸へすがり寄つて、息も熱く。

「……小殿。……小殿にお見せしたかつたのです。どうしても」

「わしに、見せたいとは」

「小殿のお子です」

「げえつ」

「お別れした後、藤夜叉が生んだ小殿のお子です。ひと目、父御^{ててご}にお会わせしたさに」

「そ……それは。どうして」

「どうしてとは」

「ふ、ふじ夜叉。わしは、わしは信じられない。父とよばれる自分だなどとは」

「でも、あの夜、形見ぞといつて下された地蔵菩薩のお守札こそ、思えば、こうなる約束事の護符だったのございましょう。いまでは、父御のお手に代つて、和子の肌守札^{はだまもり}となつておりまする」

いわれてから気がついたのである。藤夜叉のからだには、乳の香がある。産んだのは、本当にちがいない。

だが、たつた一と夜のことが？

高氏は疑つた。子の父だと、宣告されたことにもゾッとしたのである。無性に拒否の理由を探す狼狽ろうぱいのみが先立つて「……そうだつたか」と、素直に服しきれないのだつた。「……？」

男が、どんな反射を示すだろうか。父を肯定して、よろこぶだろうか、否か。女の瞬間の眸は、男のうろたえ顔から些細な心のかげも見のがすまいとしていた。その眼には、恋もなければ、寛容もない。真剣である。

男は、それに、恥すくみを覚えた。拒否の心理は、意氣地なく、男の心の内がわに閉塞へいそくされる。

高氏は、首を垂れた。——思わず洩れる吐息とともに、天の授命を、受けとつていた。

「ね、小殿」

彼女はすぐ姿態しなをかえた。やわらげて見せた眸は、女の大きな安心を意味していた。

「……まだ。ほんとには、お胸に落ちきれないんでしょう。ごむりはありません。けれど、

今夜こそは、おはなしができます。ああ、どんなに今日を待つたでしょう。やはり私は生きていてよかつた。ねえ小殿、お聞きくださいませ。あれからのこと』

×

×

×

×

藤夜叉が生んだ一子は、男子であつた。

伊吹ノ城から遠からぬ近江国犬上郡の不知哉川の田樂村で生れたので、名も『不知哉丸』と、かりに名けられた。

当然、義父の花夜叉は、たれの胤たねかを、知らずにはおかない。——初めは、藤夜叉もかくしぬいたが、彼女が、嬰兒あかごに持たせた地蔵菩薩の守り袋は、足利織の摺箔すりはくに足利家の紋を浮文様うきもんようとしてあつた。つつみきれず、ついに高氏の名も明かされた。で、義父の花夜叉は、彼女とはちがつた意味で、不知哉丸を可愛がつた。

一座の旅歩きにも、不知哉丸は、田楽仲間の手や背なかで、交わりばんこにあやされた。樂屋では、笛や太鼓も、のべつ聞える。——母の藤夜叉も、乳をやるときのほか、ほとんど、なんの世話もなしに、くりくり育つた。

この秋で、二年七カ月、かぞえ年で、三つになる。

ところが、その後もよく召される伊吹ノ館で、或る夜、藤夜叉は、道譽の寝所から逃げ出した。彼の伽^{とぎ}を拒んで、夜中、獨りで村へ逃げ帰つたのである。以後、彼女だけは、お城田楽には、病といつて、出なかつた。

だから、こんどの鎌倉下りには、べつな不安もあつたのだが、和子の父高氏を尋ねるにはと、一座へ加わつて来たのであつた。夢は夢でなく、ある日、高氏の姿を辻で見たい。

明日は。今日は。

と次の機会を待つた。しかし男からは、文使い^{ふづか}もない。彼女は毎日のように、足利屋敷のある大蔵の辻を、朝夕にうろついていた。——奇怪な女と、あやしまれたのもむりはない。

だが、幸か不幸か、彼女を捕えた屋敷の武士は、以前一度、彼女も伊吹で会つてゐる一色右馬介だったのである。

「や。伊吹ノ館で見た、あの折の、田楽女ではないか」

彼女を引つ捕えてみたとたんには、右馬介も、単にこう、意外を感じたのみだつた。が。ふた言三言、藤夜叉が口走りつづける訴えを聞くと、彼は、愕然^{がくぜん}と色をなした。深いわけを訊くにも、大蔵の屋敷付近は、適当な場所でないと、とつさに考え、

「藤どの。こう来い」

彼女を拉らつして、足早に、人通りもない大臣山だいじんやまのすそ辺りまで連れて来て、「若殿のお子を育てておるとか。すりや本当か。藤どの、委細を話せ、さあ聞こう」と、夏草の背丈にかくれて坐りあつた。

彼は、藤夜叉の語り出ることに、およそは、疑いをもたなかつた。——すでに、過ぐる年の一、伊吹の一夜の出来事から——あの梅壠うめおぼろな物蔭のことでも、彼はみな知つていた。高氏へは、知らない顔をしていたに過ぎない。

だから、驚きはしなかつた。

大名の息子である。

一人や二人の落胤おとしごなど、あとから廻つて、どうにでも処置するのがお傳役もりやくの役目とも心得ていた。けれど彼は、しん底から、

「……弱つた」

と、今は当惑顔だつた。

折ふし、まずい。

赤橋登子との縁談はすすんでいる。

いや、その方には糊塗の手段もなくはない。だが気になるのは、佐々木道誉の名が出たことである。花夜叉一座の田楽役者は、いわば道誉の領内に住むお抱え役者も同様なのだ。

「道誉の耳へは、^{こと}義父^{おや}の花夜叉が告げたのか」

その点、特に質^{ただ}すと、

「いいえ」

とは言いつつも、

「なにせい、一座の仲間も大勢ですから、どう隠しても」

と、そこは藤夜叉も口を濁す風なのである。

そもそも、右馬介は、初対面の初めから、あの婆娑羅大名の若入道を、あらゆる面で、警戒していた。

果たしてと、わが眼を誇りたい。

彼は、鶴^{ねえ}だと思う。——志を朝廷によせ、若公卿のあいだに密々の交友をもつかと思え

ば、この鎌倉にあつては、執權お氣に入り第一の御用人だ。まさに神変の鶴といつていい。

かつて、高氏のうけた蟄居の難にしろ、思うに、鶴は無関係ではない。——土岐左近と共に、高氏の遊歴の帰途を擁^{よう}して、高氏を味方にひき入れんとこころみて失敗した一件が、

道誉にとつては、後日、深刻な悔いとなつたに違ひなかろう。

もし、高氏に吹ふい聴ちようされたら。

それを恐れて、道誉が先手を打つたものと、近頃では、やつと真相も読まれて來た。そして、その惧れも消えたので、近來はまたそろそろ、高氏へ媚態びたいを呈して來ているものと、右馬介はにらんでいる。

「その佐々木道誉が？」

あれこれ、思い合せると、主人思いな右馬介の心には、鶴の住む一朧だの黒雲のなかに、主君の運命も、藤夜叉すがが生んだ不知哉丸の未来も、すべて、呪われているものに見えた。「ここは一番、大覺悟のときか」

彼は、生涯の思案を一ときには凝らした。

右馬介の苦惱にひきかえ、藤夜叉の縋りすがは、

「どうぞ、小殿に会わせて」

とのみ、ただただ、単純だつた。

「……この鎌倉へ來たのも、和子の不知哉丸を、ひと目、父御の小殿にお見せしたいと念じてのこと。お慈悲と思うて」

手を合せる一団いちだんさで、

「大蔵のお屋敷へ、近づくなと仰つしやるなら、近づきもいたしません。その代りに、小殿とお話しできるよい折を……。お情けです、御恩に着ます。お手引きして給わりませ」

と、ふし拝む。

右馬介もついに約した。

「すぐとは、計らえぬが」

と、念をおしえたうえで。

「きっと、高氏さまにお会わせしよう。したが藤どの。たとえ、お子をな生した仲であろうと、若殿の御地位もと、お許わきまの身分、そこは、弁えておいでだろうな」

「はい、それはもう」

「わけて、何につけても、耳目のうるさいこの御府内。若殿のお為をねが希ねがい、和子さまの行く末大事と思うなれば」

「おことばまでもなく、軽はずみはいたしませぬ」

「ならば、右馬介も、きっと、どんなお力にもなるう。……が、今日のところは、帰られい」

「わかりました。……けれど、あなたも大蔵のお屋敷内。これから先の御相談は尤もな不安であつた。彼女は仲間の田楽一座と合宿だし、しかも宿所は、佐々木道誉の邸内である。

そこで、右馬介は言つた。——時と日をきめて、折々に大臣山のすそで出会い、やがてよい機会に、お会わせしようと。

で、以後も何度か、藤夜叉とは落ちあつていた。もちろん、高氏には、何も告げてない。七月も終りかけていた。

上杉憲房が、赤橋殿を訪う日が多かつた。登子と高氏との結婚が、そのたび進められているものと、彼は見てゐる。それもまた、気が気ではない。

その上、高氏の結婚ばなし^{めと}が、国元の足利へも伝えられたか否かのとたんに、右馬介宛てに来た厳封の一書は、一そう彼の悩みを深刻にした。

彼宛てに、国の密使がもたらした書簡は、高氏の弟、直義からるもので、それには、

“……兄は赤橋殿の妹君を娶る^{めと}そうだが、赤橋殿は執権の近親、いささか疑いなきをえない。なにか政治的な底意でもある縁組みではないのか。兄の将来を塞ぐ^{ふさ}おそれがありはしないか。よくよく、心して眞実をたしかめよ”

と、ある。

兄の大事と、万一をおもう弟直義の真情が、眼にみるごとく、あふれていた。しかし、文中には、情愛の上だけでなく、『兄高氏の大望』という秘事にもふれていた。直義は、その事実を、眼に見たとも書いているのである。

——かつて高氏が、鏹阿寺の御靈屋に入り、家時公の置文を見た上で、それを焼き捨ててしまつたことを、直義は「——眼に見た」と自己の書中にいつて、こんどの縁組みを、政略的なものではないかと心配し、兄の大望にとつて、将来の患わざらいならんと、蔭で案じているものらしい。

これでみれば、直義もまた、置文の内容を知つて、兄高氏と共に、ひそかな大望を胸に培つちかつていたことは明瞭である。

思うに直義は、自分の知つた兄の大望を、右馬介もまだ知るまいと思つて、憂いの余り、密書にして、注意してきたものにちがいなかつた。

だが、右馬介とて、幼少からの傳もりやく役だ。朝夕、そばに仕えている身、ここへ来ての高氏の人間的な変化にも、

「はてな？」

と思わせられた例は一再でないし、薄々には、とうに意中も察していたのだった。そして、

「思い立たれたからには、百難に当つても、初志をひるがえすお方ではない」

ことも、よく知つてゐる彼だけに、共にこうまで、覚悟も決めていたのである。

「しよせんは一生、お主の賭ける夢なら、その大望へ、自分の生涯も投げ込もう。成るも破るるも、御運と一つに」

しかし、夢は一つでも。

なにしろ、事が事だけに、それについては、一切寡黙な主従であつた。触れるのも、恐ろしく、ただ暗黙のうちに、右馬介は右馬介ひとりの胸で、将来を計り、現在を見まわしていた。そして、時節の来るまでは、主幹の高氏の根を守つて、そのたくましい伸びを待つこそ、自分の任としていたのだった。

ところが周囲は、無風でいない。また、時勢の風も、しきりに迅い。

彼が、藤夜叉の問題で、頭をなやましていたこの数日中の出来事であつた。

都に何事が起つたらしく、南ノ探題が、極秘裡に、幕府のうちへ帰つてゐる。——と
いう事實を小耳にはさみ、

「すわ、異変？」

と、彼は必然な事態をそれに直感した。

干飯(ほし)を持つて、評定所の床下へ忍ぶという彼の突飛に似た行動は、その後だつた。――

それも、藤夜叉と不知哉丸のことなどが、彼の悩みになつていなかつたら、おそらく彼も、そこまでの冒険には出なかつたろう。だが、彼はもう自分の決意に怯(ひる)まなかつた。

「予感は中(あた)つた。時は来たのだ。お主のそばに仕えているより、もう、時節はこの右馬介に、べつな使命を命じている」

次の日。

いつもの場所で、彼は藤夜叉をさとして、不知哉丸の身を、自分の手に預けてほしいと、真心をみせて言つた。

御成人の後は、かならず御父子のおん名のり合いもさせ、御一族にも加えるように、この右馬介が、首をかけて保証する、誓書も書く。――すべては、高氏さまのためと思うて、耐えてくれと、説いたのであつた。

もちろん、藤夜叉は、容易には手放すまい。もしどうしても、彼女が得心せねば、不びんながらと、さいごの手段も腹にきめていたのである。……が、ついには藤夜叉も、涙な

がら承知した。それが、小殿のため、和子の将来のためならば、と。

義父^{おや}の花夜叉にも黙つて、彼女は譟^{しめ}し合せた場所へ不知哉丸を抱えて來た。そして泣く泣く右馬介の手へ渡した。——右馬介は、馴れぬ手に、和子を抱き取つて、別れぎわにこういった。

「あすの宵、小壺の上の小道にてお待ちなされ。きっと、高氏さまとお会い出来よう。右馬介が、お供して、かならずお連れ申しあげる」

伊吹以来のこと、この鎌倉へ来てからのこと、藤夜叉の積もるはなしは、ここで、とぎれた。

自分の語る自分に泣かれて、彼女はしばらく、声もない。

高氏は、ただ一言、

「ああ、そとは知らなんだ」

憮然として、そう呟いたきりだつた。

とはいゝ、その短い一語には、大きな悔恨がこもつていた。

「……そして、右馬介は、どこへ行くといつていたか。……藤夜叉、そのことは、そなたにも告げなかつたか」

「いえ、それだけは、たしかな先を聞いております。和子さまを負つて、ひとまず、三河の吉良ノ庄へ行くつもりじゃ、と」

「そうか。三河の幡^は豆郡^{はす}は足利党の領所。わしの血縁もおれば、右馬介の生家もある。さては、不知哉丸の身は、そこの生家において、ひそかに養育するつもりとみゆる」

「そこなれば、もう、御成人の日までも、安心なもの。——自分は、身軽となつて都へ上り、死んだ氣で、数年はお主にも誰にも、姿は見せまいと、誓うようにいつておりました」

「数年は姿を見せぬと」

「ええ、何やら、大きなお望みもあつてとか」

高氏は、そう聞いて、いよいよ右馬介めが、この高氏の大望のため、その先頭を切つたなど思つた。

しかし、右馬介も右馬介だ、それならばそれと、なぜ意中を打明けて行かなかつたか、と惜しく思う。彼の苦衷^{くちゅう}はべつとして、それは恨む。

——いや読めた。

さいぜん自分を下に組み敷いて暴言を吐いたとき、右馬介の眼には、あやしい涙が光っていた。

彼はわざと、こよいのような主従の袂別をして去つたのだ。大望の前途は、容易でない。それを励まそうための、鞭むちと諫言かんげんを、あんな態度でして去つたものにちがいあるまい……。

〔藤夜叉〕

そつ然と、彼は何かに衝きのめされていた。急に、彼女のそばを離れて立つた。
「わしは帰る。またいつの日かに会おう。それまでは」

「えつ、もう」

「わしが迎えてやるまで、義父おやの花夜叉の許にいるがよい。無情つれないと、恨むか」

「お恨みします。せつかくお目にかかれたのに」

「ままにならぬ。ああ、そこがままにならぬのだ。藤夜叉、そなたも右馬介のように、わしを思うなら、しばらく、遠のいて、わしに姿を見せずにいてくれい」

「な、なぜでござります」

「いまにわかる」

「では、和子の身は」

「わしの子でないとはいわぬ」

「それだけですか」

「成人の後、右馬介がそなたに誓つた通りにしてやる。そなたもきっと高氏のそばに迎え取らせる。よいか、聞きわけてくれたろうな」

「小殿。藤夜叉は、そんな出世を望んでいるのではないませぬ。ええもう、お情けない」
藤夜叉は、離さじと、しがみついた。彼女には、高氏はない庶民の強さと野性の奔放がある。いや子を産んでから、ひときわ熟れてきた女体があつた。またしても高氏は、伊吹の悔いを、松風の闇についくり返した。——彼女の烈しい求欲の腕に負けた。

ふたりの体に、そこの朽ちた板縁の松落葉が、いっぱい、たかつた。
彼女の、みち足りたかのような眸に、現はまだ完全に還つていない。しどけない黒髪の肩を、半ば起しかけながらも、

「小殿、もいちど抱いて。……いつまでも、こうしてみたい」

うわ言のような甘えを口走つて、まだ、消えやらぬ夢を追つていた。

高氏は急に、袖や袴の枯れ松葉を打ち払つた。ついでに、彼女の手をも払い退けて、「もう、夜もおそい。帰らねば」と、露骨に言つた。

その素気ない物言い振りには、腹立たしいばかりな、男の自己嫌悪がかくされていた。

初めての伊吹の夜には「……酒がなせる業だ」と自分をあざむく口実も持てた。しかし今夜は、酒のせいではない。

それと、あの初めての夜の藤夜叉は、自身に加えられた男の行為に、恐れと、悲しみと、憎しみの涙ですらあつたのに、今夜の彼女は、その復讐を果していいのか、まるで以前の彼女とは、いぶき息吹がちがう。

あの頃よりも熟れた女体は、男をとらえて、男の怯みや困惑も、ひる快げこころよに見ているような殘忍さである。

その淵ふちに、高氏は溺れた。酒のせいでもなく、あきらかに、自分が自分に負けたのだと思つた。……それが自分の厭いわしくなる所以ゆえんだつた。

「たれにも黙つて、夕刻、屋敷を出たばかり。家来どもも案じていよう。はや帰らねばならぬ。……藤夜叉、そなたも戻れ」

「帰りまする」

やつと、彼女も身づくりして、その黒髪を、指で梳すいた。

「そして、小殿とは、いつまたお会いできますか」

「さいぜんも言つたではないか。——時が来たら、きっと、そなたも不知哉丸も、身のそばに迎えてやると」

「待つことは、悲しみますまい。けれど、いつ頃と思つていたらよいのでしょうか」

「さあ、それは」

「一年か二年の先には」

「いや分らぬ」

「では、御大望が成つたあかつきにはと、仰つしやるのでござりますか」

「なに」

きっと、眼かどを硬めて。

「そなた、大望とは、どんな意味で申したな?」

「お身にかかる大事、つい知りました」

「聞いたのか、右馬介に」

「いいえ、ここで待つうちに」

藤夜叉の眼は賢い。大勢の小屋衆の中で揉まれてきた鋭敏さだろうか。高氏の眉に、すぐその胸を読んで、

「が、御安心なされませ。小殿のお不為になるようなこと、死んでも、人に洩らすことではございませぬ」

いわれぬ先に、われからいつた。

「……けれどただ、余りに先は待ちきれませぬ。今は、今夜のような短い逢う瀬もうれしいのです。小殿、どうぞ近い折に、またお会いして給わりませ」

「む、会わいでか。また会おう」

どこか、うわの空の顔を持ちながら、つい、高氏の口に出てしまつた。女の反逆を惧れる心が手つだつていた。

大蔵の屋敷では、その夜、高氏の姿が見えぬというので、侍部屋を中心に、騒いでいた。夕方、右馬介を供につれ、浜の方へ出られたという者もある。そこへ、夜も更けてから、ひどく疲れた容子で、しかも、高氏ただ一人で、帰つて来たのであつた。

「どうなされました。なにか喧嘩沙汰にでも？」

人々は、眉をひらきながらも、高氏の姿を繞めぐつて、物々しく訊ねあつた。

「いや、そんな仔細ではないが、右馬介めは、不届きな奴だ。こよい限り勘當かんどうしたぞ。よも姿は見せまいが、以後近づけるな」

「えつ、あの忠義者を、御勘当とはまた、いかなるわけで」
 「言語道断」

とはいってみせたが、高氏には、それ以上の嘘が、とつさには出ず、「いや、いまはいうまい、やがて分る。なにせい、多年の傅役ながら、快からぬことあれば、三河の郷里へ追つ返した。みなもさよう心得おけ」

そのまま、すんずん居間に入りかけたが、ふと足をかえて、奥の廊へ向つて行つた。
 「宿直の者」

「おう、これは」

「起たいでもよい。父上は、おやすみか」

「御意で」

「なにか、お案じの態には見えなんだか」

「べつに」

「お夜食も、お薬餌も、おかわりもなく上がられたな」

「はつ。日にまし、お眠りもふかく拝されます」

「そうか。もし、夜半のお眼ざめに、お訊ねだつたら、高氏はどうに戻つていたと、お案

じなさらぬよう申しておけよ」

彼は、簾^すへ向つて、毎夜のとおりな礼をした後、自分の寝所へ入つて枕についた。——ようやく彼は、自分の居る所に自分を置き得たこちだつた。そして、みだれた頭のうちも、ととのえていた。

まつ先に、不知哉丸のことが、胸を衝く。

しよせん人間は獸でない。

予期もしない戯れの結果にせよ、産みの腹がたれにせよ、彼のうちにも、いやおうのない若い父性が必然にわいていた。それは途方に暮れるほどな負担と重たい感慨だつたが、しかし、すべての処置はいま、右馬介が負つて行つてくれた——と思う。

「……右馬介、よく致してくれた。忘れはおかぬ」
ぼたと、枕に涙の音がした。

あくる朝。

「若殿。右馬介の部屋に、かような物がございましたが」と、小侍の一人が差出した。

見ると、

御拝借の書冊返上 若殿御直おじきへ。と上包みに書いてある。

人なき折、解いてみると、書物の間には、国元の直義から右馬介あてに来た書簡二通と、また、彼自身の詫び状が挿んはさんであつた。

「……おお、弟直義も、いつかわしの胸を知つていたのか。右馬介といい、直義といい、そこまで、わしに同意だつたか」

読みつつ、彼はまた涙を新たにした。そして、涙にぬれた左の手頸をふと見入つた。彼の手頸には、この五月以前にはなかつた痣あざができていた。それは鎌倉中の人々に嘲わられた日の記念だつた。執権高時の愛犬“犬神”に咬まれた黒い歯型の痣なのである。

青空文庫情報

底本：「私本太平記（一）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年2月11日第1刷発行

2010（平成22）年4月1日第32刷発行

※副題は底本では、「あしかが帖《じょう》」となっています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンンドイースト

2012年11月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

私本太平記

あしかが帖

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>